愛知県埋蔵文化財センター調査報告書　第 177 集

へ　き　ほん　ごう　ビー

日置本郷 B 遺跡

2012

公益財団法人　愛知県教育・スポーツ振興財団
愛 知 県 埋 蔵 文 化 財 セ ン タ ー

序

日置本郷Ｂ遺跡の所在する愛知県愛西市は、平成１７年４月１日に愛知県の西県境を流れる木曽川左岸に位置する旧海部郡佐織町・佐屋町・八開村・立田村の二町二村が合併してできた市であり、古くから木曽川下流の水郷地帯である風土を活かした文化が営まれてきた地域であります。

今回調査しました日置本郷Ｂ遺跡は中世から続く日置八幡宮に隣接する遺跡であり、日置八幡宮には鎌倉時代の木造獅子頭をはじめとする文化財が伝えられており、毎年二月に執り行われる管粥神事は市の民俗無形文化財として貴重なものであります。今回の調査により、奈良時代の集落と中世の日置荘に関連すると思われる遺構・遺物が確認できたことは、平安時代後期に成立したとされる尾張国日置荘の成り立ちを考えるのみではなく、愛知県の尾張地域南西部の歴史を考える上でも貴重な成果を得ることができたものと思われます。本書の調査成果が歴史資料として広く活用され、埋蔵文化財に関する御理解を深める一助となれば幸いに思います。

最後になりましたが、発掘調査の実施にあたり、地元住民の方々をはじめ，関係者及び関係諸機関の御理解と御協力を頂きましたことに対し、厚く御礼申し上げる次第であります。

平成 24 年３月

公益財団法人　愛知県教育・スポーツ振興財団
理事長　加　藤　　高　明

例　言

1.本書は愛知県愛西市日置町本郷に所在する日置本郷Ｂ遺跡の発掘調査報告書である。

2.調査は、県道富島津島線自転車歩行者道設置工事に伴う事前調査として、愛知県建設部道路維持課海部建設事務所より愛知県教育委員会を通じて委託を受けた財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団愛知県埋蔵文化財センターが実施した。

3.調査期間は平成21年12月から平成22年２月までで、1,100㎡の面積を行った。整理および報告書作成作業は平成23年４月から平成24年３月にかけて実施した。

4.調査担当者は、宮腰健司（本センター調査研究主任専門員）である。発掘調査は朝日航洋株式会社の支援を受けて実施した。

5.調査にあたっては、愛知県教育委員会生涯学習課文化財保護室、愛知県埋蔵文化財調査センター、愛知県建設部道路維持課海部建設事務所、愛西市教育委員会、愛西市日置町自治会をはじめとする、多くの関係諸機関のご協力を得た。

6.本書の編集は蔭山誠一が担当したが、執筆は愛知県埋蔵文化財センターの宮腰健司（第２章）・鬼頭剛（付論の３・４－（１）・６－（１）・６－（３））・蔭山誠一（第１章・第３章・第５章・付論の１・２・４－（２）・６－（２）・６－（３））と株式会社パレオ・ラボの中村健太郎（第４章Ａ）・黒沼保子（第４章Ｂ）により分担した。また付論では愛西市教育委員会の石田泰弘氏に執筆の御協力を頂いた（付論の５）。

7.整理作業は蔭山誠一が担当した。整理作業は伊藤あけみ・木下由貴子・小島裕子・鈴木好美・滝　智美・時田典子・前田弘子・三浦里美・山田有美子（整理補助員）の協力を得て実施した。動物遺体の同定、木製品の樹種同定を株式会社パレオ・ラボに、遺物の実測・トレース作業は株式会社イビソクに委託して実施した。また、写真撮影を写真工房遊（金子知久）に委託した。

8.本書に提示した座標数値は、国土交通省に定められた平面直角座標第Ⅶ系に準拠する。海抜表記は東京湾平均海面（T.P.）の数値である。

9.遺物は、本書に掲載された遺物図版番号を登録番号として整理した。

10.写真や図面等の調査記録は愛知県埋蔵文化財センターで保管している。

〒498-0017　愛知県弥富市前ヶ須町野方802-24（0567-67-4161）

11.出土遺物は愛知県埋蔵文化財調査センターで保管している。

〒498-0017　愛知県弥富市前ヶ須町野方802-24（0567-67-4164）

12.本書の作成に至るまでに、本センター専門委員・職員をはじめとして下記の方々から多くのご指導とご助言を受けている。記して感謝したい。（五十音順：敬称略）

石田泰弘・愛西市文化財審議議員（平成21年12月24日に視察）・北村和宏・福岡猛志

目　次

第１章　調査の概要

１．調査の経緯と方法…… 1

２．遺跡の立地と歴史的環境 …… 1

第２章　遺　構

１．09A 区 …… 6

２．09B 区 …… 24

３．09C 区 …… 26

第３章　出土遺物

１．土器・陶磁器 …… 31

２．土製品…… 50

３．金属製品…… 52

４．石製品…… 54

５．木製品…… 54

第４章　自然科学分析

A．日置本郷 B 遺跡の動物遺体同定 …… 59

B．日置本郷 B 遺跡出土木製品の樹種同定…… 61

第５章　総　括

１．遺構の変遷 …… 63

２．遺物の出土分布傾向…… 63

３．日置本郷 B 遺跡の特徴…… 66

付　論

日置の古地理環境 …… 67

写真図版　1 ～ 7　遺構、写真図版 8 ～ 14　出土遺物

抄　録

挿図・挿表目次

図 1　日置本郷 B 遺跡位置図 …… 1
図 2　日置本郷 B 遺跡調査区位置図 …… 2
図 3　日置本郷 B 遺跡周辺の遺跡…… 4
図 4　09A 区遺構平面図 1 …… 7
図 5　09A 区遺構平面図 2 …… 8
図 6　09A 区遺構平面図 3 …… 9
図 7　09A 区土層断面図 1 …… 10
図 8　09A 区土層断面図　2 …… 11
図 9　09A 区土層断面図 3 …… 12
図 10　09A 区土層断面図 4 …… 13
図 11　09A 区土層断面図 5 …… 14
図 12　09Aa 区 001NR・002NR 遺構図 …… 15
図 13　09Aa 区 007SD・008SK 遺構図 …… 16
図 14　09Aa 区 014SK・015SK 遺構図 …… 17
図 15　09Ac 区 018SE・044SK 遺構図　1 …… 18
図 16　09Ac 区 018SE・044SK 遺構図 2 …… 19
図 17　09Ab 区 073SK・074SK・082SK・089SK 遺構図 …… 19
図 18　09Ab 区 054SK 遺構図 …… 20
図 19　09Ab 区 095SB 遺構図…… 21
図 20　09Ac 区 041SD・043SK 遺構図…… 22
図 21　09Ac 区 021SK・025SK・035SD・037SK・039SK・040SK・049SK 遺構図　1 …… 23
図 22　09Ac 区 021SK・025SK・035SD・037SK・039SK・040SK・049SK 遺構図 2 …… 24
図 23　09Ad 区 094SD・096NR 遺構図 …… 25
図 24　09B 区遺構図 …… 27
図 25　09C 区遺構図　1 …… 28
図 26　09C 区遺構図　2 …… 29
図 27　09C 区遺構図　3 …… 30
図 28　09A 区遺構出土土器・陶磁器 1…… 32
図 29　09A 区遺構出土土器・陶磁器 2…… 33
図 30　09A 区遺構出土土器・陶磁器 3…… 34
図 31　09A 区遺構出土土器・陶磁器 4、09Aa 区包含層出土土器・陶磁器 1 …… 36
図 32　09Aa 区包含層出土土器・陶磁器 2、09Ab 区包含層出土土器・陶磁器 1 … 38
図 33　09Ab 区包含層出土土器・陶磁器 2 … 39
図 34　09Ab 区包含層出土土器・陶磁器 3、09Ac 区包含層出土土器・陶磁器 1 …… 40
図 35　09Ac 区包含層出土土器・陶磁器 2 … 42
図 36　09Ac 区包含層出土土器・陶磁器 3 …… 44
図 37　09Ad 区包含層出土土器・陶磁器 1 … 45
図 38　09Ad 区包含層出土土器・陶磁器 2、09A 区その他包含層・表土出土土器・陶磁器 1 …… 46
図 39　09A 区表土出土土器・陶磁器 2、09Ba 区出土土器・陶磁器…… 48
図 40　09Bb 区・09Bc 区・09Ca 区～09Ce 区包含層出土土器・陶磁器…… 49
図 41　09Ce 区・09Cf 区出土土器・陶磁器 ‥ 50
図 42　土錘 …… 51
図 43　陶丸 …… 52
図 44　加工円盤…… 53
図 45　銅銭 …… 54
図 46　鉄製品など…… 55
図 47　鍛冶関連資料・銅滴 …… 56
図 48　石製品 …… 57
図 49　木製品 …… 58
図 50　日置本郷 B 遺跡出土木製品の光学顕微鏡写真 …… 62
図 51　日置本郷 B 遺跡の遺構変遷…… 64
図 52　日置本郷 B 遺跡の遺物出土分布…… 65
図 53　愛西市日置町周辺の地籍図 …… 68
図 54　愛西市日置町周辺の等高線図 …… 71
図 55　地籍図と等高線図の対応関係 …… 74
図 56　天明五已年天王川御堀割御普請已來之図…… 77
図 57　日置の古地理環境想定図…… 81

表 1　周辺の遺跡一覧 …… 5
表 2　貝類と甲殻類一覧 …… 59
表 3　爬虫類・両生類・魚類・哺乳類一覧… 60
表 4　樹種同定結果一覧 …… 61

第１章　調査の概要

１．調査の経緯と方法（図１・図２）

日置本郷Ｂ遺跡は愛知県愛西市日置町本郷に所在する遺跡で、名古屋鉄道尾西線日比野駅より東 300m の地点に位置する。本遺跡は旧佐屋町埋蔵文化財包蔵地一覧に日置本郷Ｂ遺跡（遺跡番号 37005）として周知の遺跡として知られており、愛知県建設部道路維持課海部建設事務所による県道富島津島線自転車歩行者道設置に伴い、遺跡の事前調査をする必要性が認められた。そこで愛知県埋蔵文化財調査センターによる試掘調査が平成 20 年９月に行われた結果、奈良時代から室町時代の遺構・遺物が全ての試掘調査地点において確認された。この為、県道富島津島線自転車歩行者道設置事業に先立って発掘調査が計画され、愛知県教育委員会を通じて委託を受けた財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団愛知県埋蔵文化財センターが平成 21 年 12 月から平成 22 年２月の期間で、発掘調査を実施した。

調査面積は 1,100㎡で、調査地点は日置八幡宮の西側の地点をＡ区、日置八幡宮の南側をＢ区・Ｃ区の大きく３ヶ所に分け、また発掘調査に伴う排土置場等の設置の為、Ａ区を北から Aa 区～ Ad 区の４ヶ所（調査期間は平成 21 年 12 月～平成 22 年２月上旬）に、Ｂ区を北から Ba 区～ Bc 区の３ヶ所（調査期間は平成 22 年２月中旬）に、Ｃ区を Ca 区～ Cc 区の３ヶ所（調査期間は平成 22 年２月中旬～下旬）に細分して調査を行った。発掘調査の終了後、平成 23 年度に出土遺物の整理作業と報告書作成を行った。

調査方法はショベルカーにて表土となる旧水田埋立て土と旧水田耕作土、近世以後の造成土と思われる堆積を除去した後、発掘調査作業（人力による遺構検出・遺構検出状況の写真撮影・人力による遺構掘削・遺構の完掘状況の写真撮影・遺構の測量と観察・地元関係者への説明会など）を順次行い、作業終了次第埋め戻した。

遺跡の地元説明会は平成 22 年１月 30 日（土）に行い、90 名の参加者を得た。

２．遺跡の立地と歴史的環境（図３・表１）

日置本郷Ｂ遺跡（５）の所在する愛知県愛西市は、濃尾平野を流れる木曽川の左岸にあり、木曽川により形成された沖積平野の三角州地帯にあり、日置本郷Ｂ遺跡のある海部郡南西部の愛西市南部（旧海部郡佐屋町から立田村）から弥富市にかけては三角州地帯の南縁部に位置する。さらに木曽川左岸になる尾張地域では、かつての木曽

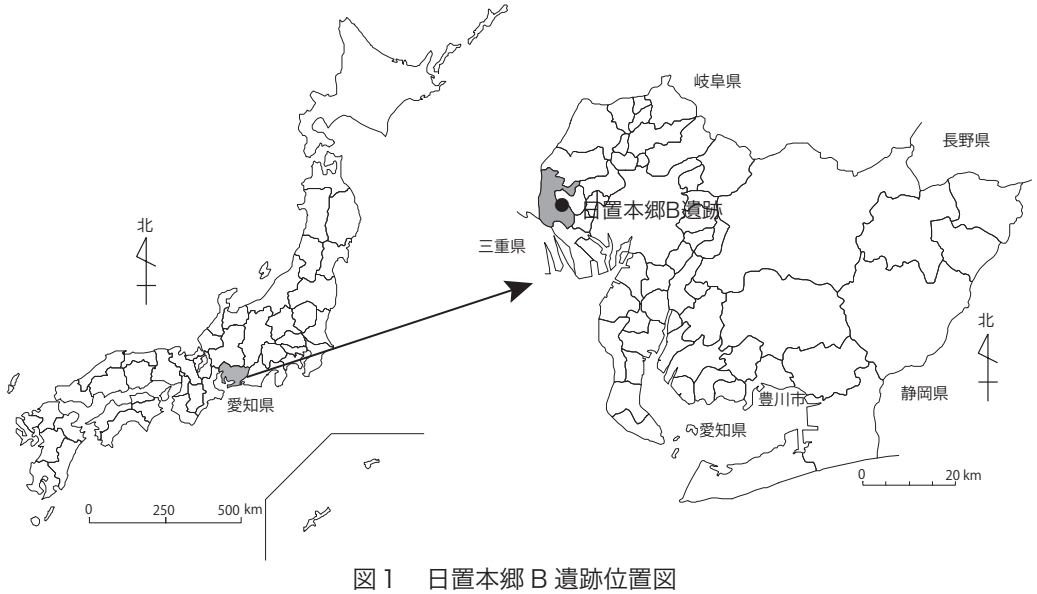


図１　日置本郷Ｂ遺跡位置図

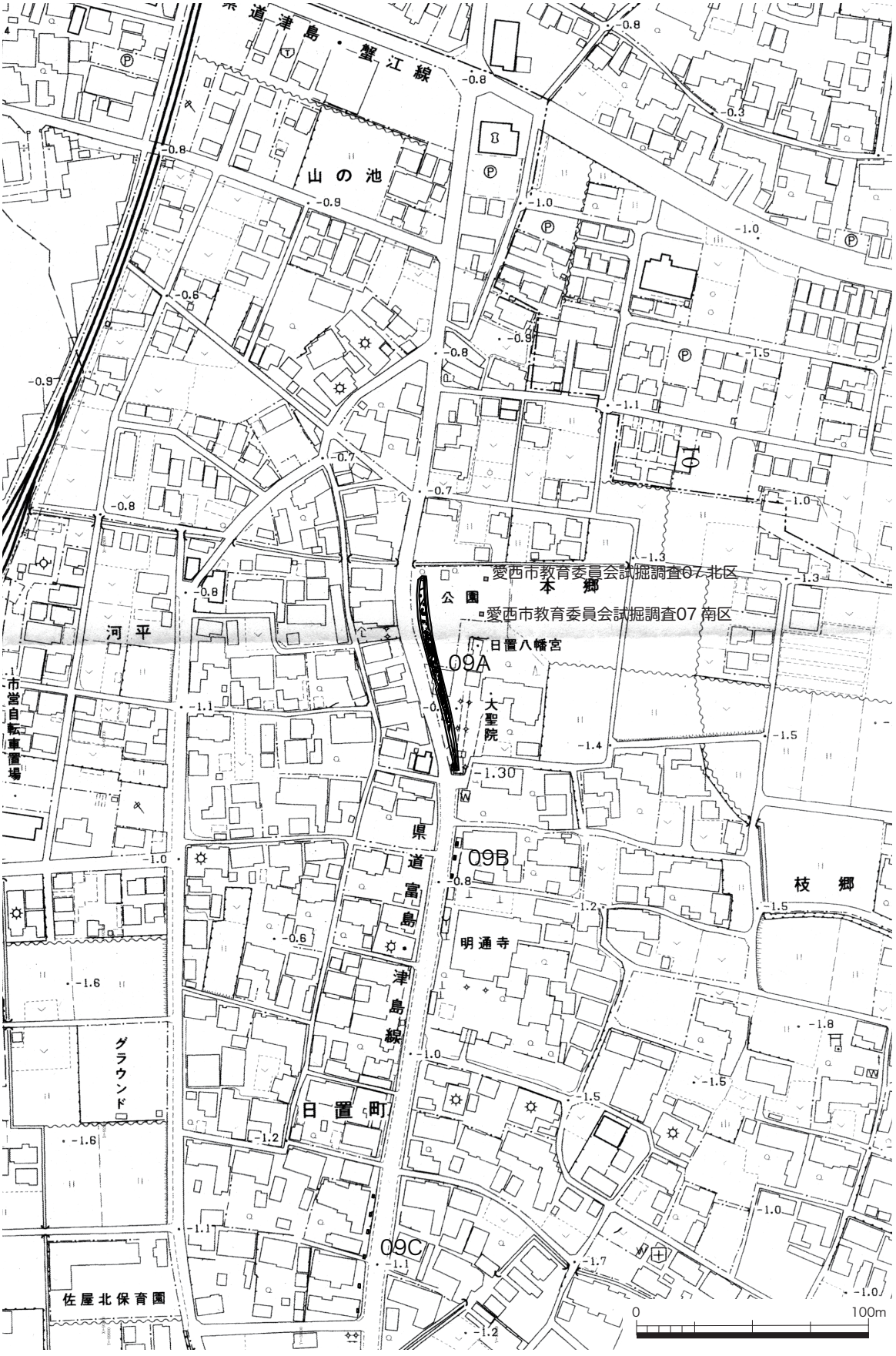


図２　日置本郷 B 遺跡調査区位置図　(1/2,500)

川支流である数多くの小河川が流下し自然堤防と後背湿地を形成しており、現在は愛西市南東部を津島市域から流れてくる善太川が北西から南東に流れて愛西市の南を画しており、海部郡蟹江町の南端にて日光川に合流して伊勢湾に注いでいる。また現在は廃川となっている佐屋川が愛西市北西部から日置本郷Ｂ遺跡の西 1.75km の地点を大正 11 年まで南に流れており、弥富市西部にて木曽川に合流していた。

次に、日置本郷Ｂ遺跡（第２図５、以下遺跡番号を付す）周辺の遺跡の形成時期を概観してみると、当遺跡周辺では縄文海進以後弥生時代に至るまでこの地域全体が海面下と考えられており、縄文時代以前の遺跡や遺物は確認されていない。

当遺跡周辺の地域において人間の活動が確認されるのは、愛西市南河田町にある弥生時代中期前葉の八竜遺跡（73）で、少数であるが貝殻施文の太頸壺形土器の口縁部が出土している。続く遺跡としては, 津島市に所在する寺野遺跡（117）や宇治遺跡（119）が弥生時代中期中葉から中期後葉に営まれており、弥生時代後期から古墳時代前期前半にかけての遺跡としてＳ字状口縁台付甕形土器やパレススタイル土器などが出土した愛西市東西野遺跡（92）や多孔銅鏃が確認されている津島市埋田遺跡（132）が著名である。

古墳時代の遺跡では、三角縁神獣鏡が伝えられている奥津社古墳（67）、櫛描き文様のある円筒埴輪が出土した諸桑遺跡（72）、二条の周溝に囲まれた円墳がみつかっている川田遺跡（79）が存在する。特に川田遺跡では、発掘調査によって、５世紀の円筒形埴輪と形象埴輪、須恵器などが出土しており（愛知県埋蔵文化財センター 2002）、形象埴輪には武人や巫女、馬など多様な形態のものがあり、古墳時代中期の文化がこの地域にも伝わり、乗馬等も営んだ首長が存在していたことがわかる。

つづく古代の遺跡は、日置本郷Ｂ遺跡周辺の愛西市日置町から柚木町や佐屋町にかけて濃密に分布しており、一つの遺跡群と捉えることが可能と思われる。同様な古代の遺跡群として稲沢市三宅廃寺（149）のある稲沢市南西部（旧中島郡平和町南東部）からあま市美和町蜂須賀の一帯、北浦遺跡（68）や古御堂遺跡（69）のある愛西市千引町から先に述べた諸桑遺跡（72）のある愛西市諸桑町を経て埋田遺跡（132）のある津島市埋田町にかけての一帯、稲沢市尾張国分寺と同笵の軒丸瓦・軒平瓦・鬼瓦が指摘されている淵高廃寺（91）のある愛西市西川端町周辺の一帯、観音町Ａ遺跡（129）のある津島市観音町から愛西市町方町の一帯なども、古代の遺跡が集中して分布しており、地域的まとまりが存在していた可能性が考えられる。また渕高廃寺と同じく尾張国分寺と同范関係を持つ軒瓦が出土している宗玄坊廃寺（62）が愛西市宮地町にて確認されており、遺跡の究明が待たれる。

中世では、古代の遺跡よりさらに遺跡が増加し、古代の遺跡とほぼ重なる地点とさらに津島市本町周辺の津島神社の門前町につながる遺跡群の存在や愛西市南部の西保町・東保町・西條町・東條町・大井町の東西約４km にわたる遺跡群が認められるようになる。本格的な発掘調査が待たれるところであるが、中世の遺跡群は日置荘や櫟江荘をはじめとする荘園や地名に残る中世国衙領としての保などの存在を反映している可能性があるものである。また、現在は木曽川河床になっている地点において、高畑水没遺跡や日原水没遺跡などが存在する。

当遺跡周辺は、日置八幡宮所蔵の懸仏に残る紀年銘より尾張国日置荘との関係が深い遺跡と考えられ、また近世には佐屋街道が遺跡の西方を通っていた可能性が高い。なお、日置八幡宮には先に述べた中世の懸仏や木造獅子頭が所蔵されている。

図３　日置本郷 B 遺跡周辺の遺跡（1/50,000）

表１　周辺の遺跡一覧

番号	遺跡名	時代
1	山の池遺跡	
2	日置八幡社遺跡	弥生・古代～近世
3	中田面遺跡	中世～近世
4	日置本郷A遺跡	古代・近世
5	日置本郷B遺跡	中世
6	河平遺跡	中世～近世
7	八百歩遺跡	古代～中世
8	上川田A遺跡	中世～近世
9	上川田B遺跡	中世
10	二橋A遺跡	近世
11	二橋B遺跡	古代～中世
12	米野A遺跡	古代～中世
13	白山遺跡	中世
14	米野B遺跡	中世
15	稲葉本郷遺跡	中世～近世
16	西出割遺跡	近世
17	松原遺跡	古代～中世
18	五反田遺跡	中世
19	内佐屋郷遺跡	古代～中世
20	砂山A遺跡	弥生～中世
21	砂山B遺跡	古代～中世
22	庄屋敷遺跡	古代～中世
23	元屋敷遺跡	古代～中世
24	河原遺跡	中世
25	道西遺跡	近世
26	道東A遺跡	中世～近世
27	道東B遺跡	中世～近世
28	道東C遺跡	中世～近世
29	宅地A遺跡	近世
30	宅地B遺跡	古代
31	北河原A遺跡	中世～近世
32	星の宮遺跡	中世～近世
33	東河原遺跡	中世～近世
34	権右遺跡	中世
35	四町遺跡	中世～近世
36	西善太遺跡	中世～近世
37	東善太遺跡	中世～近世
38	西条八幡社遺跡	中世～近世
39	伊重A遺跡	中世～近世
40	伊重B遺跡	中世～近世
41	井桁A遺跡	中世～近世
42	東条八幡社遺跡	中世
43	井桁B遺跡	中世～近世
44	北川原B遺跡	中世～近世
45	長楽寺遺跡	中世～近世
46	城之内遺跡	中世～近世
47	西浦遺跡	中世
48	大之内遺跡	中世
49	観音堂遺跡	中世
50	屋敷割遺跡	中世～近世
51	堤外新田遺跡	近世
52	森西遺跡	中世
53	本西遺跡	近世
54	天王塚	
55	浦田面A遺跡	中世～近世
56	浦田面B遺跡	中世～近世
57	前田面遺跡	中世～近世
58	郷浦遺跡	中世
59	郷西遺跡	中世～近世
60	郷前遺跡	中世
61	石田古墳	古墳
62	宗玄坊廃寺	古代
63	大御堂遺跡	平安～鎌倉
64	上栄遺跡	平安
65	東川遺跡	平安～鎌倉
66	屋敷遺跡	弥生～平安
67	奥津社古墳	古墳
68	北浦遺跡	古墳～室町
69	古御堂遺跡	平安
70	堅切遺跡	古墳
71	諸桑廃寺	奈良～平安
72	諸桑遺跡	弥生～鎌倉
73	八竜遺跡	弥生～鎌倉
74	諸桑古墳	古墳
75	高台遺跡	平安
76	西浦遺跡	平安
77	郷前遺跡	平安～鎌倉
78	八町遺跡	古墳～鎌倉
79	川田遺跡	平安～鎌倉
80	前田遺跡	平安～鎌倉
81	所司原遺跡	古墳
82	水無野遺跡	古墳～室町
83	鵜廻遺跡	古墳
84	高砂遺跡	古墳
85	姥ヶ森古墳	古墳
86	久田遺跡	古墳～平安
87	坪堀遺跡	古墳～平安
88	江東遺跡	古墳
89	山中遺跡	弥生～奈良
90	川原前遺跡	奈良
91	渕高廃寺	奈良
92	東西野遺跡	弥生～奈良
93	犬城遺跡	古代～中世
94	井堀・野崎遺跡	古墳～中世
95	野崎北出遺跡	古墳～中世
96	中町屋遺跡	古墳～中世
97	西溝口遺跡	古墳～中世
98	畑西・池ノ頭遺跡	古墳～中世
99	溝口城跡	安土桃山
100	今村・井波遺跡	弥生～中世
101	今村・西出遺跡	弥生～中世
102	五丁遺跡	古代～中世
103	坂田屋敷遺跡	古代～中世
104	宮郭遺跡	古代～中世
105	道外遺跡	古代～中世
106	大辻遺跡	古墳・中世
107	蓮原遺跡	古墳～中世
108	古道遺跡	古代～中世
109	瀬戸遺跡	中世
110	大寺遺跡	弥生～鎌倉
111	下郷合遺跡	弥生
112	蜂須賀城館跡	室町～江戸
113	札掛遺跡	弥生～安土桃山
114	富士社古墳周辺遺跡	古墳～中世
115	牧野遺跡	弥生～鎌倉
116	寺野廃寺（新光寺跡）	白鳳
117	寺野遺跡	弥生～江戸
118	蛭間遺跡	弥生～室町
119	宇治遺跡	古墳～室町
120	観音堂遺跡	古墳～江戸
121	亀田遺跡	平安～室町
122	旭羊毛構内遺跡	平安～室町
123	大木遺跡	古墳～室町
124	元屋敷遺跡	弥生～鎌倉
125	光正寺遺跡	弥生～室町
126	越津古墳	古墳
127	中一色遺跡	鎌倉～江戸
128	観音町B遺跡	古墳～江戸
129	観音町A遺跡	古墳
130	本町遺跡	平安～鎌倉
131	今市場遺跡	鎌倉
132	埋田遺跡	弥生～鎌倉
133	深坪遺跡	鎌倉～室町
134	南本町遺跡	弥生～江戸
135	愛宕遺跡	鎌倉～室町
136	橘町遺跡	古墳中期
137	本町遺跡	中世～近世
138	本町3丁目遺跡	中世～近世
139	杁前町2丁目遺跡	中世
140	杁前町3丁目遺跡	中世
141	愛宕町4丁目遺跡	中世
142	丸渕遺跡	古墳
143	西海塚遺跡	古墳・中世
144	山王遺跡	古代～中世
145	上屋敷遺跡	中世
146	出口遺跡	古代～中世
147	折口遺跡	中世
148	郷内遺跡	古代～中世
149	三宅廃寺	奈良
150	横枕遺跡	弥生～中世
151	巽屋敷遺跡	古代
152	細野古墳	古墳
153	角野古墳	古墳

＜参考文献＞

吉田富夫 1968『津島市埋田遺跡発掘調査報告』津島市史編纂委員会

伊藤晃雄 1970.3「寺野遺跡」『津島市史資料編１』津島市教育委員会

岩野見司　1976.9「愛知県海部郡佐織町奥津社の三角縁神獣鏡についいて」『考古学雑誌 62-2』

岩野見司・服部元之 1987「第６編考古」『佐織町史』資料編２、佐織町役場

佐織町史編さん委員会 1987『佐織町史』通史編、佐織町役場

赤塚次郎他 1991.6「寺野遺跡の出土遺物について」『考古学フォーラム２』愛知考古学談話会

服部元之 1996「第７編考古」『八開村史』資料編２、八開村役場

服部元之 1996「第二章考古」『佐屋町史』通史編、佐屋町史編纂委員会

木川正夫・蔭山誠一他 2002『川田遺跡』『愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 103 集』財団法人愛知県埋蔵文化財センター

蔭山誠一 2008「愛知県日置八幡宮所蔵木造獅子頭考」『愛知県埋蔵文化財センター研究紀要』第９号、愛知県埋蔵文化財センター

第２章　遺　構

１．09 A区

09 A区は日置八幡宮の西側に設けられた、東西幅約６m、南北長約100mの細長い調査区である。調査は自動車等の進入路と廃土処理の関係から、Aa・Ab・Ac・Adの４区に分けて行った。旧地形は、Ab区からAc区にかけては微高地部に、Aa区の北から西側と、Ac区南半からAd区は低地部となる。微高地部分の基本層序は、上位より表土―黒（暗）褐色砂質シルト―黄褐色シルト―黒褐色砂質シルト―暗灰色砂質シルト・黄褐色シルト質中粒砂（基盤）で、黒褐色砂質シルト層に古代から中世の遺物が包含される。この包含層である黒褐色砂質シルト層は概ね上下２層に区分されるが、明瞭な時期差は確認できなかった。遺構は標高−180 ～−200cmの黒褐色砂質シルト層下位及び基盤上面で検出している（図４～図11）。

（１）09Aa区

001NR・002NR　001NRは灰オリーブ色中粒砂を、002NRは黒褐色砂質シルトを埋土とする落ち込み。両遺構とも低地部の肩に堆積した一連の埋土で、北側を流れる水路の旧流路に切られている。001NRが中世後半期から江戸時代、002NRが中世後半期になる（図12）。

003SK　黒褐色砂質シルトを埋土とする隅丸方形を呈する土坑で、長径100cm、短径81cm、深さ17cmを測る。山茶碗の碗・小皿片、灰釉陶器片が上位・下位の区別無く出土している（写真図版２）。時期は中世後半期と思われる。

005SK　003SKと同様に黒褐色砂質シルトを埋土とする隅丸方形の土坑で、長径102cm、短径85cm、深さ18cmを測る。極めて脆い骨小片が上位から中位にかけて出土している。平面形は基盤面において検出したが、骨片の出土高をみると、黒褐色砂質シルト層内に堀肩があると推定される（写真図版２）。時期は中世後半期と思われる。

006SK　暗オリーブ褐色砂質シルトを埋土とする、長径26cm、短径25cm、深さ25cmの円形を呈する土坑で、上位で焼土塊が出土している。007SDに切られる。

007SD　幅118cm、深さ12cmを測り、断面が逆台形を呈する。須恵器・土師器甕が出土する（図13）。

008SK　埋土を観察すると、オリーブ黒色砂質シルトを切るように黒褐色砂質シルトが堆積しており、２基の土坑が重なっている可能性がある。黒褐色砂質シルトの最上位で、14世紀中頃の完形に近い北部系陶器の小皿（図28-43）が出土している（図13）。

014SK・015SK　包含層である黒褐色砂質シルト層を掘削中に銅銭が出土したが、地点を確認することはできなかった。その後周囲を精査したところ、014SKの南東部1/2と、その下位で015SKを検出した。014SKは長径135cm、短径120cm、深さ15cmの円形または隅丸方形を呈する土坑、015SKは長径158cm、短径135cm、深さ37cmの隅丸方形を呈する土坑で、015SK上位よりひとかたまりの状態でM01 ～ M10の10枚の銅銭が出土している。また黒褐色砂質シルト層を掘削中に出土した12枚の銅銭（図45-M11 ～ M22については、上部の014SKに所属する可能性が高い（図14・写真図版２）。時期は中世前半期か。

（２）09Ab区

054SK　長径384cmを測る大型の土坑。底面には激しい凹凸があり、掘り込み面からみると、近代以降の遺構と考えられる（図18）。

095SB　061SK・062SK・063SK・066SK・077SK・078SKで構成される南北２間×東西２間以上の掘立柱建物で、柱間は南北が約150cm、東西が約135cmとなる。柱穴は径23 ～ 44cm、深さ17 ～ 31cmを測り、061SK・063SK・066SKでは断面の観察で柱痕が確認されている。またやや位置がずれる055SKをこの建物の柱穴とすると、総柱の掘立柱建物になる可能性も考えられる（図19・写真図版３）。時期は063SK出土の北部系陶器の山茶碗を考えると、14世紀後

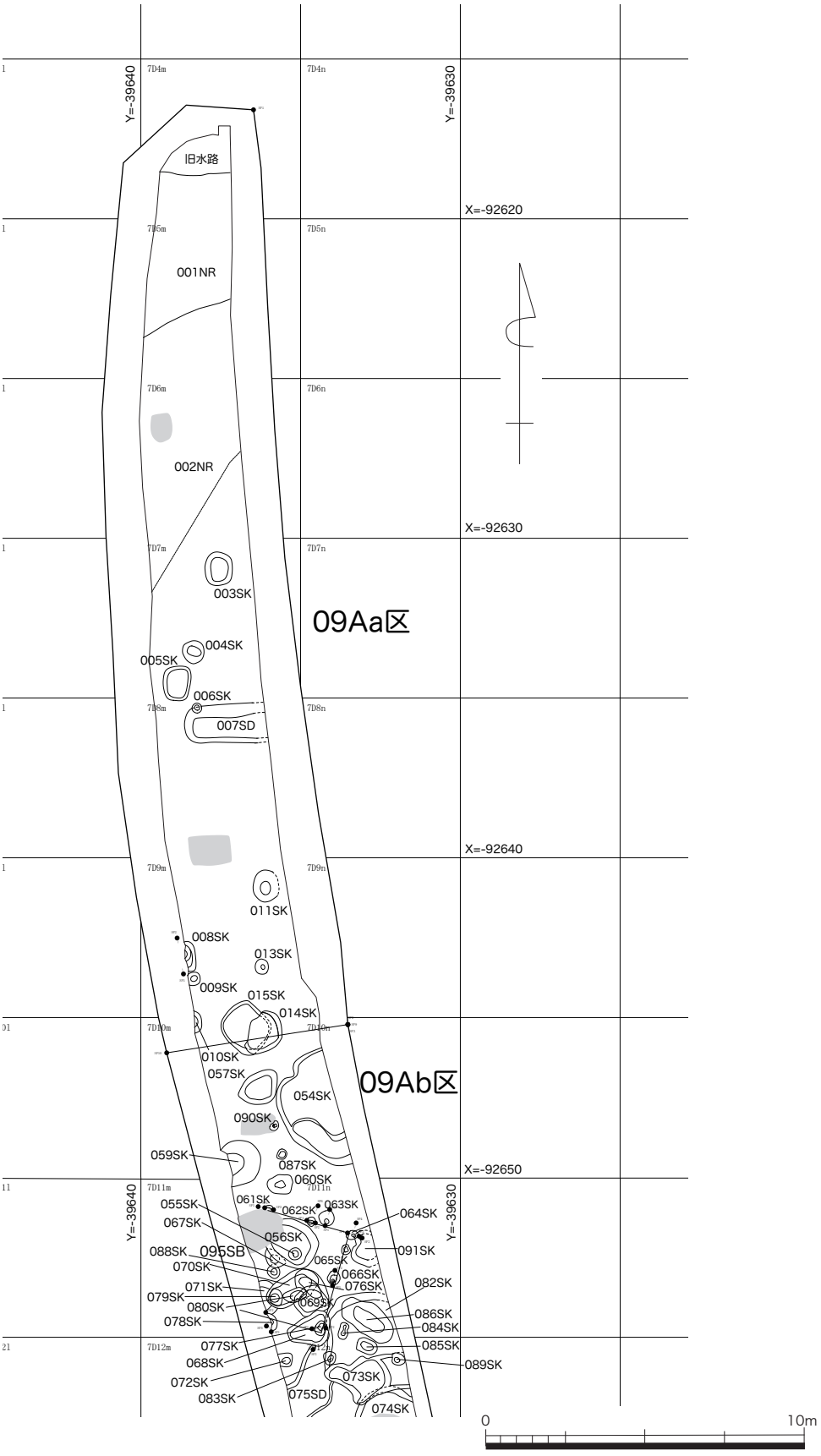


図４　09A 区遺構平面図１（1/200）

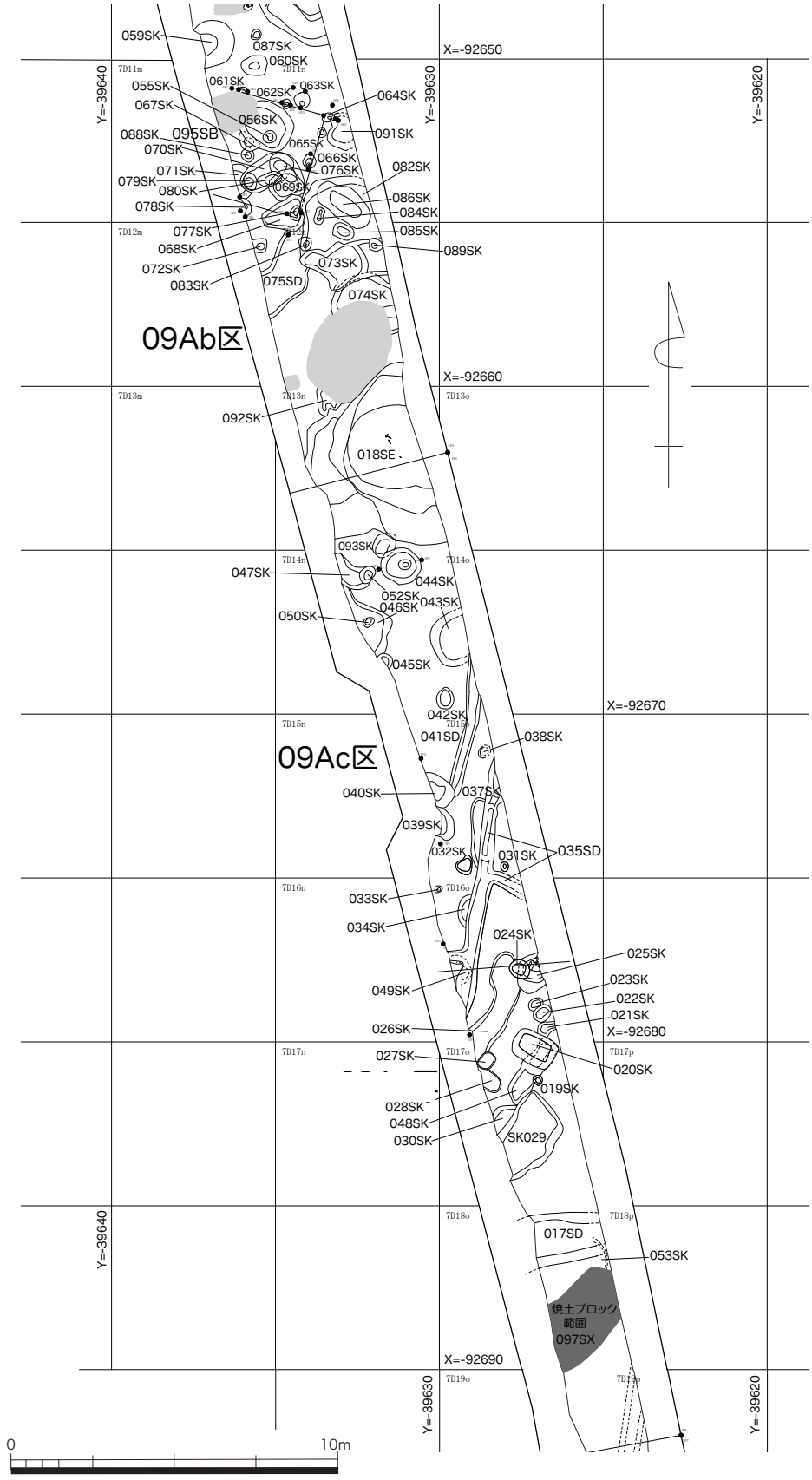


図５　09A 区遺構平面図２（1/200）

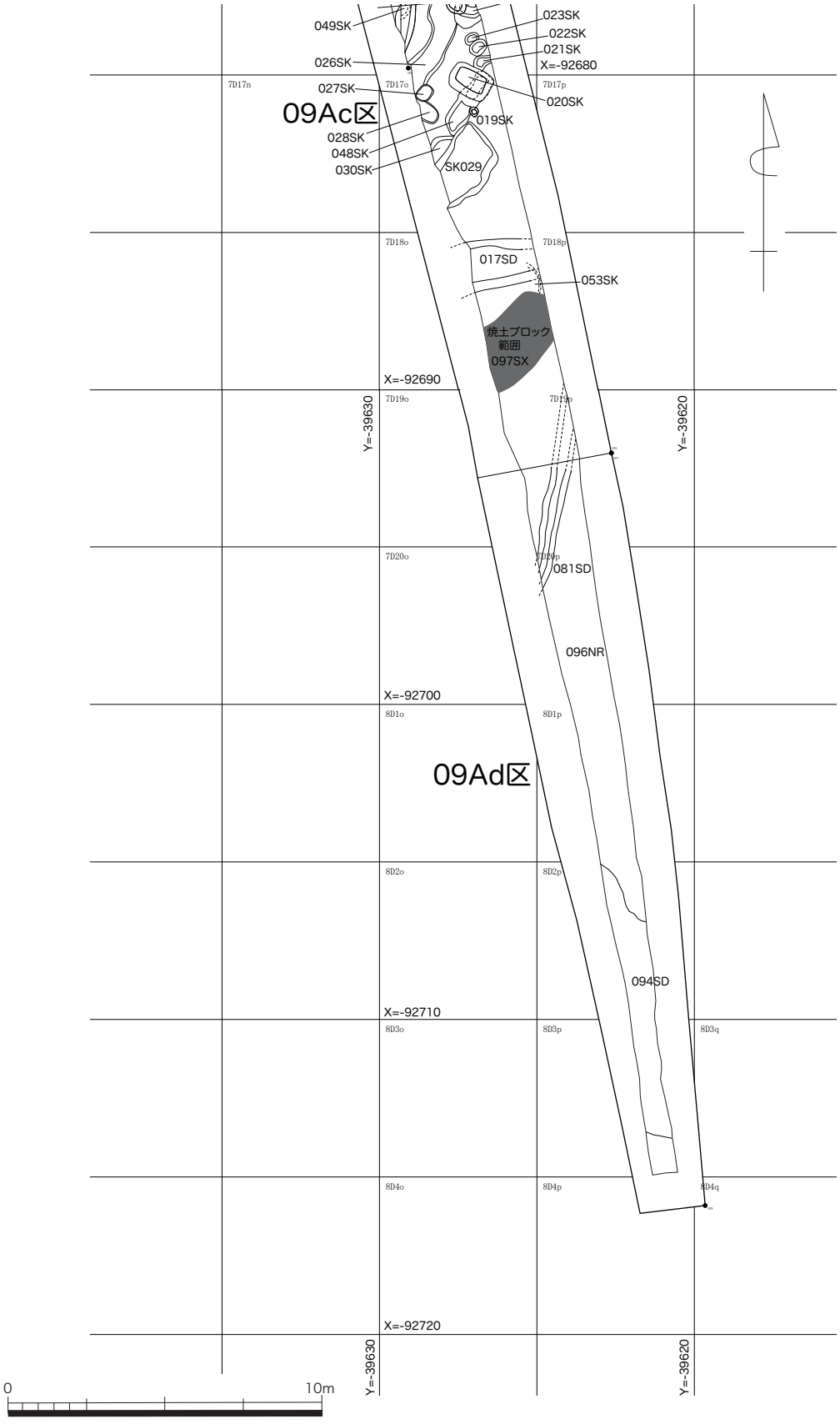


図６　09A 区遺構平面図３（1/200）

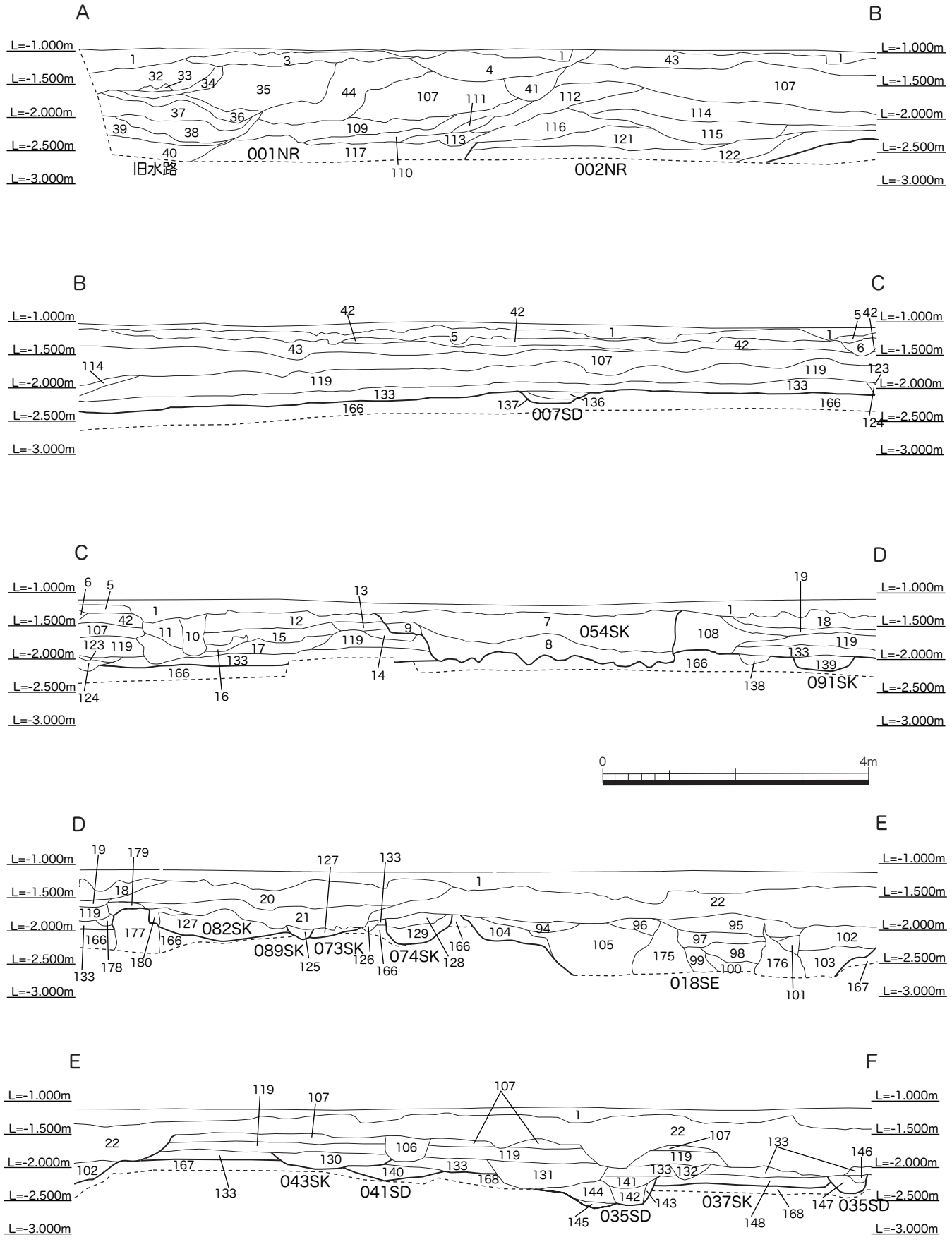


図７　09A 区土層断面図１（1/80）

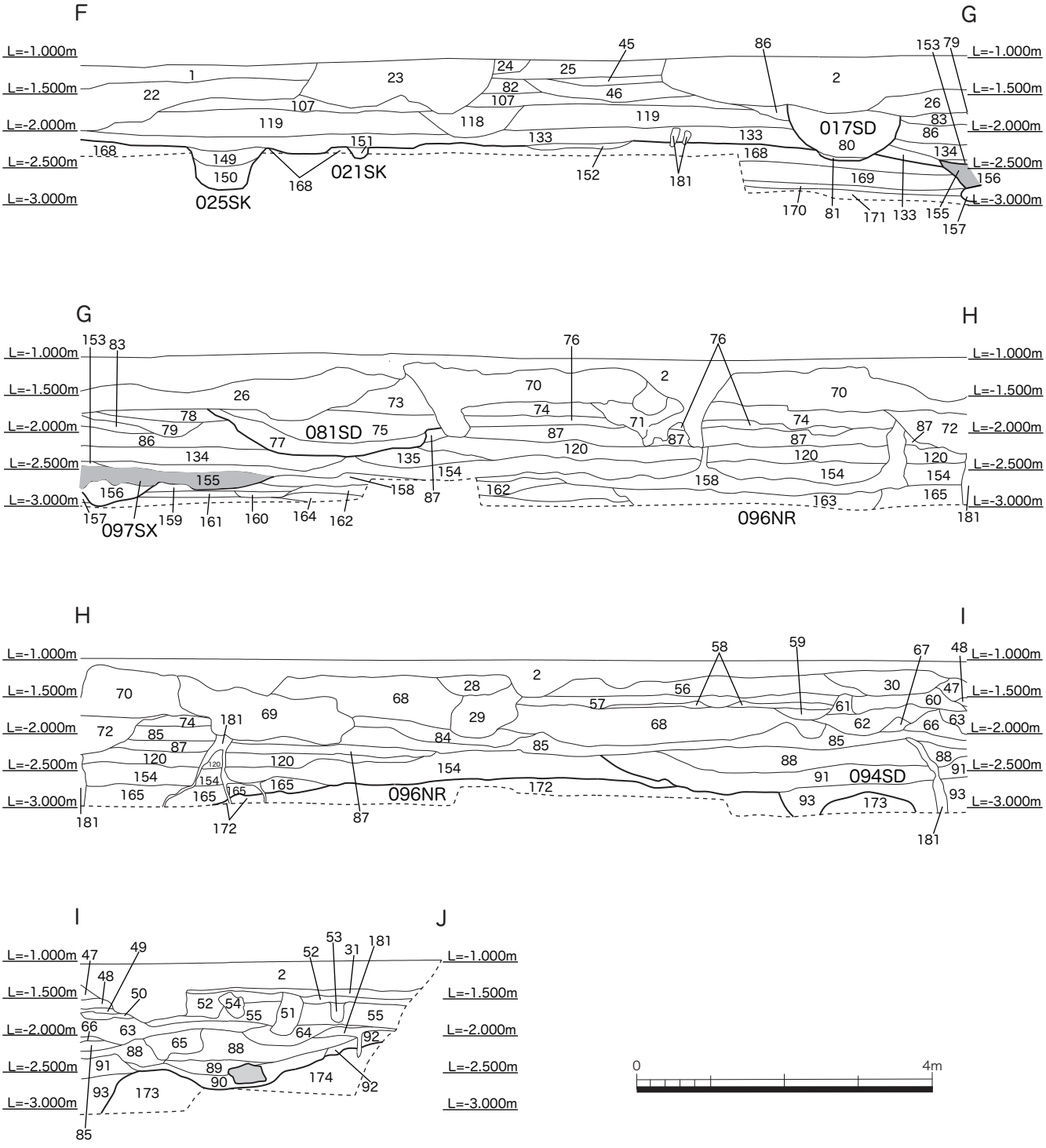


図8　09A 区土層断面図2（1/80）

1. 砕石コンクリートガラ(整地土)
2. 10YR4/4 褐色砂質(中粒)シルト 炭化物、ゴミを含む
3. 10YR4/3にぶい黄褐色砂質(中粒)シルトに10YR3/3暗褐色砂質(中粒)シルトを多く含む。(前の神社の宅盤)レンガを含む。
4. 10YR4/3にぶい黄褐色砂質(中粒)シルトにコンクリートガラを含む。(神社の基礎)
5. 2.5Y3/2黒褐色砂質(中粒)シルトに2.5Y5/2暗灰黄色砂質(中粒)シルトを多くを含む。
6. 10YR3/2暗褐色砂質(中粒)シルト
7. 10YR3/2暗褐色砂質(中粒)シルト 酸化鉄分を多く含む。
8. 5Y3/2 オリーブ黒色砂質(中粒)シルト 炭化物を多く含む
9. 10YR3/3暗褐色砂質(中粒)シルト
10. 2.5Y3/3暗オリーブ褐色砂質(中粒)シルトと2.5Y4/1灰色砂質(中粒)シルトの斑土
11. 2.5Y4/1灰色砂質(中粒)シルトと2.5Y3/2黒褐色砂質(中粒)シルトの斑土
12. 2.5Y3/3暗オリーブ褐色砂質(中粒)シルトと2.5Y4/1灰色砂質(中粒)シルトの斑土
13. 2.5Y3/3暗オリーブ褐色砂質(中粒)シルトに2.5Y4/1灰色砂質(中粒)シルトを多く含む。
14. 10YR3/2黒褐色砂質(中粒)シルト
15. 2.5Y3/2黒褐色砂質(中粒)シルトと2.5Y4/1灰色砂質(中粒)シルトの斑土
16. 2.5Y3/3暗オリーブ褐色砂質(中粒)シルト
17. 2.5Y3/2黒褐色砂質(中粒)シルトに酸化鉄分のブロックを多く含む。
18. 7.5Y3/1 オリーブ黒色砂質(中粒)シルト(水道管の掘り方)
19. 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色砂質(中粒)シルト 酸化鉄分を多く含む(水道管の掘り方)
20. 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色砂質(中粒)シルトに2.5Y4/2 オリーブ褐色砂質(中粒)シルトブロックを多く含む

21. 5Y2/2 オリーブ黒色砂質(中粒)シルト
22. 10YR3/3 暗褐色砂質(中粒)シルト
23. 10YR4/4 褐色砂質(中粒)シルト 炭化物、ゴミを含む
24. 10YR4/4 褐色砂質(中粒)シルト 5cm大の円礫を充填
25. 10YR3/4 暗褐色砂質(中粒)シルト 砕石を部分的に含む(整地土)
26. 10YR3/2 黒褐色砂質(中粒)シルト
27. 10YR3/3 暗褐色砂質(中粒)シルト
28. 10YR4/3 にぶい黄褐色砂質(中粒)シルト
29. 2.5Y4/3 オリーブ褐色砂質(中粒)シルト
30. 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色砂質(中粒)シルト 5cm大の礫を多く含む
31. 2.5Y5/3 黄褐色中粒砂
32. 10YR4/4褐色砂質(中粒)シルトにコンクリートガラを含む(神社の基礎)
33. 10YR5/6黄褐色砂質(中粒)シルトに10YR3/3暗褐色砂質(中粒)シルトを少量含む。
34. 10YR5/6黄褐色砂質(中粒)シルト
35. 10YR4/3にぶい黄褐色砂質(中粒)シルト
36. 10YR5/6黄褐色砂質(中粒)シルトに10YR3/3暗褐色砂質(中粒)シルトを少量含む。
37. 2.5Y3/3暗オリーブ褐色(中粒)シルト
38. 5Y4/1灰色砂質(中粒)シルト　酸化鉄分を多く含む。
39. 5Y5/1灰色シルト質(中粒)砂　酸化鉄分を多く含む。
40. 7.5Y3/1オリーブ黒色粘質シルト

41. 2.5Y3/3暗オリーブ褐色(中粒)シルト
42. 10YR3/2黒褐色砂質(中粒)シルト
43. 10YR3/3暗褐色砂質(中粒)シルト
44. 2.5Y4/3オリーブ褐色(中粒)シルト
45. 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色砂質(中粒)シルト 貝殻片を多く含む
46. 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色砂質(中粒)シルト
47. 10YR4/3 にぶい黄褐色砂質(中粒)シルト
48. 10YR3/2 黒褐色シルトと10YR4/3にぶい黄褐色砂質(中粒)シルトの斑土
49. 2.5Y5/4 黄褐色シルト
50. 2.5Y3/2 黒褐色シルト
51. 2.5Y4/3 オリーブ褐色砂質(中粒)シルト 2.5Y3/2黒褐色シルトブロックを少量含む
52. 2.5Y4/3 オリーブ褐色砂質(中粒)シルトに2.5Y5/4黄褐色シルト、2.5Y3/2黒褐色シルトのブロックを多く含む 貝を多く含む
53. 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色砂質(中粒)シルト
54. 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色砂質(中粒)シルトに2.5Y6/4にぶい黄色中粒砂ブロックを含む
55. 2.5Y4/4 オリーブ褐色砂質(中粒)シルト 幅3cm程の転圧されたシルト層が4層水平に堆積 道路あとか?
56. 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色砂質(中粒)シルト
57. 2.5Y4/4 オリーブ褐色砂質(中粒)シルト
58. 2.5Y5/3 黄褐色砂質(中粒)シルト
59. 2.5Y4/4 オリーブ褐色砂質シルトに2.5Y3/3暗オリーブ褐色砂質(中粒)シルトブロックを含む
60. 10YR4/3 灰黄褐色砂質(中粒)シルト

61. 2.5Y4/3 オリーブ褐色砂質(中粒)シルト
62. 2.5Y4/4 オリーブ褐色砂質(中粒)シルトに2.5Y5/4黄褐色シルトブロックを含む
63. 2.5Y4/3 オリーブ褐色砂質(中粒)シルトに2.5Y5/4黄褐色シルト、2.5Y3/2黒褐色シルトのブロックを多く含む
64. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質(中粒)シルトと2.5Y3/1黒褐色砂質(中粒)シルトの斑土
65. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質(中粒)シルトと2.5Y3/1黒褐色砂質(中粒)シルトの斑土
66. 10YR5/4 にぶい黄褐色砂質(中粒)シルト
67.2.5Y5/4 黄褐色シルト
68. 2.5Y4/3 オリーブ褐色砂質シルトに2.5Y3/3暗オリーブ褐色砂質(中粒)シルトブロックを含む
69. 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色砂質(中粒)シルト 酸化鉄分を含む
70. 2.5Y4/3 オリーブ褐色砂質(中粒)シルト

図９　09A 区土層断面図３（1/80）

71. 10YR4/4 褐色砂質(中粒)シルト
72. 2.5Y4/3 オリーブ褐色砂質(中粒)シルト
73. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質(中粒)シルト 酸化鉄分少量含む
74. 2.5Y4/4 オリーブ褐色砂質(中粒)シルト
75. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質(中粒)シルト
76. 2.5Y4/3 オリーブ褐色砂質(中粒)シルト
77. 2.5Y5/2 暗灰黄色砂質(中粒)シルト
78. 10YR4/3 にぶい黄褐色砂質(中粒)シルト
79. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質(中粒)シルトに2.5Y3/2 黒褐色砂質(中粒)シルトブロックをを多く含む
80. 5Y3/1 オリーブ黒色シルト 瓦片を含む
81. 2.5Y5/2 暗灰黄色砂質(中粒)シルトに5Y3/1 オリーブ黒色シルトブロックを少量含む
82. 10YR4/3にぶい黄褐色(中粒)シルト
83. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質(中粒)シルトに2.5Y3/2 黒褐色砂質(中粒)シルトブロックをを含む
84. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質(中粒)シルト
85. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質(中粒)シルト 酸化鉄分を多く含む
86. 2.5Y4/3 オリーブ褐色砂質(中粒)シルト 近世陶器を含む
87. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質(中粒)シルトに炭化物を含む
88. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質(中粒)シルト 酸化鉄分を多く含む
89. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質(中粒)シルトと2.5Y3/1黒褐色砂質(中粒)シルトの斑土
90. 2.5Y3/1 黒褐色シルト
91. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質(中粒)シルト
92. 5Y4/2 灰オリーブ色砂質(中粒)シルト 酸化鉄分を多く含む(鉄分硬化)
93. 2.5Y3/1 黒褐色砂質(中粒)シルト 木質を多く含む
94. 2.5Y4/4 オリーブ褐色砂質(中粒)シルトに2.5Y5/4 黄褐色中粒砂を少量含む
95. 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色砂質(中粒)シルト
96. 2.5Y3/2 黒褐色砂質(中粒)シルト
97. 2.5Y3/2 黒褐色砂質(中粒)シルト
98. 5Y2/2 オリーブ黒色砂質(中粒)シルト 炭化物を多く含む
99. 5Y3/1 オリーブ黒色砂質(中粒)シルト
100. 7.5Y3/1 オリーブ黒色砂質(中粒)シルト
101. 5Y2/2 オリーブ黒色砂質(中粒)シルト 炭化物を多く含む
102. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質(中粒)シルト
103. 5Y4/1灰色砂質(中粒)シルトに5Y5/2灰オリーブ色シルト質中粒砂を含む
104. 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色砂質(中粒)シルトと2.5Y5/4 黄褐色中粒砂の斑土
105. 5Y3/2 オリーブ黒色砂質(中粒)シルトに酸化鉄分を多く含む
106. 2.5Y4/4 オリーブ褐色砂質(中粒)シルト
107. 10YR4/3にぶい黄褐色(中粒)シルト
108. 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色砂質(中粒)シルト
109. 5Y5/2灰オリーブ色(中粒)砂　酸化鉄分を多く含む。
110. 2.5Y4/2暗黄褐色(中粒)シルト
111. 2.5Y4/1黄灰色砂質(中粒)シルト
112. 10YR3/2黒褐色砂質(中粒)シルト
113. 2.5Y4/2暗黄褐色(中粒)シルト　酸化鉄分を多く含む。
114. 10YR3/3暗褐色砂質(中粒)シルト
115. 10YR4/3にぶい黄褐色砂質(中粒)シルト
116. 10YR3/4暗褐色砂質(中粒)シルト2.5Y4/2暗灰黄色砂質(中粒)シルトブロックを含む。
117. 5Y5/2灰オリーブ色(中粒)砂　酸化鉄分を含む。
118. 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色砂質(中粒)シルト
119. 2.5Y3/1黒褐色砂質(中粒)シルト
120. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質(中粒)シルト
121. 2.5Y3/2黒褐色砂質(中粒)シルト　酸化鉄分を多く含む。
122. 2.5Y3/1黒褐色砂質(中粒)シルト　酸化鉄分を含む 包含層上位で遺物を取り上げ
123. 2.5Y3/1黒褐色砂質(中粒)シルトに5Y3/1オリーブ褐色砂質(中粒)シルトを多く含む
124. 2.5Y3/1黒褐色砂質(中粒)シルトに5Y3/1オリーブ褐色砂質(中粒)シルトを含む
125. 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色砂質(中粒)シルト 酸化鉄分を多く含む
126. 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色砂質(中粒)シルト
127. 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色砂質(中粒)シルトに2.5Y5/4 黄褐色中粒砂を少量含む
128. 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色砂質(中粒)シルトに2.5Y5/4 黄褐色中粒砂を少量含む
129. 2.5Y3/2 黒褐色砂質(中粒)シルト
130. 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色砂質(中粒)シルト
131. 5Y3/2 オリーブ黒色砂質(中粒)シルト
132. 2.5Y3/2 黒褐色砂質(中粒)シルトと2.5Y5/4 黄色褐色シルト質中粒砂の斑土
133. 2.5Y3/2黒褐色砂質(中粒)シルトに2.5Y5/2暗灰黄色砂質(中粒)シルトブロックを含む。(包含層)
134. 2.5Y3/2 黒褐色砂質(中粒)シルト 包含層として遺物を取り上げAa区から続く包含層と同一層であるかは不明
135. 2.5Y3/2 黒褐色砂質(中粒)シルト 包含層として遺物を取り上げ
136. 2.5Y3/1黒褐色砂質(中粒)シルト　酸化鉄分を含む。
137. 2.5Y3/3暗オリーブ褐色砂質(中粒)シルト
138. 2.5Y3/2 黒褐色砂質(中粒)シルトと2.5Y5/4 黄褐色砂質(中粒)シルトの斑土
139. 2.5Y3/2 黒褐色砂質(中粒)シルトと2.5Y5/4 黄褐色砂質(中粒)シルトの斑土
140. 2.5Y4/1 黄灰色砂質(中粒)シルト

図 10　09A 区土層断面図４（1/80）

141. 5Y3/2 オリーブ黒色砂質(中粒)シルト
142. 5Y3/2 オリーブ黒色砂質(中粒)シルトに5Y4/1 灰色砂質(中粒)シルトを含む
143. 5Y4/1 灰色シルト質中粒砂に5Y3/2 オリーブ黒色砂質(中粒)シルトブロックを少量含む
144. 5Y4/1 灰色砂質(中粒)シルト 5Y6/1 灰色シルト質中粒砂を含む
145. 5Y5/2 灰オリーブ色シルト質中粒砂
146. 2.5Y4/1 灰色砂質(中粒)シルト
147. 5Y4/1 灰色砂質(中粒)シルト
148. 2.5Y3/1 黒褐色砂質(中粒)シルト
149. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質(中粒)シルト
150. 5Y3/1 オリーブ黒色砂質(中粒)シルト
151. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質(中粒)シルト
152. 5Y3/2 オリーブ黒色砂質(中粒)シルト
153. 5Y3/2 オリーブ黒色砂質(中粒)シルトと5Y4/3 暗オリーブ色シルトの斑土
154. 5Y4/1 灰色砂質(中粒)シルト シルト質多く硬くしまる 包含層2として遺物を取り上げ
155. 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色砂質(中粒)シルト 焼土ブロック、炭化物を多く含む 包含層3で遺物を取り上げ 平面図に範囲あり、Dot.017、Dot018出土
156. 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色砂質(中粒)シルトに2.5Y5/4 黄褐色シルトと5Y4/2 灰オリーブ色中粒砂を含む　包含層3として取り上げ
157. 2.5Y5/4 黄褐色シルトと5Y4/2 灰オリーブ色中粒砂の斑土
158. 7.5Y5/1 灰色シルト質中粒砂 包含層4として遺物を取り上げ
159. 2.5Y4/3 オリーブ褐色砂質(中粒)シルト 包含層4として遺物を取り上げ
160. 2.5Y4/3 オリーブ褐色砂質(中粒)シルトと2.5Y5/4黄褐色シルトの斑土 酸化鉄分を多く含む 包含層4として遺物を取り上げ
161. 2.5Y4/3 オリーブ褐色砂質(中粒)シルトと2.5Y5/4黄褐色シルトの斑土 包含層4として遺物を取り上げ
162. 2.5Y4/3 オリーブ褐色砂質(中粒)シルトと2.5Y5/4黄褐色シルトの斑土 包含層4として遺物を取り上げ
163. 5Y4/2 灰オリーブ色シルト
164. 7.5Y4/1 灰色砂質(中粒)シルト 包含層4として遺物を取り上げ
165. 5Y4/2 灰オリーブ色砂質(中粒)シルトに2.5Y3/2 黒褐色砂質(中粒)シルトブロックを含む 包含層2として遺物を取り上げ
166. 2.5Y4/2暗灰色砂質(中粒)シルト
167. 2.5Y5/3 黄褐色シルト質中粒砂(基盤層)
168. 2.5Y5/2 暗灰黄色砂質(中粒)シルト(基盤層)
169. 5Y5/2 灰オリーブ色中粒砂(基盤層)
170. 2.5Y5/4 黄褐色シルト 硬くしまる(基盤層)
171. 5Y4/2 灰オリーブ色中粒砂(基盤層)
172. 2.5Y5/2 暗灰黄色砂質(中粒)シルト(基盤層)
173. 5Y5/2 灰オリーブ色中粒砂(基盤層)
174. 2.5Y5/3 黄褐色中粒砂(基盤層)
175. 5Y3/2 オリーブ黒色砂質(中粒)シルトに酸化鉄分、2.5Y5/4 黄褐色中粒砂のブロックを少量含む(噴砂)
176. 5Y2/2 オリーブ黒色砂質(中粒)シルト 炭化物を多く含む、5Y5/2灰オリーブ色シルト質中粒砂を縞状に含む。(噴砂)
177. 2.5Y7/4 浅黄褐色中粒砂(噴砂)
178. 2.5Y3/3 オリーブ褐色砂質(中粒)シルトに2.5Y7/4 浅黄褐色中粒砂を少量含む
179. 7.5Y3/1 オリーブ黒色砂質(中粒)シルトと2.5Y7/4浅黄褐色中粒砂の斑土
180. 2.5Y3/3 オリーブ褐色砂質(中粒)シルトに2.5Y7/4 浅黄褐色中粒砂を少量含む
181. 2.5Y3/3 2.5Y7/4 浅黄褐色中粒砂(噴砂)

図 11　09A 区土層断面図 5（1/80）

半から 15 世紀と考えられる。

095SB 付近では、056SK・070SK・073SK・074SK・075SK・082SK・086SK・091SK など長径 100 ～ 200cm、深さ 20 ～ 30cm を測る楕円形または不定形な大型土坑連続して掘削されている。遺構の性格は不明であるが、時期は 096SB とほぼ同時期の遺構群とみることができ、074SK からは大窯期にかかる重圏皿（図 31-153）が出土している。068SK は近世か（図 17）。

（3）Ac 区

017SD　南側に落ち込む微高地の肩部分に東西に走る幅 165cm、深さ 70cm の溝。時期は 18 世紀後半。

018SE　Ac 区調査段階で南半部が確認されていたが、上部のみ掘削するにとどめ Ab 区調査時に改めて全形を検出し掘削した。018SE は検出段階で、南北 573cm、東西 363cm、深さ 80cm を測る大型の井戸で、断面観察では径約 180cm を測る井戸枠の掘り込みが確認されるが、噴砂痕のためか平面でははっきりしなかった。底面を−270cm まで掘削して写真撮影・測量を行った後、重機によってさらに下位まで掘り下げたところ、−303 ～−314cm の高さで木組みの井戸枠上端が確認された。その時点で湧水が激しくなったため、更なる掘削は断念し、木組みの一部（図 49-W01 ～ W05）のみを取り上げた（図 15・写真図版 5）。時期は 14 世紀後半～ 15 世紀。

020SK　長径 130cm、短径 92cm、深さ 28cm を測る隅丸方形を呈する土坑。須恵器・灰釉陶器・清郷型鍋が出土する。

025SK・049SK　025SK は南北 104cm、深さ 55cm の土坑で、上位で長径 41cm、短径

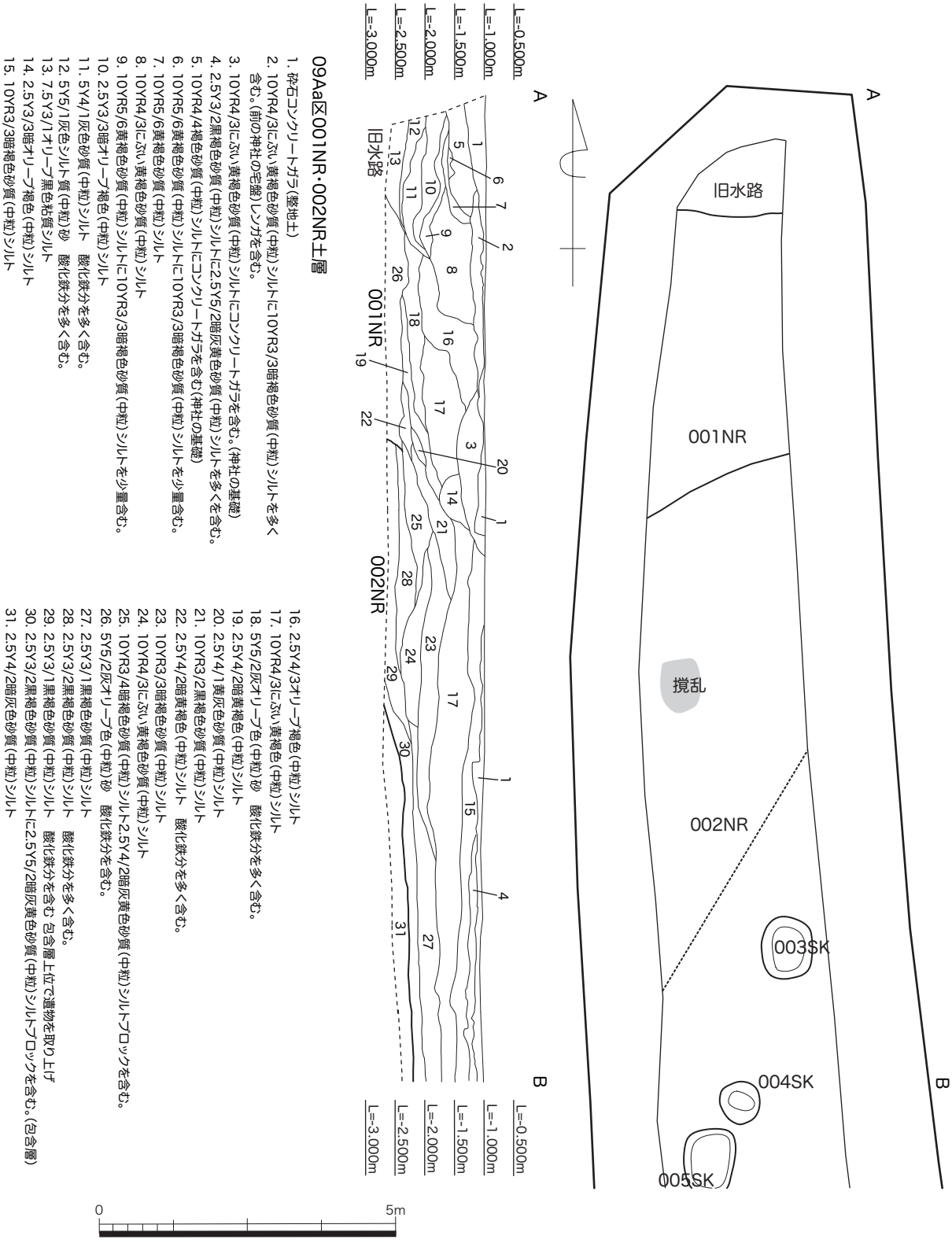
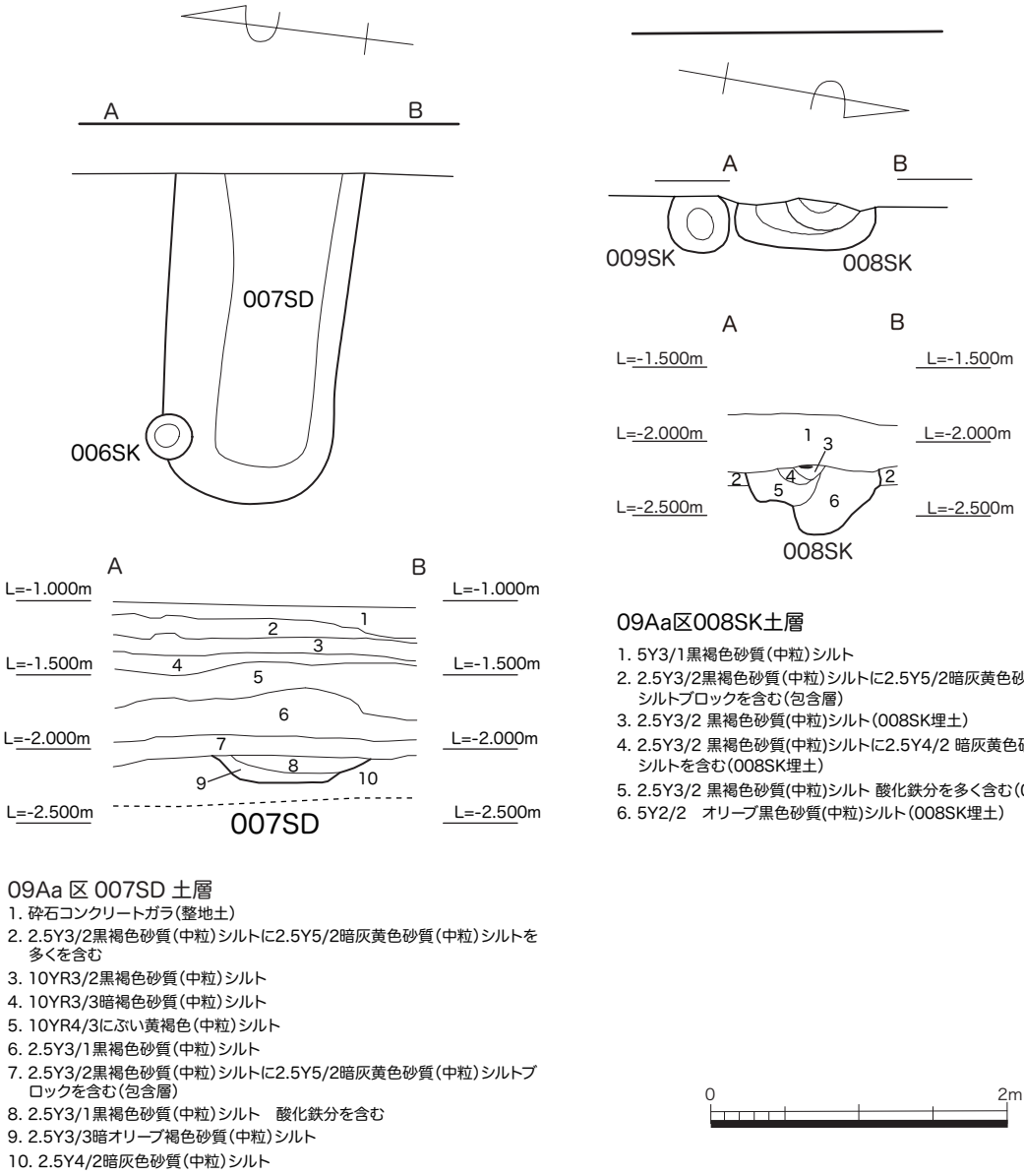


図 12　09Aa 区 001NR・002NR 遺構図（1/100）



09Aa区008SK土層

1. 5Y3/1黒褐色砂質(中粒)シルト
2. 2.5Y3/2黒褐色砂質(中粒)シルトに2.5Y5/2暗灰黄色砂質(中粒)シルトブロックを含む(包含層)
3. 2.5Y3/2 黒褐色砂質(中粒)シルト(008SK埋土)
4. 2.5Y3/2 黒褐色砂質(中粒)シルトに2.5Y4/2 暗灰黄色砂質(中粒)シルトを含む(008SK埋土)
5. 2.5Y3/2 黒褐色砂質(中粒)シルト 酸化鉄分を多く含む(008SK埋土)
6. 5Y2/2　オリーブ黒色砂質(中粒)シルト(008SK埋土)

09Aa 区 007SD 土層

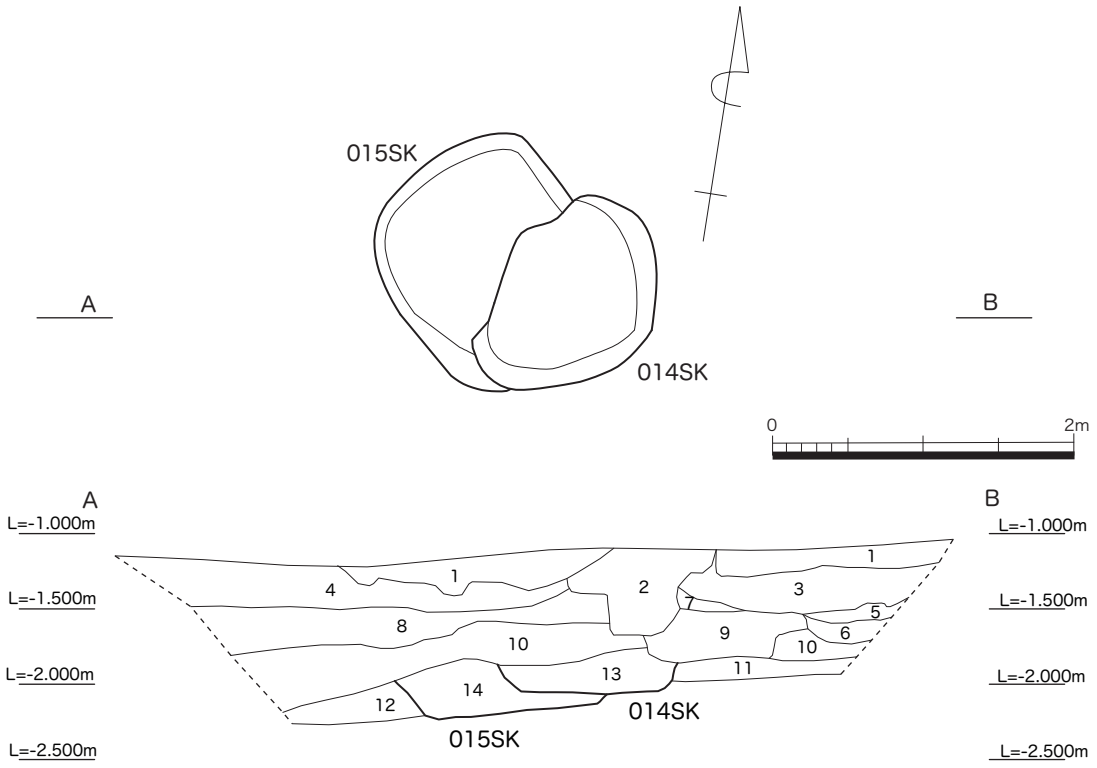
1. 砕石コンクリートガラ(整地土)
2. 2.5Y3/2黒褐色砂質(中粒)シルトに2.5Y5/2暗灰黄色砂質(中粒)シルトを多くを含む
3. 10YR3/2黒褐色砂質(中粒)シルト
4. 10YR3/3暗褐色砂質(中粒)シルト
5. 10YR4/3にぶい黄褐色(中粒)シルト
6. 2.5Y3/1黒褐色砂質(中粒)シルト
7. 2.5Y3/2黒褐色砂質(中粒)シルトに2.5Y5/2暗灰黄色砂質(中粒)シルトブロックを含む(包含層)
8. 2.5Y3/1黒褐色砂質(中粒)シルト　酸化鉄分を含む
9. 2.5Y3/3暗オリーブ褐色砂質(中粒)シルト
10. 2.5Y4/2暗灰色砂質(中粒)シルト

図 13　09Aa 区 007SD・008SK 遺構図（1/50）

30.5cm、厚さ 19.5cm の砂岩礫を検出した。礫は部分的に割れた状態で、加工痕は確認できなかったが、被熱している。さらにその横や直下で、４点の砂岩小礫も出土している（長径 12× 短径 11.5× 厚さ 6cm、長径 11× 短径 8× 厚さ 6.5 cm、長径 11× 短径 7× 厚さ 3.5 cm、長径 10× 短径 7× 厚さ 5 cm)。これらの礫も被熱しているので大型のものと同一と思われるが、確実な接合面は見つからなかった（写真図版４）。被熱痕は石表面だけではなく破面にも認められる。時期は９～ 10 世紀。049SK は 025SK から西へ 235cm のところにあり、035・036SD に切られる。大きさは東西約 90cm、深さは断面観察で 73cm を測る。灰釉陶器と製塩土器脚部が出土する（図 21・図 22)。

039SK・040SK　両土坑とも径 100cm、深さ 50cm を越える大型土坑で、041SD—040SK—039SK の順に掘削されている。北部系陶器の山茶碗が出土することから、時期は 14 世紀後半と考えられる（図 21)。

035SD　検出時点では南部の 035SD と北部の 036SD に区分していたが、最終的には結合することが確認されたため名称を 035SD に統一した。幅約 50cm、深さ 20 ～ 30cm で、北にいくに従



09Aa区014SK・015SK土層

1. 砕石コンクリートガラ（整地土）
2. 2.5Y3/2黒褐色砂質（中粒）シルトと10YR4/3にぶい黄褐色砂質（中粒）シルトの斑土
3. 10YR3/2暗褐色砂質（中粒）シルト 酸化鉄分を多く含む。
4. 2.5Y3/2黒褐色砂質（中粒）シルトに2.5Y5/2暗灰黄色砂質（中粒）シルトを多くを含む。
5. 10YR3/3暗褐色砂質（中粒）シルト
6. 10YR3/2黒褐色砂質（中粒）シルト
7. 10YR4/3にぶい黄褐色砂質（中粒）シルト
8. 10YR3/3暗褐色砂質（中粒）シルト
9. 10YR3/2黒褐色砂質（中粒）シルトと10YR4/3にぶい黄褐色砂質（中粒）シルトの斑土
10. 2.5Y3/1黒褐色砂質（中粒）シルト
11. 2.5Y3/2黒褐色砂質（中粒）シルトに2.5Y5/2暗灰黄色砂質（中粒）シルトブロックを含む。（包含層）
12. 2.5Y3/2黒褐色砂質（中粒）シルトに2.5Y5/2暗灰黄色砂質（中粒）シルトブロックを含む 11層と同一の層であるかもしれない 包含層下位として遺物を取り上げ
13. 2.5Y3/2黒褐色砂質（中粒）シルトと2.5Y4/2暗灰黄色砂質（中粒）シルトブロック、酸化鉄分を多く含む
14. 2.5Y3/3暗オリーブ褐色砂質（中粒）シルトに酸化鉄分、2.5Y3/2黒褐色砂質（中粒）シルトブロックを多く含む

図 14　09Aa 区 014SK・015SK 遺構図（1/50）

いゆるやかに深くなっている。溝は北北東―南南西方向に走り、中央部で東に、南部で西に分岐する（図 21）。時期は中世後半期。

041SD　035SD と約 75cm の間隔をあけて平行して走る、幅 40cm、深さ 10cm の溝。山茶碗片や軒平瓦が出土している（図 20）。時期は中世後半期。

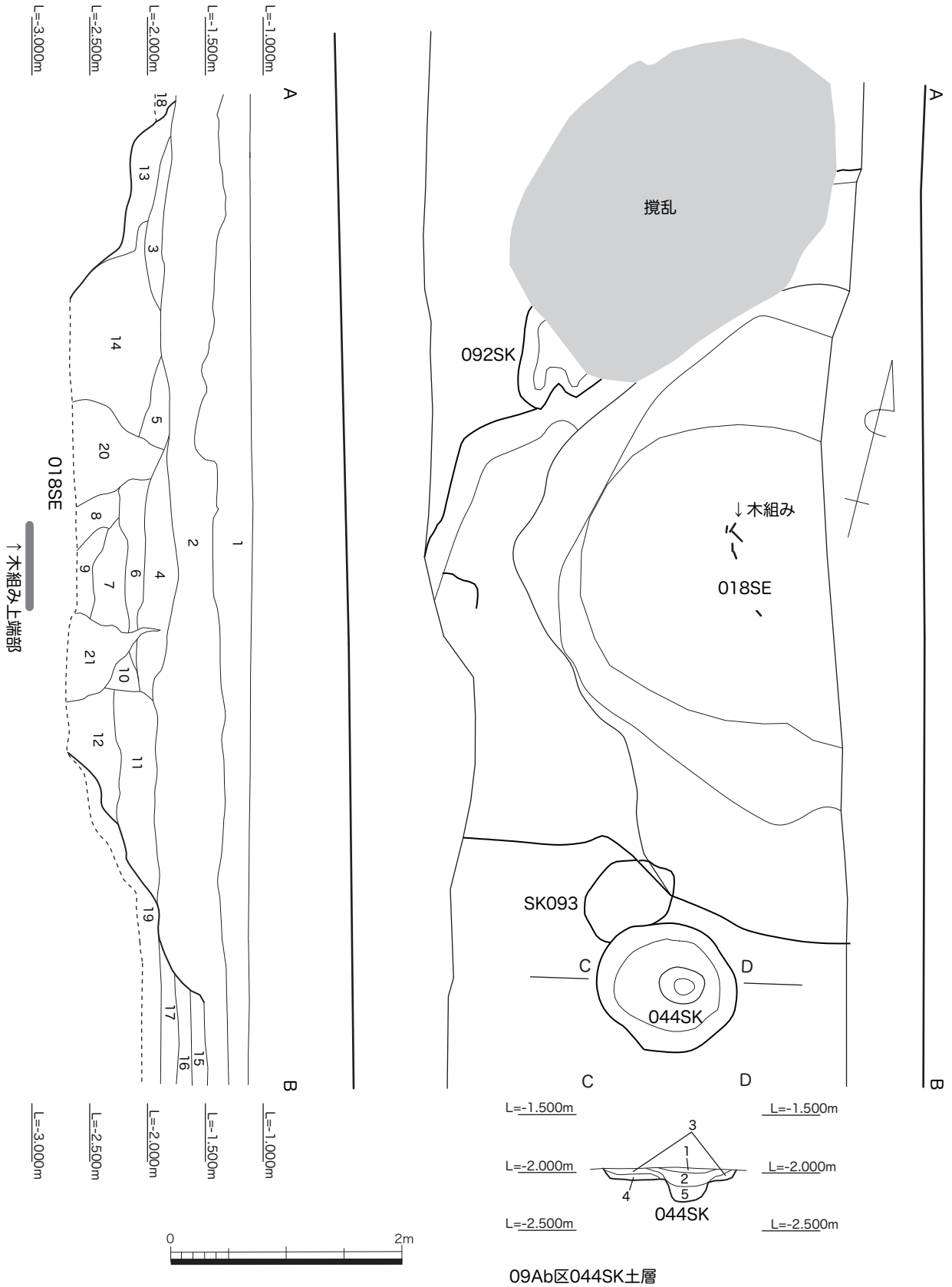
044SK　径約 120cm、深さ 10cm を測る円形の土坑で、中央やや東寄りの底面に径約 35cm、深さ 20cm の土坑がある。中央部分の土坑は、後から掘削されたか、柱の抜き痕の可能性がある（図 15）。時期は 14 世紀。

（4）09Ad 区（図 6・図 8・図 23・写真図版 5）

081SD　北北東―南南西方向に走る、幅 63cm、深さ 15cm の溝。Ac 区調査時点では表土と誤認し掘削したが、Ad 区調査で溝遺構と認識した。18 世紀後半の陶磁器が出土する。

094SD　壁面の土層観察で確認された落ち込み。溝番号 SD を付けたが、大型の土坑になる可能性もある。底面にはかなり大きな凹凸があり、灰色砂質シルト（包含層 2）を切り込む。時期は近世後期。

096NR・097SX　Ac 区南部から Ad 区にかけて広がる落ち込み。北肩部は 017SD でやや急に



09Ab区044SK土層

1. 2.5Y3/2 黒褐色砂質(中粒)シルト
2. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質(中粒)シルト
3. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質(中粒)シルトに2.5Y5/3 黄褐色砂質(中粒)シルトを含む
4. 2.5Y5/4 黄褐色砂質(中粒)シルト
5. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質(中粒)シルトに2.5Y5/3 黄褐色砂質(中粒)シルトを含む

図 15　09Ac 区 018SE・044SK 遺構図 1（1/50）

09Ab区018SE土層

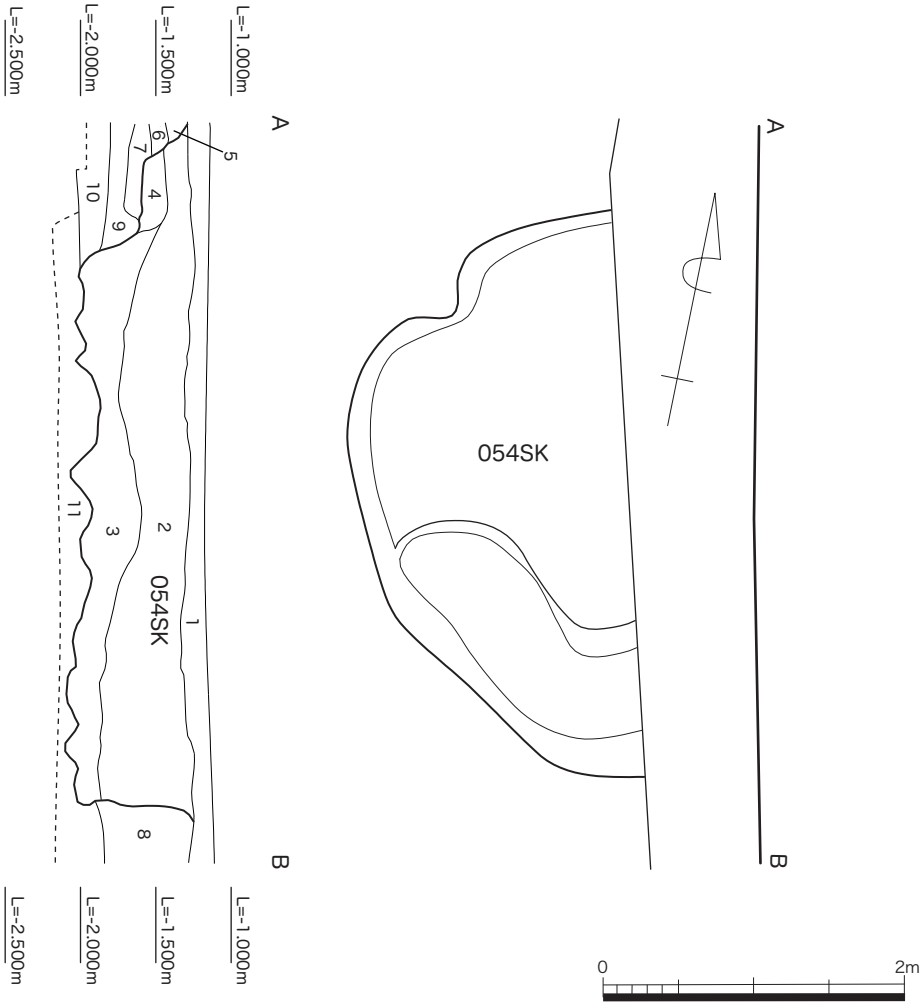
1. 砕石コンクリートガラ(整地土)
2. 10YR3/3 暗褐色砂質(中粒)シルト
3. 2.5Y4/4 オリーブ褐色砂質(中粒)シルトに2.5Y5/4 黄褐色中粒砂を少量含む
4. 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色砂質(中粒)シルト
5. 2.5Y3/2 黒褐色砂質(中粒)シルト
6. 2.5Y3/2 黒褐色砂質(中粒)シルト
7. 5Y2/2 オリーブ黒色砂質(中粒)シルト 炭化物を多く含む
8. 5Y3/1 オリーブ黒色砂質(中粒)シルト
9. 7.5Y3/1 オリーブ黒色砂質(中粒)シルト
10. 5Y2/2 オリーブ黒色砂質(中粒)シルト 炭化物を多く含む
11. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質(中粒)シルト
12. 5Y4/1灰色砂質(中粒)シルトに5Y5/2灰オリーブ色シルト質中粒砂を含む
13. 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色砂質(中粒)シルトと2.5Y5/4 黄褐色中粒砂の斑土
14. 5Y3/2 オリーブ黒色砂質(中粒)シルトに酸化鉄分を多く含む
15. 10YR4/3にぶい黄褐色(中粒)シルト
16. 2.5Y3/1黒褐色砂質(中粒)シルト
17. 2.5Y3/2黒褐色砂質(中粒)シルトに2.5Y5/2暗灰黄色砂質(中粒)シルトブロックを含む。(包含層)
18. 2.5Y4/2暗灰色砂質(中粒)シルト
19. 2.5Y5/3 黄褐色シルト質中粒砂(基盤層)
20. 5Y3/2 オリーブ黒色砂質(中粒)シルトに酸化鉄分、2.5Y5/4 黄褐色中粒砂のブロックを少量含む(噴砂)
21. 5Y2/2 オリーブ黒色砂質(中粒)シルト 炭化物を多く含む、5Y5/2灰オリーブ色シルト質中粒砂を縞状に含む。(噴砂)

図 16　09Ac 区 018SE・044SK 遺構図２（1/50）

09Ab区073SK・074SK・082SK・089SK土層

1. 砕石コンクリートガラ(整地土)
2. 7.5Y3/1 オリーブ黒色砂質(中粒)シルト(水道管の掘り方)
3. 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色砂質(中粒)シルトに2.5Y4/2 オリーブ褐色砂質(中粒)シルトブロックを多く含む
4. 10YR3/3 暗褐色砂質(中粒)シルト
5. 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色砂質(中粒)シルト 酸化鉄分を多く含む
6. 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色砂質(中粒)シルト
7. 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色砂質(中粒)シルトに2.5Y5/4 黄褐色中粒砂を少量含む
8. 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色砂質(中粒)シルトに2.5Y5/4 黄褐色中粒砂を少量含む
9. 2.5Y3/2 黒褐色砂質(中粒)シルト
10. 2.5Y3/2黒褐色砂質(中粒)シルトに2.5Y5/2暗灰黄色砂質(中粒)シルトブロックを含む。(包含層)
11. 2.5Y4/2暗灰色砂質(中粒)シルト
12. 2.5Y7/4 浅黄褐色中粒砂(噴砂)
13. 2.5Y3/3 オリーブ褐色砂質(中粒)シルトに2.5Y7/4 浅黄褐色中粒砂を少量含む
14. 10YR3/3暗褐色砂質(中粒)シルト

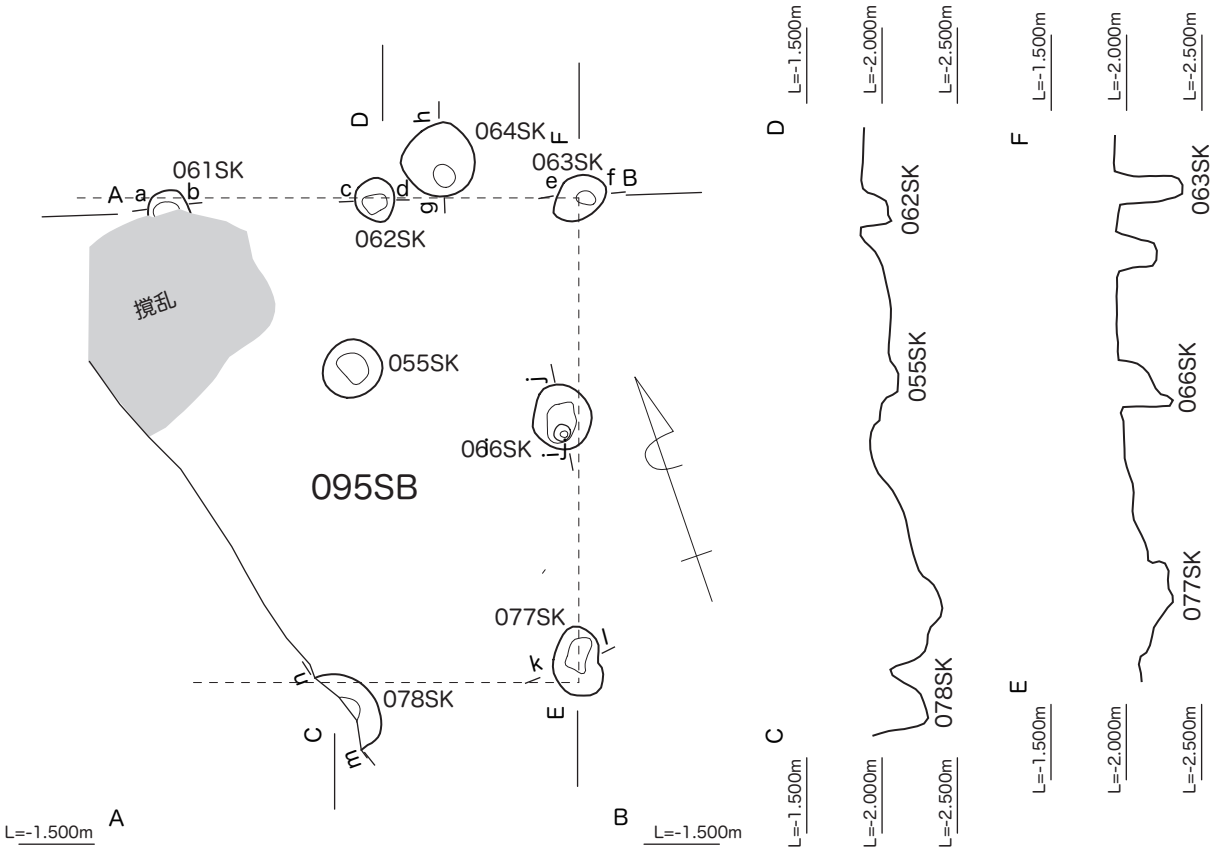
図 17　09Ab 区 073SK・074SK・082SK・089SK 遺構図（1/50）

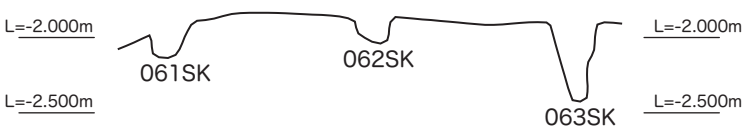


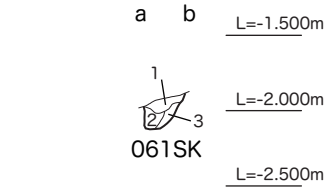
09Ab区054SK土層

1. 砕石コンクリートガラ(整地土)
2. 10YR3/2暗褐色砂質(中粒)シルト 酸化鉄分を多く含む。
3. 5Y3/2 オリーブ黒色砂質(中粒)シルト 炭化物を多く含む
4. 10YR3/3暗褐色砂質(中粒)シルト
5. 2.5Y3/3暗オリーブ褐色砂質(中粒)シルトと2.5Y4/1灰色砂質(中粒)シルトの斑土
6. 2.5Y3/3暗オリーブ褐色砂質(中粒)シルトに2.5Y4/1灰色砂質(中粒)シルトを多く含む。
7. 10YR3/2黒褐色砂質(中粒)シルト
8. 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色砂質(中粒)シルト
9. 2.5Y3/1黒褐色砂質(中粒)シルト
10. 2.5Y3/2黒褐色砂質(中粒)シルトに2.5Y5/2暗灰黄色砂質(中粒)シルトブロックを含む。(包含層)
11. 2.5Y4/2暗灰色砂質(中粒)シルト

図 18　09Ab 区 054SK 遺構図（1/50）

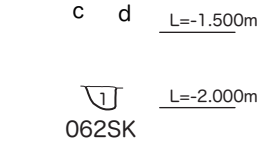






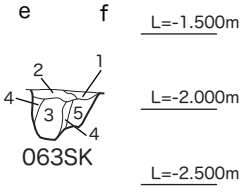
09Ab区061SK土層

1. 2.5Y3/2 黒褐色砂質(中粒)シルト
2. 2.5Y4/4 オリーブ褐色中粒砂と2.5Y3/2黒褐色砂質(中粒)シルトの斑土
3. 2.5Y4/4 オリーブ褐色中粒砂に2.5Y3/2黒褐色砂質(中粒)シルトを少量含む



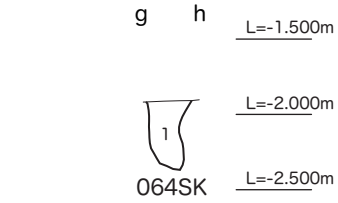
09Ab区062SK土層

1. 2.5Y3/2 黒褐色砂質(中粒)シルトに2.5Y4/4 オリーブ褐色中粒砂を多く含む



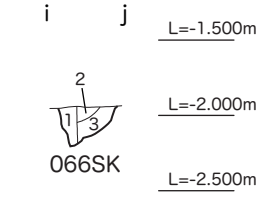
09Ab区063SK土層

1. 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色砂質(中粒)シルト
2. 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色砂質(中粒)シルトと2.5Y4/4 オリーブ褐色中粒砂
3. 2.5Y2/3 黒色砂質(中粒)シルト
4. 2.5Y3/2 黒褐色砂質(中粒)シルトと2.5Y4/4 オリーブ褐色中粒砂の斑土
5. 2.5Y4/3 オリーブ褐色中粒砂



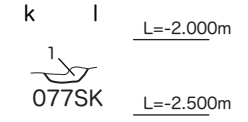
09Ab区064SK土層

1. 2.5Y4/4 オリーブ褐色中粒砂を多く含む



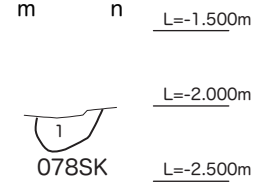
09Ab区066SK土層

1. 2.5Y3/2 黒褐色砂質(中粒)シルト
2. 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色砂質(中粒)シルト
3. 2.5Y3/2 黒褐色砂質(中粒)シルトと2.5Y4/4 オリーブ褐色中粒砂の斑土



09Ab区077SK土層

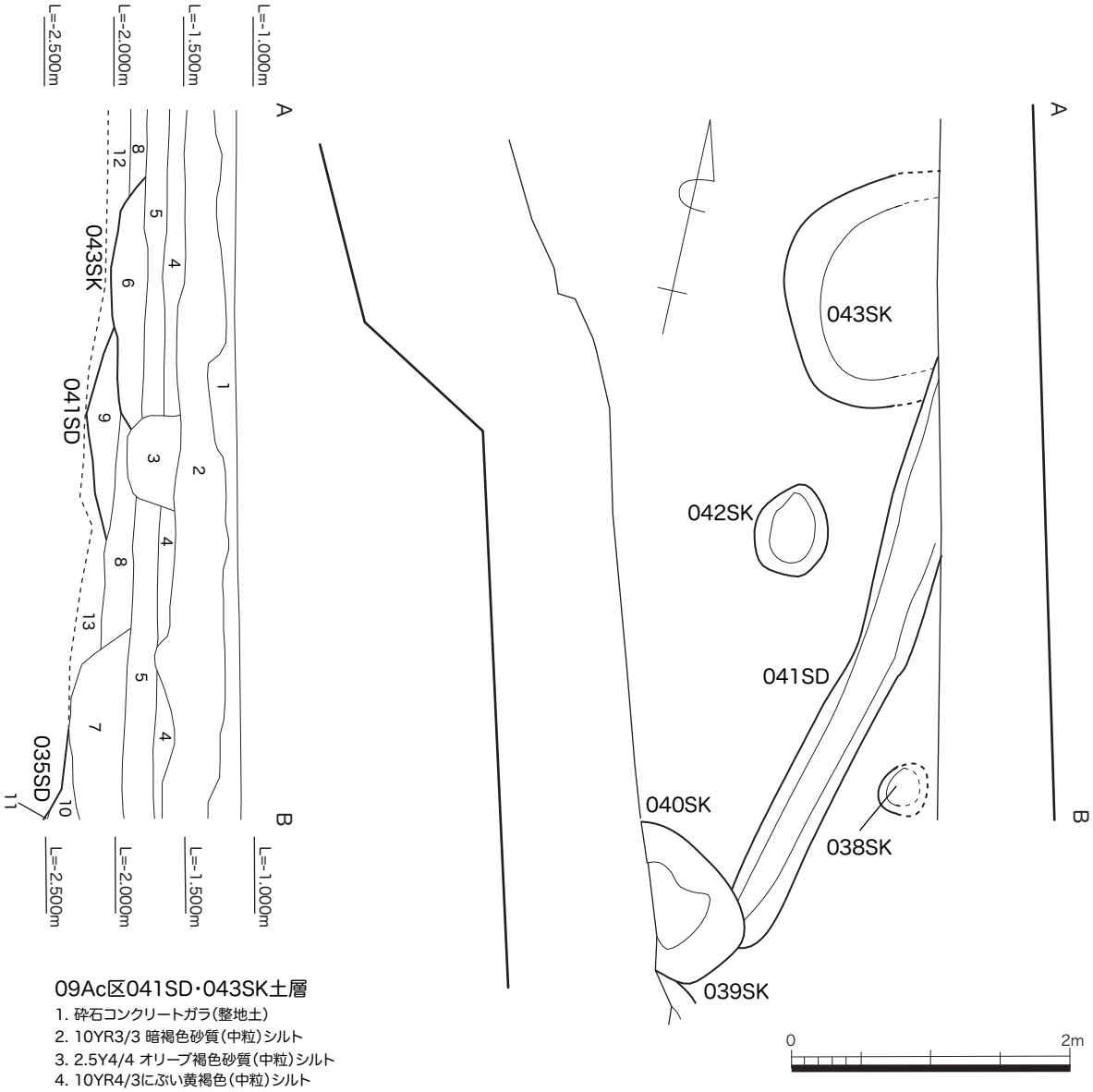
1. 2.5Y3/2 黒褐色砂質(中粒)シルトと2.5Y4/4 オリーブ褐色中粒砂の斑土



09Ab区078SK土層

1. 2.5Y3/2 黒褐色砂質(中粒)シルト

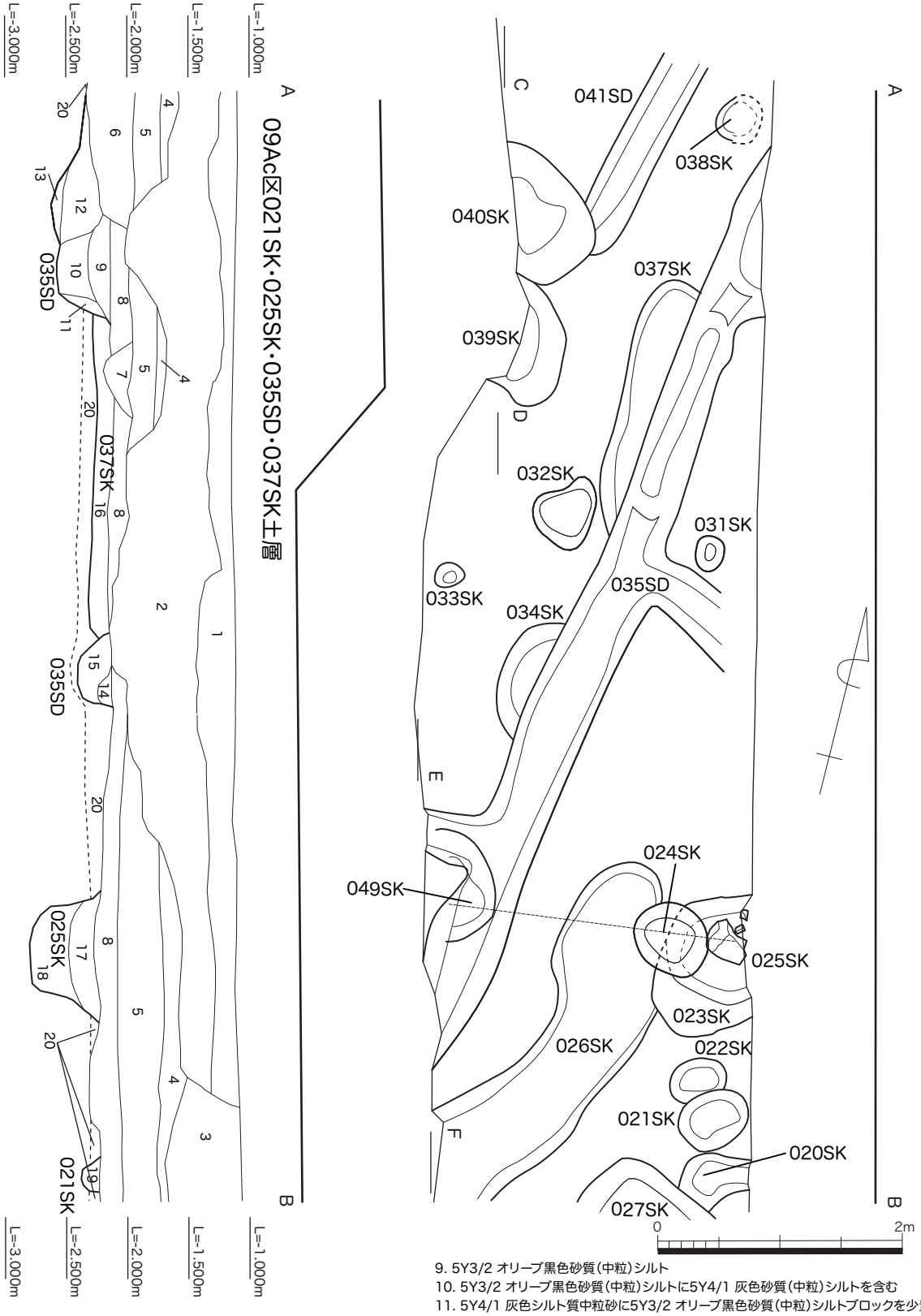
図 19　09Ab 区 095SB 遺構図（1/50）



09Ac区041SD・043SK土層

1. 砕石コンクリートガラ（整地土）
2. 10YR3/3 暗褐色砂質（中粒）シルト
3. 2.5Y4/4 オリーブ褐色砂質（中粒）シルト
4. 10YR4/3にぶい黄褐色（中粒）シルト
5. 2.5Y3/1黒褐色砂質（中粒）シルト
6. 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色砂質（中粒）シルト
7. 5Y3/2 オリーブ黒色砂質（中粒）シルト
8. 2.5Y3/2黒褐色砂質（中粒）シルトに2.5Y5/2暗灰黄色砂質（中粒）シルトブロックを含む。（包含層）
9. 2.5Y4/1 黄灰色砂質（中粒）シルト
10. 5Y4/1 灰色砂質（中粒）シルト 5Y6/1 灰色シルト質中粒砂を含む
11. 5Y5/2 灰オリーブ色シルト質中粒砂
12. 2.5Y5/3 黄褐色シルト質中粒砂（基盤層）
13. 2.5Y5/2 暗灰黄色砂質（中粒）シルト（基盤層）

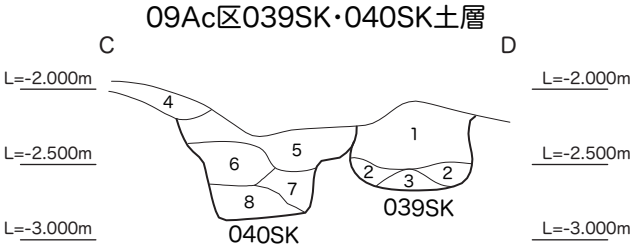
図 20　09Ac 区 041SD・043SK 遺構図（1/50）



09Ac区021SK・025SK・035SD・037SK土層

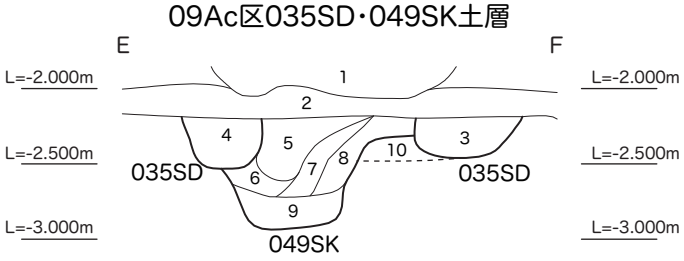
1. 砕石コンクリートガラ(整地土)
2. 10YR3/3 暗褐色砂質(中粒)シルト
3. 10YR4/4 褐色砂質(中粒)シルト 炭化物、ゴミを含む
4. 10YR4/3にぶい黄褐色(中粒)シルト
5. 2.5Y3/1黒褐色砂質(中粒)シルト
6. 5Y3/2 オリーブ黒色砂質(中粒)シルト
7. 2.5Y3/2 黒褐色砂質(中粒)シルトと2.5Y5/4 黄色褐色シルト質中粒砂の斑土
8. 2.5Y3/2黒褐色砂質(中粒)シルトに2.5Y5/2暗灰黄色砂質(中粒)シルトブロックを含む。(包含層)
9. 5Y3/2 オリーブ黒色砂質(中粒)シルト
10. 5Y3/2 オリーブ黒色砂質(中粒)シルトに5Y4/1 灰色砂質(中粒)シルトを含む
11. 5Y4/1 灰色シルト質中粒砂に5Y3/2 オリーブ黒色砂質(中粒)シルトブロックを少量含む
12. 5Y4/1 灰色砂質(中粒)シルト 5Y6/1 灰色シルト質中粒砂を含む
13. 5Y5/2 灰オリーブ色シルト質中粒砂
14. 2.5Y4/1 灰色砂質(中粒)シルト
15. 5Y4/1 灰色砂質(中粒)シルト
16. 2.5Y3/1 黒褐色砂質(中粒)シルト
17. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質(中粒)シルト
18. 5Y3/1 オリーブ黒色砂質(中粒)シルト
19. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質(中粒)シルト
20. 2.5Y5/2 暗灰黄色砂質(中粒)シルト(基盤層)

図 21　09Ac 区 021SK・025SK・035SD・037SK・039SK・040SK・049SK 遺構図 1 （1/50）



09Ac区039SK・040SK土層

1. 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色砂質(中粒)シルト
2. 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色砂質(中粒)シルトに2.5Y5/2 暗灰黄色砂質(中粒)シルトを多く含む
3. 2.5Y5/2 暗灰黄色砂質シルト質中粒砂
4. 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色砂質(中粒)シルト
5. 2.5Y3/2 黒褐色砂質(中粒)シルト
6. 2.5Y3/2 黒褐色砂質(中粒)シルトに2.5Y5/2 暗灰黄色砂質(中粒)シルトブロックを少量含む
7. 2.5Y3/2 黒褐色砂質(中粒)シルトと2.5Y5/2 暗灰黄色砂質(中粒)シルトの斑土
8. 2.5Y5/2 暗灰黄色砂質(中粒)シルトに2.5Y3/2 黒褐色砂質(中粒)シルトを多く含む



09Ac区035SD・049SK土層

1. 撹乱
2. 2.5Y3/2黒褐色砂質(中粒)シルトに2.5Y5/2暗灰黄色砂質(中粒)シルトブロックを含む(包含層)
3. 2.5Y3/2 黒褐色砂質(中粒)シルト
4. 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色砂質(中粒)シルトに2.5Y5/2 暗灰黄色砂質(中粒)シルトを含む
5. 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色砂質(中粒)シルト
6. 5Y3/2　オリーブ黒色砂質(中粒)シルト
7. 2.5Y3/2 黒褐色砂質(中粒)シルト
8. 2.5Y3/2 黒褐色砂質(中粒)シルトに2.5Y5/2 暗灰黄色砂質(中粒)シルトを含む
9. 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色砂質(中粒)シルト
10. 2.5Y5/2 暗灰黄色シルト質中粒砂(基盤層)

図 22　09Ac 区 021SK・025SK・035SD・037SK・039SK・040SK・049SK 遺構図２（1/50）

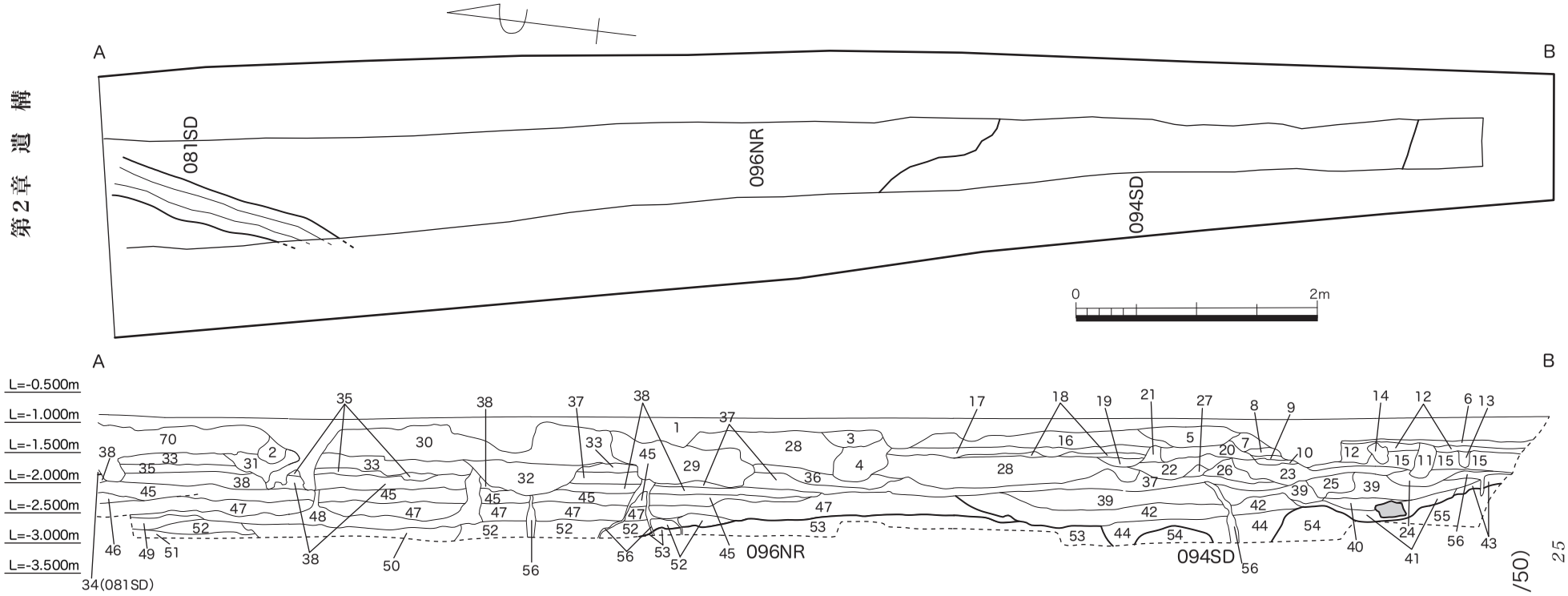
落ち込み、南肩部はゆるやかな傾斜になっている。調査時には、上位層とは明瞭に区分された灰色砂質シルト層を包含層２とし、その上位の暗灰黄色シルト以上を包含層とし遺物を取り上げた。また 096NR の南肩に接して、焼土ブロック・炭化物を多く含む暗オリーブ褐色砂質シルト層の広がり 097SX を検出した。この 097SX は、幅 250cm にわたる不明瞭な落ち込みで、096NR の堆積の一部とも考えられる。この 097SX 部分については包含層３として遺物を取り上げている。さらに包含層２とした灰色砂質シルト層の下位で、097SX 部分を除いた層を包含層４として掘り下げていったが、−300cm 程のところで湧水が激しくなり、調査区の幅も狭いことから、更なる掘削は断念した。時期は包含層とした上位層が中世〜近世、包含層２が中世後半、包含層３・４が古墳時代〜古代になる。

２．09B 区

現道及び民家出入り口部分を控えて、北から Ba・Bb・Bc 区の３区に分けて調査を行った。

（１）09Ba 区（図 24・写真図版 6）

最上位の整地層下の暗オリーブ褐色砂質シルト・暗灰黄色砂質シルトを除去した−180cm 〜−200cm のオリーブ褐色砂質シルト面で、黒褐色砂質シルトを埋土とする深さ約 20cm の落ち込み 003SK を確認した。出土遺物から 003SK の



09Ad区094SD・096NR土層

1. 10YR4/4 褐色砂質(中粒)シルト 炭化物、ゴミを含む
2. 10YR3/3 暗褐色砂質(中粒)シルト
3. 10YR4/3 にぶい黄褐色砂質(中粒)シルト
4. 2.5Y4/3 オリーブ褐色砂質(中粒)シルト
5. 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色砂質(中粒)シルト 5cm大の礫を多く含む
6. 2.5Y5/3 黄褐色中粒砂
7. 10YR4/3 にぶい黄褐色砂質(中粒)シルト
8. 10YR3/2 黒褐色シルトと10YR4/3にぶい黄褐色砂質(中粒)シルトの斑土
9. 2.5Y5/4 黄褐色シルト
10. 2.5Y3/2 黒褐色シルト
11. 2.5Y4/3 オリーブ褐色砂質(中粒)シルト 2.5Y3/2黒褐色シルトブロックを少量含む
12. 2.5Y4/3 オリーブ褐色砂質(中粒)シルトに2.5Y5/4黄褐色シルト、2.5Y3/2黒褐色シルトのブロックを多く含む 貝を多く含む
13. 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色砂質(中粒)シルト
14. 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色砂質(中粒)シルトに2.5Y6/4にぶい黄色中粒砂ブロックを含む
15. 2.5Y4/4 オリーブ褐色砂質(中粒)シルト 幅3cm程の転圧されたシルト層が4層水平に堆積 道路あとか?
16. 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色砂質(中粒)シルト
17. 2.5Y4/4 オリーブ褐色砂質(中粒)シルト
18. 2.5Y5/3 黄褐色砂質(中粒)シルト
19. 2.5Y4/4 オリーブ褐色砂質シルトに2.5Y3/3暗オリーブ褐色砂質(中粒)シルトブロックを含む
20. 10YR4/3 灰黄褐色砂質(中粒)シルト
21. 2.5Y4/3 オリーブ褐色砂質(中粒)シルト
22. 2.5Y4/4 オリーブ褐色砂質(中粒)シルトに2.5Y5/4黄褐色シルトブロックを含む
23. 2.5Y4/3 オリーブ褐色砂質(中粒)シルトに2.5Y5/4黄褐色シルト、2.5Y3/2黒褐色シルトのブロックを多く含む
24. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質(中粒)シルトと2.5Y3/1黒褐色砂質(中粒)シルトの斑土
25. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質(中粒)シルトと2.5Y3/1黒褐色砂質(中粒)シルトの斑土
26. 10YR5/4 にぶい黄褐色砂質(中粒)シルト
27.2.5Y5/4 黄褐色シルト
28. 2.5Y4/3 オリーブ褐色砂質シルトに2.5Y3/3暗オリーブ褐色砂質(中粒)シルトブロックを含む
29. 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色砂質(中粒)シルト 酸化鉄分を含む
30. 2.5Y4/3 オリーブ褐色砂質(中粒)シルト
31. 10YR4/4 褐色砂質(中粒)シルト
32. 2.5Y4/3 オリーブ褐色砂質(中粒)シルト
33. 2.5Y4/4 オリーブ褐色砂質(中粒)シルト
34. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質(中粒)シルト
35. 2.5Y4/3 オリーブ褐色砂質(中粒)シルト
36. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質(中粒)シルト
37. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質(中粒)シルト 酸化鉄分を多く含む
38. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質(中粒)シルトに炭化物を含む
39. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質(中粒)シルト 酸化鉄分を多く含む
40. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質(中粒)シルトと2.5Y3/1黒褐色砂質(中粒)シルトの斑土
41. 2.5Y3/1 黒褐色シルト
42. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質(中粒)シルト
43. 5Y4/2 灰オリーブ色砂質(中粒)シルト 酸化鉄分を多く含む(鉄分硬化)
44. 2.5Y3/1 黒褐色砂質(中粒)シルト 木質を多く含む
45. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質(中粒)シルト
46. 2.5Y3/2 黒褐色砂質(中粒)シルト 包含層として遺物を取り上げ
47. 5Y4/1 灰色砂質(中粒)シルト シルト質多く硬くしまる 包含層2として遺物を取り上げ
48. 7.5Y5/1 灰色シルト質中粒砂 包含層4として遺物を取り上げ
49. 2.5Y4/3 オリーブ褐色砂質(中粒)シルトと2.5Y5/4黄褐色シルトの斑土 包含層4として遺物を取り上げ
50. 5Y4/2 灰オリーブ色シルト
51. 7.5Y4/1 灰色砂質(中粒)シルト 包含層4として遺物を取り上げ
52. 5Y4/2 灰オリーブ色砂質(中粒)シルトに2.5Y3/2 黒褐色砂質(中粒)シルトブロックを含む 包含層4として遺物を取り上げ
53. 2.5Y5/2 暗灰黄色砂質(中粒)シルト(基盤層)
54. 5Y5/2 灰オリーブ色中粒砂(基盤層)
55. 2.5Y5/3 黄褐色中粒砂(基盤層)
56. 2.5Y3/3 2.5Y7/4 浅黄褐色中粒砂(噴砂)

図23 09Ad区094SD・096NR遺構図(1/50)

時期は中世前半期と考えられる。

（2）09Bb 区（図 24・写真図版 6）

堅くしまった互層状堆積をなす黄褐色砂質シルトを除去した約−180cm 面で、貝層の広がりを確認した。貝層はハマグリ・マガキ・アサリ・シジミで構成されており、上部を貝層 3 上位、下部を貝層 3 下位、さらにその下位を貝層 3 最下位としてサンプリングを行った。その後貝層を全て取り除いたところ、調査区ほぼ全てが溝及び土坑内の堆積と確認されたので、004SD と命名した。この 004SD の下端については確認できるが、上端は撹乱部に切られたり、調査区外で不明である。004SD の埋土である貝層 3 上位では 507・509 の南部系陶器山茶碗、下位では 508 の南部系陶器山茶碗が出土しており、時期は中世と考えられる。

（3）Bc 区（図 24・写真図版 6）

やや互層状に堆積するオリーブ褐色砂質シルト層を除去した約−180cm 面で、貝層の広がりを確認した。貝層はハマグリ・マガキ・アサリ・シジミで構成されており、貝層 1 としてサンプリングした。貝層の下面は黄褐色砂の基盤面となっており、001SK と 002SK の 2 つの土坑を検出した。上記の貝層 1 は、001SK の埋土である混貝土層の上に重なって堆積しており、連続する堆積の可能性もある。001SK の深さ 30cm を測る。また南側の深さ 30cm を測る 002SK の埋土にもハマグリ・マガキ・アサリ・シジミが含まれており、貝層 2 としてサンプリングした。002SK の貝層 2 からは灰釉陶器（図 40-510）が出土していることから、時期は平安時代前期と考えておきたい。

3．09C 区

現道及び民家出入り口部分を控えて、北から Ca 区〜 Cf 区の 6 区に分けて調査を行った。

（1）Ca 区（図 25・写真図版 6）

標高約−230cm の暗灰黄色砂質シルト層とその下位の黒褐色砂質シルト層の境あたりで、厚さ 8cm のハマグリ・アサリを含む混貝土層を検出したが、明瞭な遺構は確認できなかった。また南東隅で、黒褐色砂質シルトと黄灰色砂質シルトの斑土を埋土とする土坑 005SK を検出している。

（2）Cb 区（図 25・写真図版 6）

明瞭な遺構は確認されていないが、−210cm〜−230cm の黄灰色砂質シルト層では近世陶磁器が、さらに下位の黒褐色砂質シルト層では古代〜中世の陶器・土師器が出土している。さらに−280cm 以下にも黒褐色砂質シルト層の堆積は続くが、湧水のため掘削は断念した。

（3）Cc 区（図 26・写真図版 7）

明瞭な遺構は確認されていないが、−240cm で検出した黒褐色砂質シルト層では古代〜中世の陶器・土師器が出土している。黒褐色砂質シルト層上面には固い鉄分の沈着が見られる。さらに−270cm 以下にも黒褐色砂質シルト層の堆積は続くが、湧水のため掘削は断念した。

（4）Cd 区（図 26・写真図版 7）

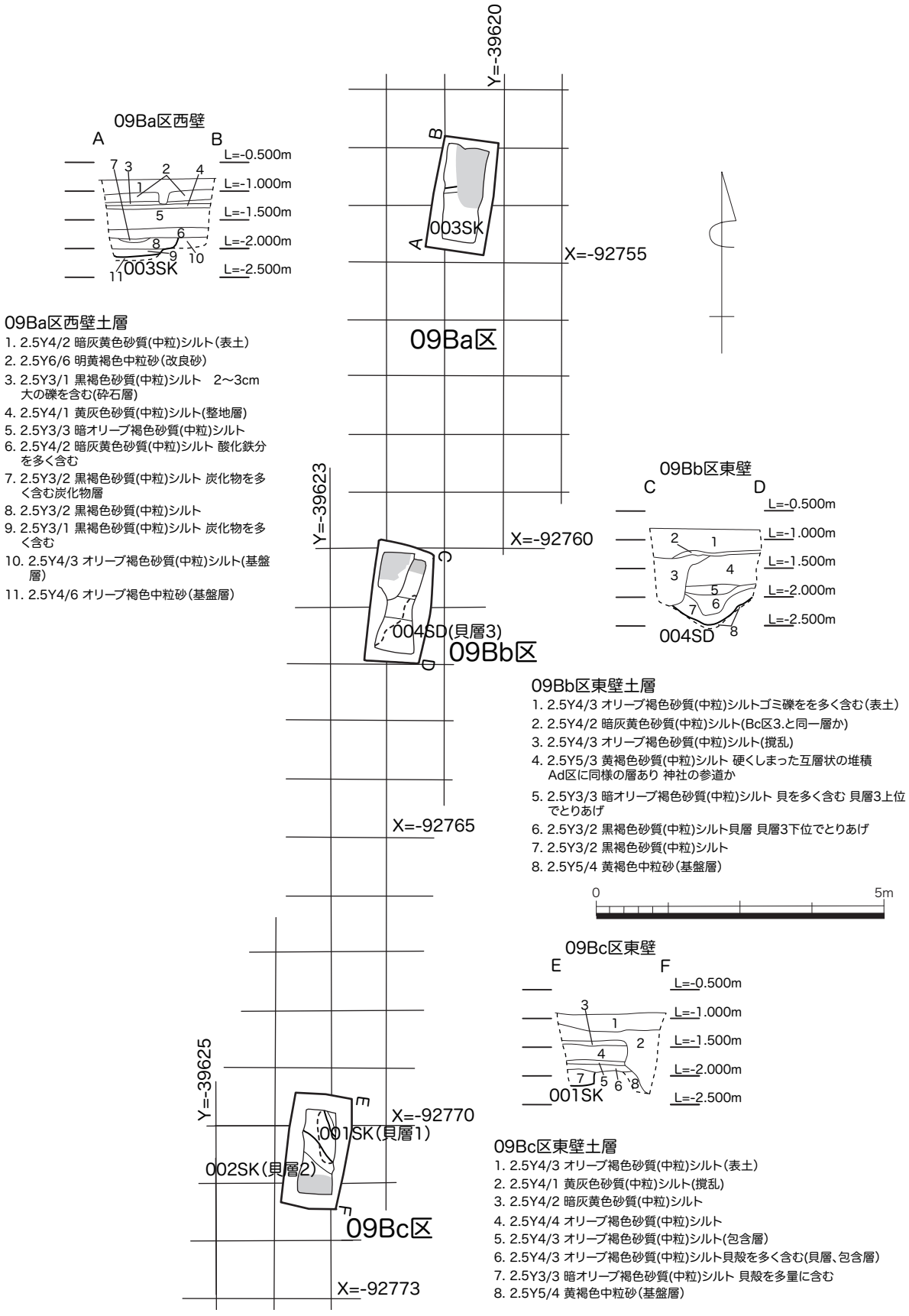
−240cm で検出された黒褐色砂質シルト層も Cc 区と同様に、上面には固い鉄分の沈着が見られ、古代〜中世の陶器・土師器を含んでいる。この黒褐色砂質シルト層を切り込んで、鉄分を多く含む土坑が確認された。さらに−270cm 以下にも黒褐色砂質シルト層の堆積は続くが、湧水のため掘削は断念した。

（5）Ce 区（図 27・写真図版 7）

明瞭な遺構は確認されていないが、−260cm で検出した黒褐色砂質シルト層では古代〜中世の陶器・土師器、近世陶磁器が出土している。さらに−280cm 以下にも黒褐色砂質シルト層の堆積は続くが、湧水のため掘削は断念した。

（6）Cf 区（図 27・写真図版 7）

−260cm 付近まで溝または土坑と思われる近世の掘り込みがあり、それに切られるように−250cm から古代〜中世の陶器・土師器の遺物を含む黒褐色砂質シルト層が検出された。さらに−270cm 以下にも黒褐色砂質シルト層の堆積は続くが、湧水のため掘削は断念した。



09Ba区西壁土層

1. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質(中粒)シルト(表土)
2. 2.5Y6/6 明黄褐色中粒砂(改良砂)
3. 2.5Y3/1 黒褐色砂質(中粒)シルト　2～3cm 大の礫を含む(砕石層)
4. 2.5Y4/1 黄灰色砂質(中粒)シルト(整地層)
5. 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色砂質(中粒)シルト
6. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質(中粒)シルト 酸化鉄分を多く含む
7. 2.5Y3/2 黒褐色砂質(中粒)シルト 炭化物を多く含む炭化物層
8. 2.5Y3/2 黒褐色砂質(中粒)シルト
9. 2.5Y3/1 黒褐色砂質(中粒)シルト 炭化物を多く含む
10. 2.5Y4/3 オリーブ褐色砂質(中粒)シルト(基盤層)
11. 2.5Y4/6 オリーブ褐色中粒砂(基盤層)

09Bb区東壁土層

1. 2.5Y4/3 オリーブ褐色砂質(中粒)シルトゴミ礫をを多く含む(表土)
2. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質(中粒)シルト(Bc区3.と同一層か)
3. 2.5Y4/3 オリーブ褐色砂質(中粒)シルト(撹乱)
4. 2.5Y5/3 黄褐色砂質(中粒)シルト 硬くしまった互層状の堆積 Ad区に同様の層あり 神社の参道か
5. 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色砂質(中粒)シルト 貝を多く含む 貝層3上位でとりあげ
6. 2.5Y3/2 黒褐色砂質(中粒)シルト貝層 貝層3下位でとりあげ
7. 2.5Y3/2 黒褐色砂質(中粒)シルト
8. 2.5Y5/4 黄褐色中粒砂(基盤層)

09Bc区東壁土層

1. 2.5Y4/3 オリーブ褐色砂質(中粒)シルト(表土)
2. 2.5Y4/1 黄灰色砂質(中粒)シルト(撹乱)
3. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質(中粒)シルト
4. 2.5Y4/4 オリーブ褐色砂質(中粒)シルト
5. 2.5Y4/3 オリーブ褐色砂質(中粒)シルト(包含層)
6. 2.5Y4/3 オリーブ褐色砂質(中粒)シルト貝殻を多く含む(貝層、包含層)
7. 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色砂質(中粒)シルト 貝殻を多量に含む
8. 2.5Y5/4 黄褐色中粒砂(基盤層)

図 24　09B 区遺構図（1/100）

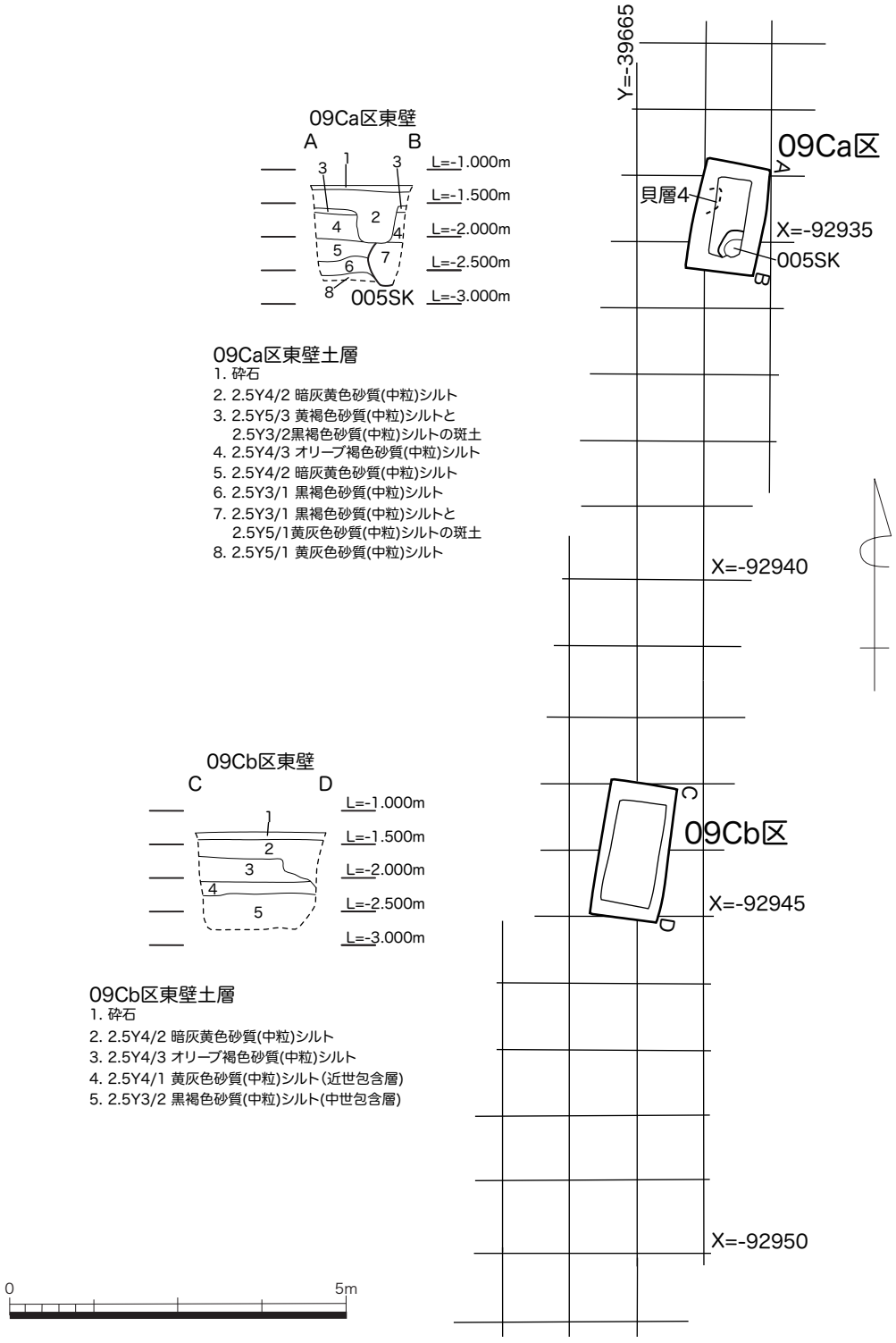


図 25　09C 区遺構図 1（1/100）

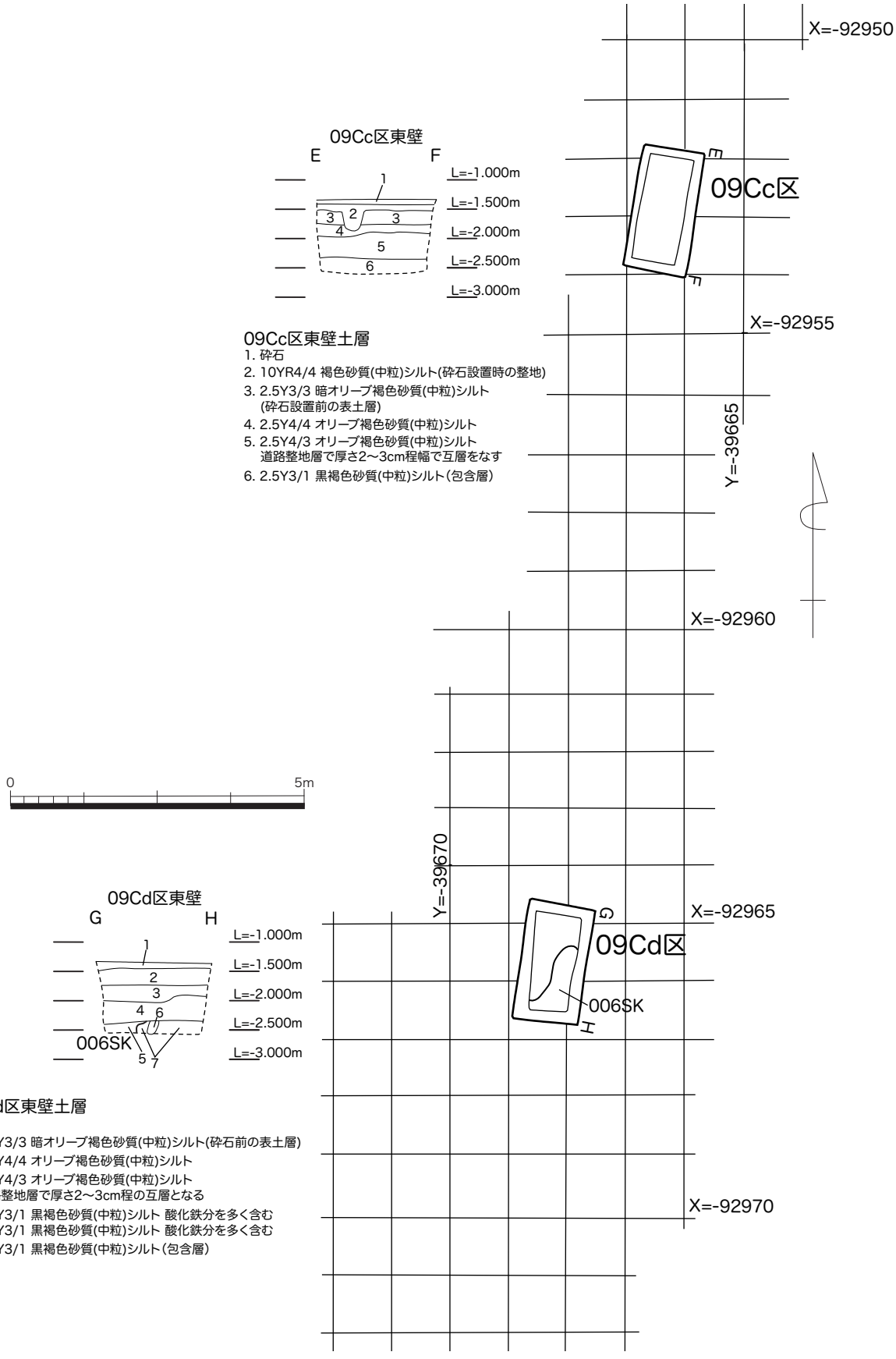


図 26　09C 区遺構図２（1/100）

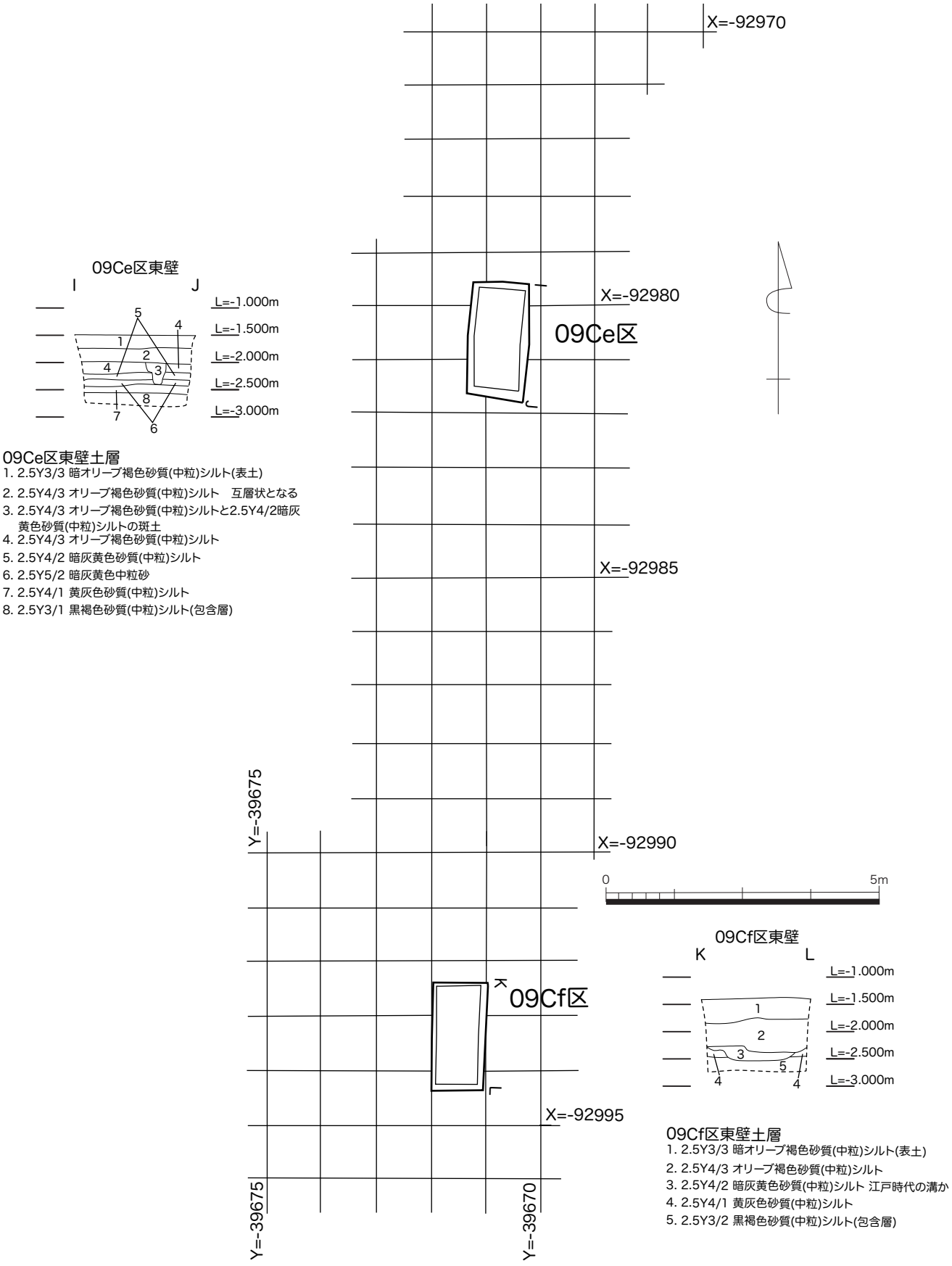


図 27　09C 区遺構図３（1/100）

第３章　出土遺物

出土遺物は、09A 区から出土したものがほとんどで、09B 区・09C 区のものが少量ある。主に遺構の時期を考える上で、重要と思われる資料を優先して抽出し、その後包含層出土のものについて、グリッドを目安に、09Aa 区から 09Ad 区を分けて、出土遺物の状況を反映するように遺物を選び出した。また、製塩土器や緑釉陶器、青磁、白磁、古瀬戸陶器、瓦と、土錘、陶丸、加工円盤などの土製品も優先的に図化を行った。

１．土器・陶磁器

（１）09A 区遺構出土の土器・陶磁器（図 28-1 ～図 31-165）

001NR（図 28- １～４）：１は土師器の受口口縁甕で、口縁部径 14.0cm。２は青磁の四耳壺の肩部、３は古瀬戸陶器の灰釉直縁大皿で、底部に三足が付く。４は常滑産の甕で外反する口縁部の端部が上下にのびて帯状になるもの。

002NR（図 28- ５～ 32）：５～９は須恵器で、５は受け部のある杯身に伴う杯蓋、６・７は受け部のある丸底の杯身、８は丸底の杯身、９は口縁部径 12.0cm の杯身。10・11 は灰釉陶器で、10 は内湾する高台の付く碗、11 は内・外面灰釉が残る皿。12 ～ 23 は南部系陶器で、12 ～ 14・15 は高台が付く山茶碗、15・16・18 ～ 21 は高台がない山茶碗、20 の外面底部に「○」に「大」を書いた墨書がある。14 と 17 は内・外面に煤が付着し、18 は内面に煤が付着する。22 は小碗の底部、23 は小皿。24 ～ 27 は北部系陶器で、24 ～ 26 が山茶碗、27 が小皿、25 の内面に煤が付着する。28 は青磁の碗で外面に鎬蓮弁文がある。29 は土師器の小皿、外面底部付近に斜め上がりのナデ痕がみられる。30 は常滑産の甕で、口縁部が前後に拡張されて外側に面を作る。31 は古瀬戸陶器の縁釉皿で、口縁部に灰釉がかけられている。32 は常滑産の甕の底部。

003SK（図 28-33 ～ 38）：33 ～ 35 は灰釉陶器の碗で 35 は外面に煤が付着する。36 ～ 38 は南部系陶器で 36・37 が山茶碗で、比較的丁寧な作りのもの、38 が小碗である。

005SK（図 28-039・040）：39 が内・外面に灰釉が付く灰釉陶器の碗、40 は外面に横ハケをする土師器の羽釜形鍋。

007SD（図 28-041･042）:41 は高台が付く杯身、42 がナデ調整の甕。

008SK（図 28-043）：北部系陶器の小皿で、内面底部がやや盛り上がる形状である。口縁部径 8.2cm。

017SD（図 29-044 ～ 047）：江戸時代後期の遺物が主体で、44 は灰釉方形箱型の水注、45 が外面に呉須釉の絵がある磁器碗、46 が内外面に灰釉のかかる小碗で、外面に珠文を円形にめぐらせた文様を描いている。47 は筒形の磁器碗で外面に水草の絵があり、内面の上下端に直線文が１条ずつひかれている。

018SE（図 29-048 ～ 101）：古代から室町時代の遺物が出土しており、48 ～ 54 が須恵器で 48 ～ 50 が杯蓋、51 が蓋受け部のある杯身、52 が高台付きの杯身、53 が体部が丸く立ち上がる鉢、54 は高台のない杯身。55 ～ 58 が灰釉陶器碗で、55・56・58 の内面に灰釉が施されている。59 ～ 78 が土師器で、59 ～ 61 が古代のもの、62 ～ 78 が中世のもの。59 は高杯の脚部片、60 が平底の甕の底部、61 がハケ調整の甕。62 ～ 65 が口縁部径 10cm 以下の小皿、64 ～ 74 が径 10cm 以上の皿で、小皿は口縁部が丸く立ち上がるが、皿は全体的に口縁部が外反する形状で、69・72・74 は口縁部の外反が強い。これらの皿は、内面と外面に斜めに上がる捻れ状のナデ調整がみられ、口縁部が強く横ナデされているもので、型作りの可能性がある。75・76 は口縁端部を内側に折り曲げる伊勢型鍋、77・78 は羽釜形鍋。79 は南部系陶器の山茶碗で、口縁部径 14.0cm。80 ～ 97 は北部系陶器で 80 ～ 82・97 は小皿で、83 ～ 96 は山茶碗である。82 は外面底部に「十」の墨書がある。83 ～ 85 は口縁

09A 区 001NR（E001 ～ E004）

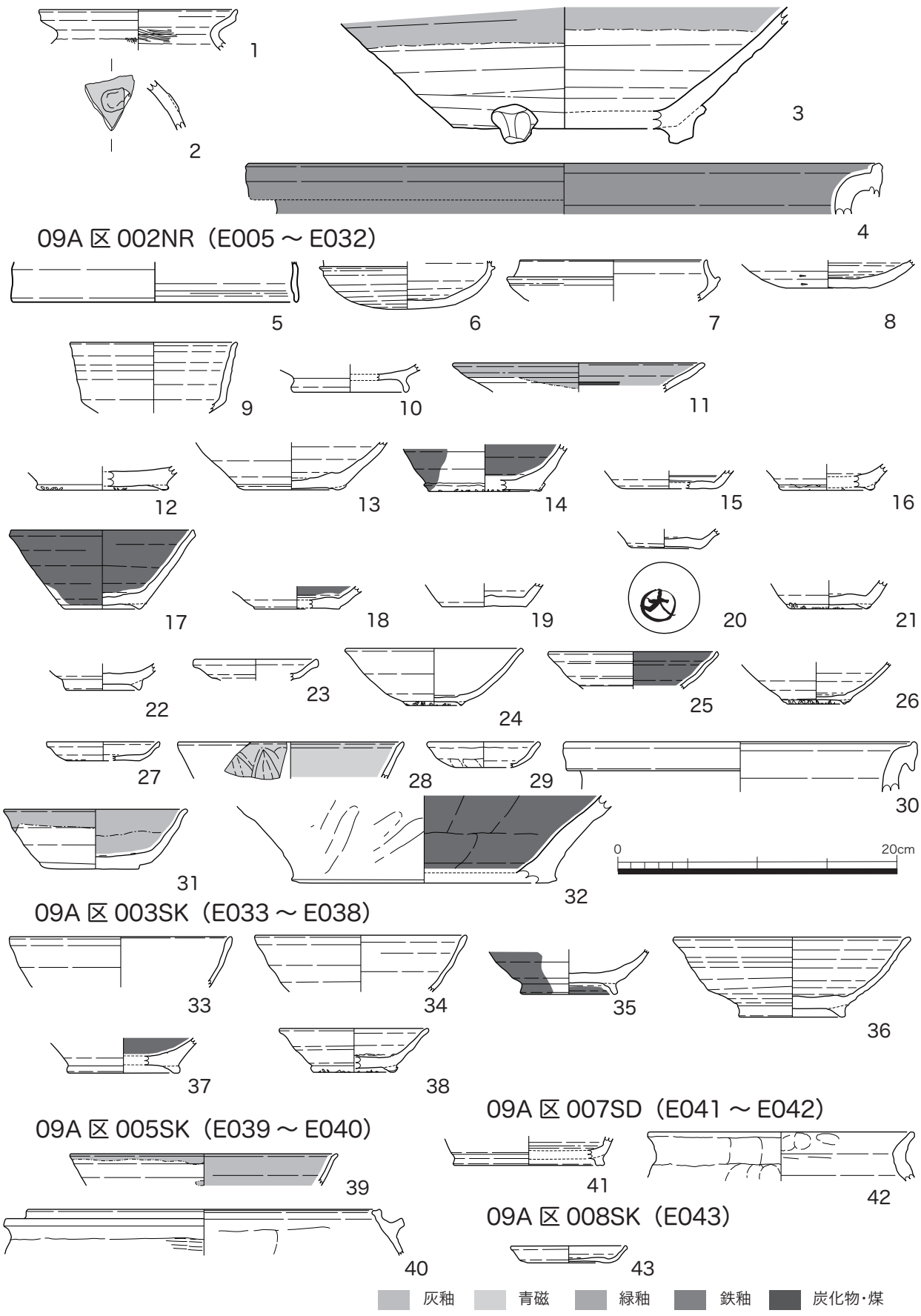


図 28　09A 区遺構出土土器・陶磁器 1（1/4）

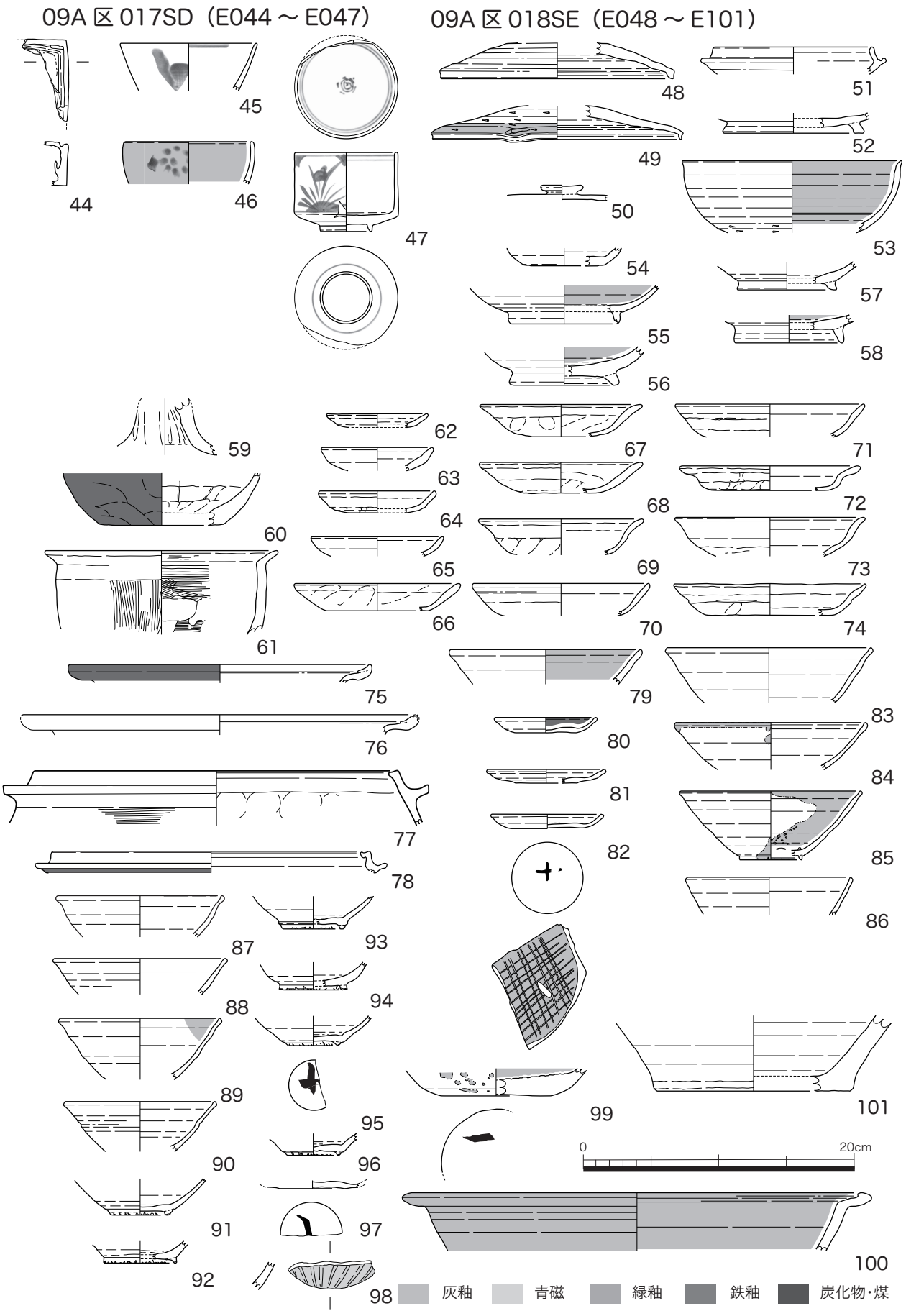
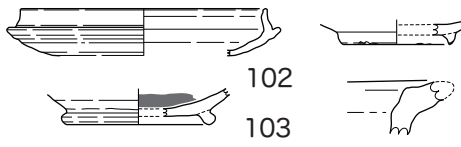
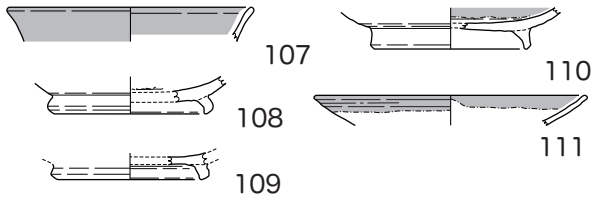


図 29　09A 区遺構出土土器・陶磁器２（1/4）

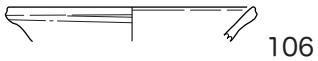
09A 区 020SK（E102 ～ E105）



09A 区 025SK（E107 ～ E111）

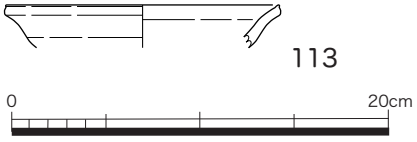


09A 区 023SK（E106）



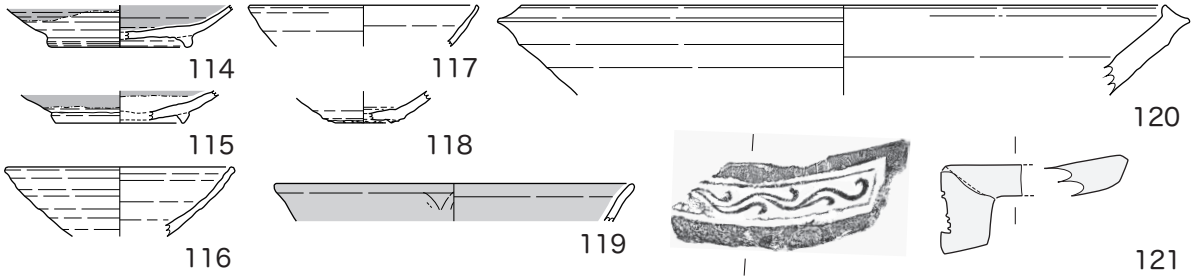
09A 区 029SK（E0112）

09A 区 034SK（E0113）



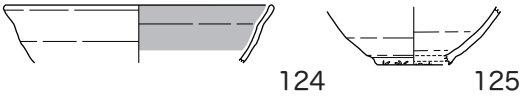
灰釉　青磁　緑釉　鉄釉　炭化物･煤

09A 区 035SD（E114 ～ E121）

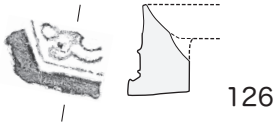


09A 区 039SK（E122・E123）

09A 区 040SK（E124・E125）

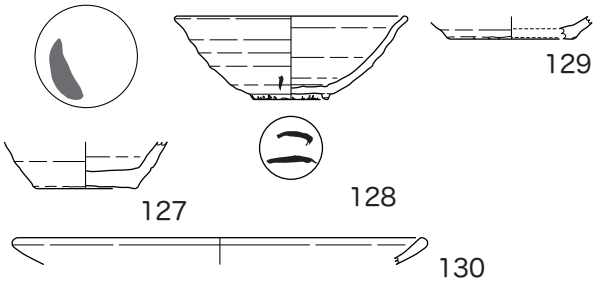


09A 区 041SD（E0126）

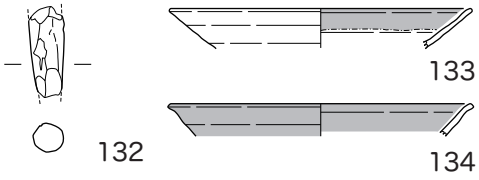


09A 区 046SK（E0131）

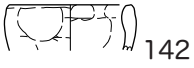
09A 区 044SK（E127 ～ E130）



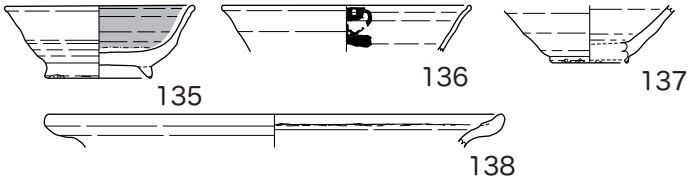
09A 区 049SK（E132 ～ E134）



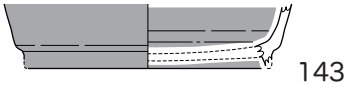
09A 区 057SK（E142）



09A 区 054SK（E135 ～ E138）



09A 区 059SK（E143）



09A 区 056SK（E139 ～ E141）

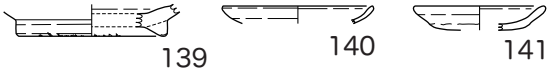


図 30　09A 区遺構出土土器・陶磁器 3（1/4）

部径が 13cm ～ 15cm 程あり、86 ～ 90 が口縁部径 12cm 程で 83 ～ 85 より薄手である。90 ～ 96 は山茶碗の底部で、95 と 97 の外面底部に墨書が施されている。98 は青磁の椀片、99 は内面に卸目のある古瀬戸陶器の灰釉卸皿で、100 は古瀬戸陶器の灰釉折縁鉢で内・外面に灰釉がかけられている。101 は常滑産の甕の底部である。

020SK（図 30-102 ～ 105）：102 は蓋受け部のある須恵器の杯身、104・105 は灰釉陶器の碗で、断面内湾する高台である。105 は清郷型鍋の口縁部で、灰釉陶器に伴う時期のものである。

023SK（図 30-106）：106 は南部系陶器の山茶碗で、口縁部径 13.0cm である。

025SK（図 30-107 ～ 111）：107 ～ 111 は灰釉陶器で、107 ～ 110 が碗、111 が皿で、107 と 111 は、内・外面に灰釉が施されている。

029SK（図 30-112）：112 は古瀬戸陶器の灰釉小壺で、口縁部がすぼまる形である。

034SK（図 30-113）：南部系陶器の山茶碗で、口縁部径 14.4cm。

035SD（図 30-114 ～ 121）：114・115 は灰釉陶器で、114 が碗、115 が皿で、ともに断面やや内湾する高台が付く。116 ～ 118 は北部系陶器の山茶碗で，薄手のものである。119 は青磁の碗で、外面に鎬蓮弁文がみられる。120 は常滑産の片口鉢で、口縁部径 34.0cm 程である。121 は中世の軒平瓦で、瓦当の半分が残存している。均整唐草文様で、全体に緩やかな太い線で表出され先端に若干の巻きがある。中心飾りは不明。外縁の幅は約 1.0cm で上端は幅数 mm の斜め削りが施される。瓦当顎幅は 2.5cm で全体にナデ。顎面に離れ砂が付着する。平瓦部は厚さ 1.7cm。一枚作りで側縁は斜めに削られている。接合方法は端面を斜めに削った平瓦に瓦当部を接合する。色調は黒色系で、焼成は硬質で全体に軽く燻しがかかっている。瓦は北部系陶器の時期に対応するものか。

039SK（図 30-122・123）：122 は灰釉陶器の皿で、内・外面に灰釉が施されている。123 は北部系陶器の山茶碗で、口縁部径 13.0cm である。

040SK（図 30-124・125）：124・125 は北部系陶器の山茶碗で、124 は内面に煤が付着している。

041SD（図 30-126）：126 は中世の軒平瓦で、瓦当のごく一部が残る。瓦当文様は線の細い均整唐草文様と考えられるが全形は不明。121 とは線の太さや巻きの形状が異なることから別笵（文様）と判断される。外縁幅は 0.8 ～ 1.0cm。瓦当顎幅は 3.3cm。離れ砂の付着は認められない。平瓦部は不明であるが、接合方法は 121 と同じである。その接合面から平瓦の厚さは 1.8cm 前後と推測される。色調は黒～灰色系。焼成は硬質でムラのある燻しが軽くかかっている。

044SK（図 30-127 ～ 130）:127 は南部系陶器の高台のない山茶碗で、内面底部に墨書がみられる。128 と 129 は北部系陶器の山茶碗で、128 は口縁部径 12.0cm で外面底部に「二」の墨書がみられる。130 は土師器の皿と思われるもので、口縁部径 21.4cm。

046SK（図 30-131）：131 は近世後期の灰釉仏燭台である。

049SK（図 30-132 ～ 134）：132 は製塩土器の脚部、133・134 は灰釉陶器の皿と碗で、134 の内・外面には、灰釉がかかっている。

054SK（図 30-135 ～ 138）：135 は南部系陶器の小碗で、内面に灰釉が認められる。136・137 は北部系陶器の碗で、136 の内面に墨書がみられる。138 は口縁端部を内側に折り曲げる伊勢型鍋である。

056SK（図 30-139 ～ 141）：139 は南部系陶器の山茶碗の底部で、断面三角形状の高台が付く。140 は北部系陶器の小皿、141 は土師器の小皿である。

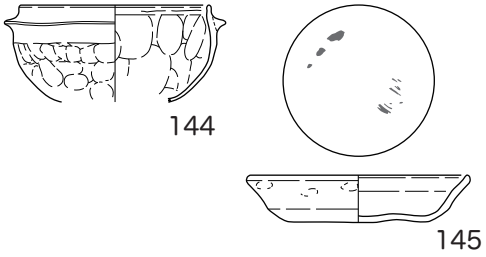
057SK（図 30-142）：142 は製塩土器で、内・外面ナデ調整で、口縁部径 6.5cm。

059SK（図 30-143）：143 は緑釉陶器の高台付き杯身で、内・外面に緑釉が施されている。

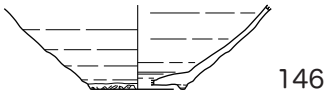
060SK（図 31-144・145）：144 は小型の羽釜形鍋で、口縁部径が 10.0cm、体部はナデ調整される。145 は土師器の皿で、口縁部径 11.5cm、内面に墨痕がみられる。

063SK（図 31-146）：146 は北部系陶器の山茶碗で、高台部径 5.0cm。

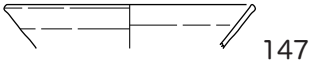
09A 区 060SK（E144・E145）



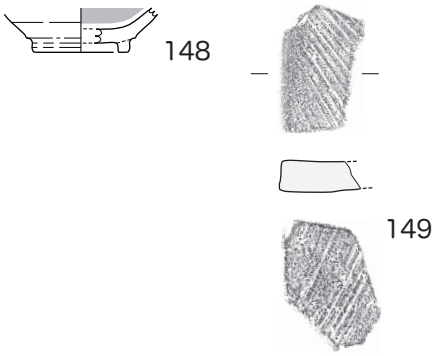
09A 区 063SK（E146）



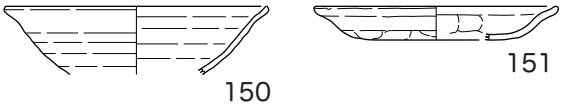
09A 区 067SK（E147）



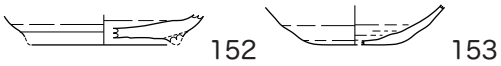
09A 区 068SK（E148・E149）



09A 区 070SK（E150・E151）

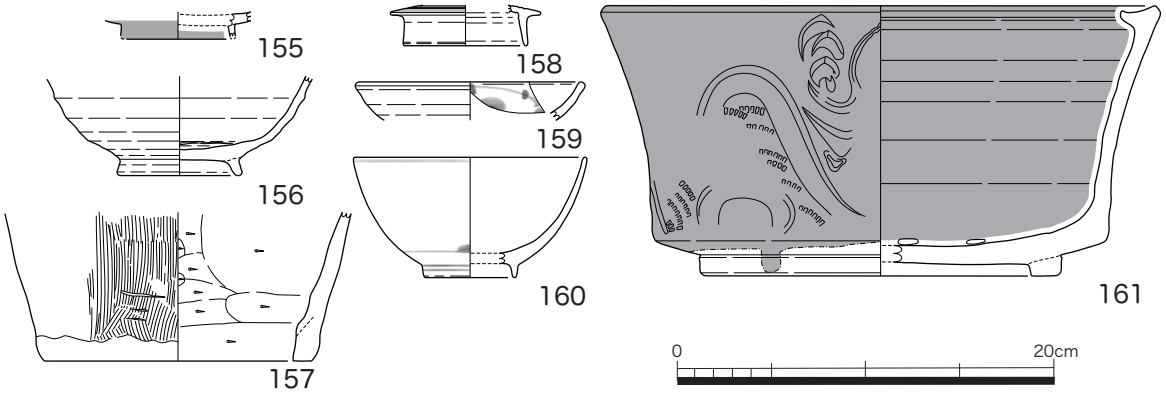


09A 区 074SK（E152・E153）

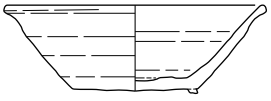


09A 区 079SK（E154）

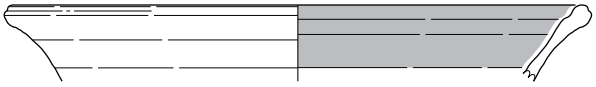
09A 区 081SD（E155 ～ E161）



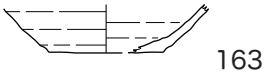
09A 区 083SK（E162）



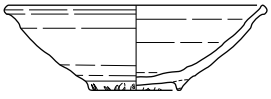
09A 区 087SK（E164）



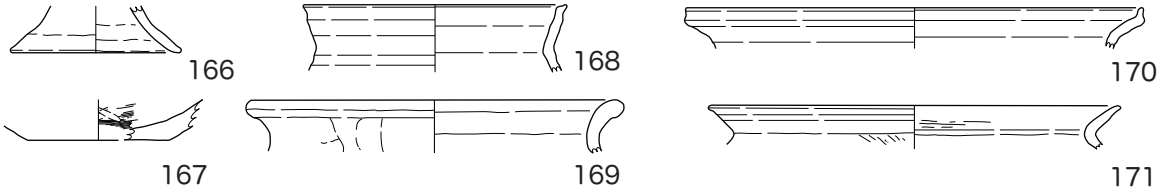
09A 区 086SK（E163）



09A 区 092SK（E165）



09Aa 区包含層（E166 ～ E206）



灰釉　青磁　緑釉　鉄釉　炭化物･煤

図 31　09A 区遺構出土土器・陶磁器 4、09Aa 区包含層出土土器・陶磁器 1（1/4）

067SK（図 31-147）：147 は北部系陶器の山茶碗で、口縁部径 13.0cm。
068SK（図 31-148・149）：148 は近世後期の灰釉碗、149 は中世の平瓦で成形台一枚作りによる。厚さは 1.7cm。凹面は糸切痕、凸面はそれに加えて離れ砂の付着。色調は黄褐色系。焼成はやや軟質で燻しはかかっていない。
070SK（図 31-150・151）：150 は北部系陶器の山茶碗、151 はナデ調整の土師器の皿で、口縁部が強く外反している。
074SK（図 31-152・153）：152 は南部系陶器の山茶碗で、高台が欠損している。153 は大窯期の重圏皿である。
079SK（図 31-154）：154 は須恵器の杯身の底部、底部径 7.6cm。
081SD（図 31-155 ～ 161）：155 は緑釉陶器の碗と思われるもの、156 は灰釉陶器の深碗で、高台が比較的高いもの。157 は土師器の甑の下半部で、外面縦ハケ調整、内面横方向のケズリ調整。158 は古瀬戸陶器の灰釉蓋で、身受け部がある。159・160 は近世後期の外面に染付けの文様がある磁器で、159 が皿、160 が碗である。161 も近世後期の灰釉鉢で、外面に大柄の波状文とその間を埋める刺突文で文様が刻まれている。
083SK（図 31-162）：南部系陶器の山茶碗で、口縁部径 13.4cm をはかる。底部に不整形な高台が付く。
086SK（図 31-163）：須恵器の杯身で、高台の付かないもの。
087SK（図 31-164）：南部系陶器の片口鉢で、口縁部径 30.0cm 程のものである。
092SK（図 31-165）：165 は北部系陶器の山茶碗で、口縁部径 13.5cm。

（２）09Aa 区包含層出土の土器・陶磁器（図 31・図 32-166 ～ 206）

古代から近世後期のものまであり、古代から中世のものが多い。166 ～ 175 は土師器で、166 が高杯の脚部、167 が杯身か皿、168 は短頸壺で口縁部径 13.8cm、頸部径 12.7cm。169 は口縁部が外反して丸くおわる端部の甕、170 が口縁端部を上方につまみ上げる形態の甕、171 は口縁部が断面「く」の字状に外反しておわる甕である。172 は甑の把手部、173 ～ 175 は製塩土器で、ナデ調整されており、174 の口縁部はやや肥厚している、175 は脚部である。176・177 は緑釉陶器の碗で、内・外面に緑釉が施されている。178 ～ 182 は灰釉陶器で、178 ～ 180 が碗、181 が皿、182 が壺の体部片か。181 の口縁部付近の内・外面に灰釉がみられる。183 ～ 192 は南部系陶器で、183 ～ 191 は山茶碗、185 の内面に有機物が付着し、187 の内面に葉脈の圧痕がみられる。192 は片口鉢で、高台径は 15.4cm である。193 は北部系陶器の山茶碗の底部で、外面底部に墨書がみられる。194・195 は古瀬戸陶器で、194 は口縁部の内・外面に鉄釉がかかる鉄釉小皿、195 が灰釉壺か。196・197 は外面に鎬蓮弁文のある青磁碗、198 は土師器の小皿で、内面と破面に朱らしきものが付着している。199・200 が丸みのある土師器の皿でナデ調整のもの、201・202 が羽釜形鍋で外面が煤けている。203 ～ 206 は近世後期のもので、203・204 が磁器で、203 は内・外面に染付けのある筒形碗、204 は白磁碗、205 は内・外面に灰釉がかかる碗で、削り出し高台。206 は灰釉により内面に菊花文を摺り付けた皿で、断面方形状の高台を削り出す。

（３）09Ab 区包含層出土の土器・陶磁器（図 32 ～図 34-207 ～ 283）

古代から近世のものまであり、古代のものも一定量あるが、中世のものが主体を占める。207 ～ 218 が須恵器で、207 ～ 211 が高台付きの杯身である。212・213 は高台のない杯身、214 は高杯の脚部、215・216 は瓶（壺）の口縁部と底部、217 はタタキ調整のある甕の体部片で、内面に墨痕がみられる。218 は口縁部径 33.6cm をはかる甕。219・220 は緑釉陶器で 220 は外にややひらく高台が付く杯身。221 ～ 224 は灰釉陶器の碗で、221 は断面内湾状の高台、223 は断面三角形状の高台、224 は断面丸く低い内湾状高台が付く、222 は内・外面に灰釉が施されている。225 ～ 227 は古代の土師器で、225 が製塩土器の口縁部、226 が高杯の脚部、227 が甑の口縁部と思われる。228 ～ 233 は中世の土師器で、228 ～ 231 がナ

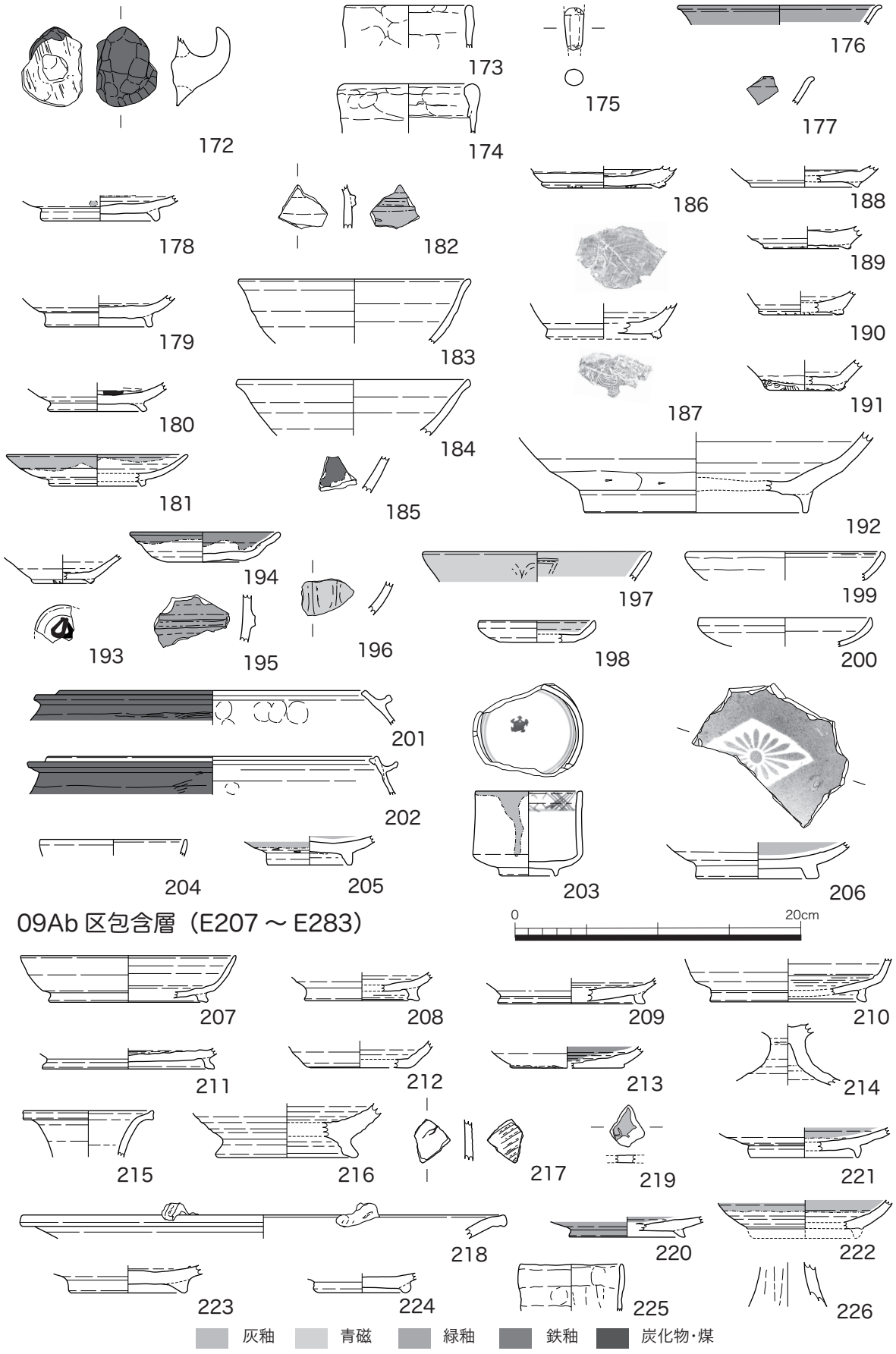


図 32　09Aa 区包含層出土土器・陶磁器２、09Ab 区包含層出土土器・陶磁器１（1/4）

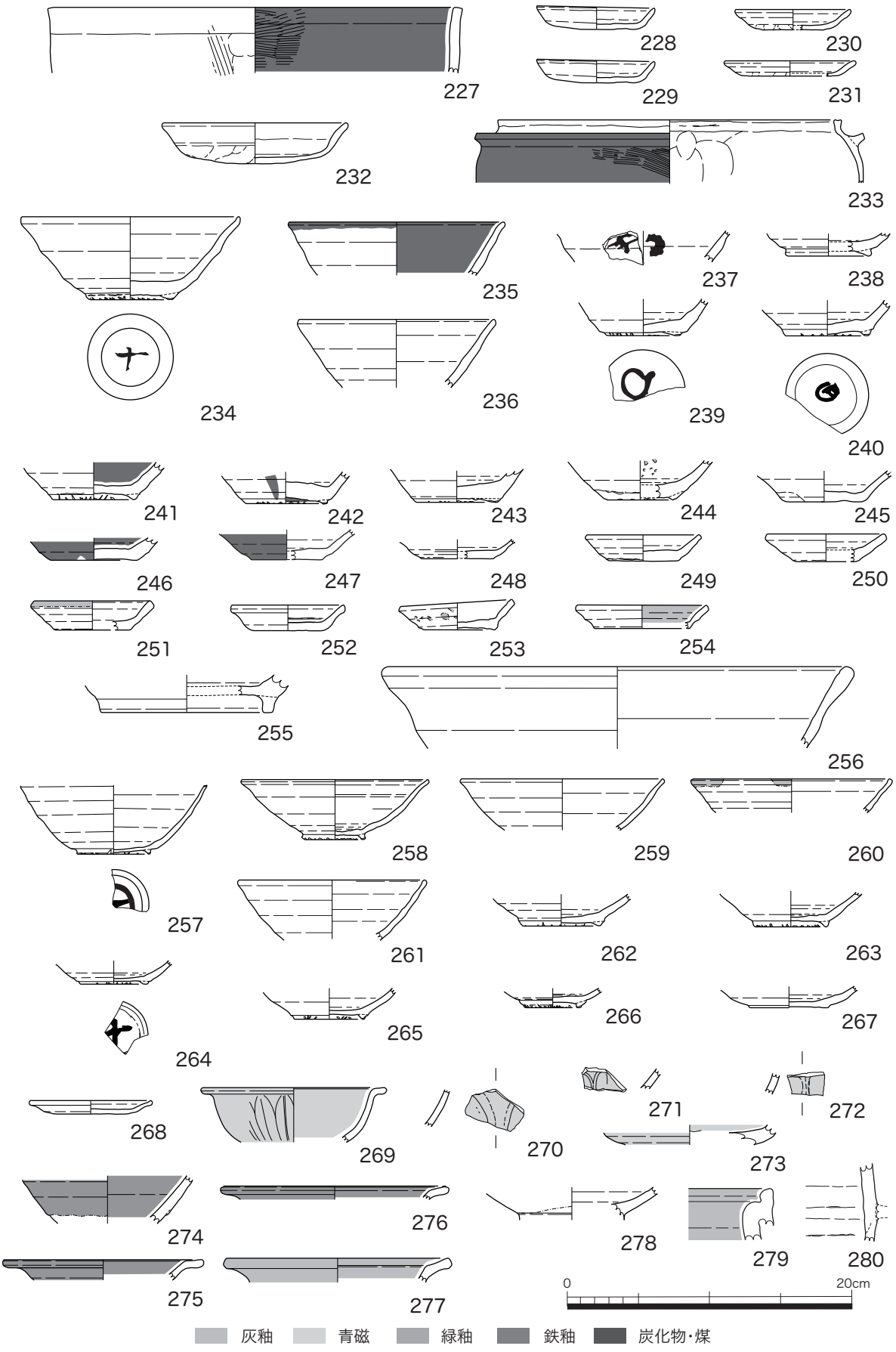


図 33　09Ab 区包含層出土土器・陶磁器２（1/4）

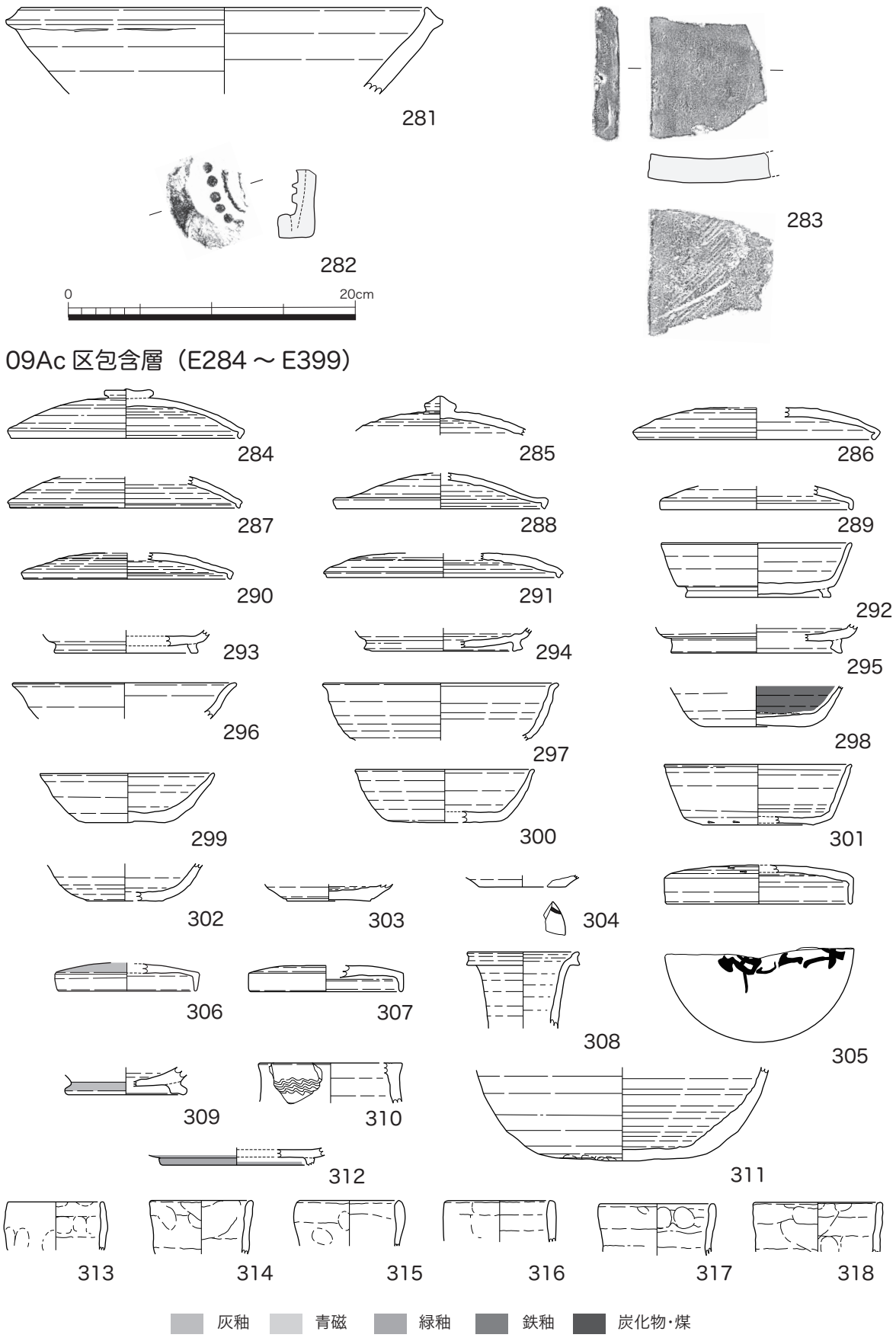


図 34　09Ab 区包含層出土土器・陶磁器 3、09Ac 区包含層出土土器・陶磁器 1 （1/4）

デ調整で、口縁部がやや外反する小皿、232 は口縁部径 13.4cm をはかる口縁部がやや外反する皿で、底部付近に斜め上がりの捻り状のナデ痕がみられ、口縁部をヨコナデする。233 は羽釜形鍋で、丸みをもつ体部の外面に煤が付着している。234 ～ 256 は南部系陶器で、234 ～ 247 は山茶碗で、234・238 ～ 244 は高台が付くもの、244 ～ 247 は高台が付かないものである。234 には外面底部に「十」の墨書がみられ、237 の体部の内･外面、239・240 の外面底部に「○」状の墨書がみられる。また 235 の内面と外面口縁部、241 の内面、242 の外面の一部、246 の内・外面、247 の外面に煤が付着している。248 ～ 254 は小皿で 251・254 に自然釉の付着がみられる。255 が片口鉢の底部、256 が片口鉢の口縁部である。257 ～ 268 は北部系陶器で、257 ～ 267 は山茶碗で、257・258・262 ～ 266 は高台があるもの、267 は高台がないものである。257・264 の外面底部には墨書があり、264 の墨書は「十」か。268 は器高が低い扁平な小皿である。269 ～ 273 は青磁の碗で、269 は口縁部がほぼ水平に外反して折れるもので、269 ～ 272 は外面に鎬蓮弁文をもつ。274 ～ 277 は古瀬戸陶器で、274 は天目茶碗の体部片、275・276 は口縁部が折れて水平に外反する鉄釉折縁皿、277 は口縁部が外反して折れる灰釉折縁深皿となる。278 は白磁の碗、279 は常滑産の甕の口縁部で、口縁端部を上下に拡張するもの、280 は土師器の羽釜形鍋か。281 は常滑産の鉢、282・283 は中世の瓦。282 は軒丸瓦で外縁周の約４分の１が残存する。瓦当文様は、巴文の周囲に連珠文が廻る。連珠は６個分を認め、珠文どうしは笵傷が発生しており繋がったようになっている。巴文の形状はよくわからない。外縁幅は 1.6cm あってやや重厚な印象がある。側縁や裏面はナデ。なお瓦当面全面に離れ砂が付着しており、笵詰め時に用いたと考えられる。笵詰め方法は、外縁を先行し、その後２回に分けて全体を詰める。丸瓦部は不明でありそれとの接合方法も不明である。色調は黒褐色系。焼成は硬質で軽く燻しがかかっている。283 は平瓦で成形台一枚作りによる。厚さは 1.7cm で凹面は全体にナデ消しであるが、粘土板切り出し時の糸切痕と細かい布目痕が若干みえる。凸面は側縁付近が縦方向ナデ、全体に離れ砂が付着する。平行タタキのような痕もあるが糸切痕の可能性もある。側縁はヘラ切り後ナデ。色調は黄褐色系。焼成は硬質で、燻しはかかっていない。

（４）09Ac 区包含層出土の土器・陶磁器（図 34 ～図 36-284 ～ 399）

古代から近世までのものがあり、古代のものが主体を占める。284 ～ 311 は須恵器で、284 ～ 291 は杯蓋で、284 には扁平なつまみ、285 には径の比較的小さい厚みのあるつまみが付く。292 ～ 295 は高台付杯身で、296 は椀の口縁部に類似するが、高杯の可能性があるもの、298 ～ 304 は高台のない杯身で、297 のように椀に近いものもある。305 ～ 307 は壺蓋で、305 の外面天井部に墨書がみられる。308・309 は瓶で、308 は頸が長い形態のものである。310 は円形の硯の可能性があるもので、側面と思われる面に波状文があり、天井部は平滑である。311 は体部が丸みを帯びる鉢。312 は緑釉陶器の高台付杯身。313 ～ 343 は古代の土師器である。313 ～ 327 は製塩土器で、口縁部径が 6.5cm ～ 9.6cm をはかるものがある、調整はナデ調整や指押さえなどである。328 は土師器の杯身で、当遺跡では出土数が少ない。329 ～ 337・341 は口縁部が外反しておわる甕で、329 が口縁端部をややつまみ上げるもので、330 ～ 334 は端部を丸くするものである。335 ～ 337 は甕の体部から底部のもので、外面の調整は、ハケ調整を主体とする。338 は体部から口縁部が大きく広がっておわるもので、甕か甑の可能性のあるもの、339 は甑の把手部分、340 は口縁部から体部にあまりすぼまらずにうつる形態で、甑の可能性がある、口縁端部をややつまみ上げる特徴がある。342・343 は清郷型鍋で、口縁部が水平に外反して肥厚する。344 ～ 363 は灰釉陶器で、344 が瓶、345 ～ 360 が碗、361 ～ 363 が皿である。344 は瓶の口縁部で、口縁端部を上下にひろげており、内・外面に灰釉がみられる。345 ～ 346 は碗で、345・346・360 は灰釉が内面と外面口縁部付近にみられる。360 は

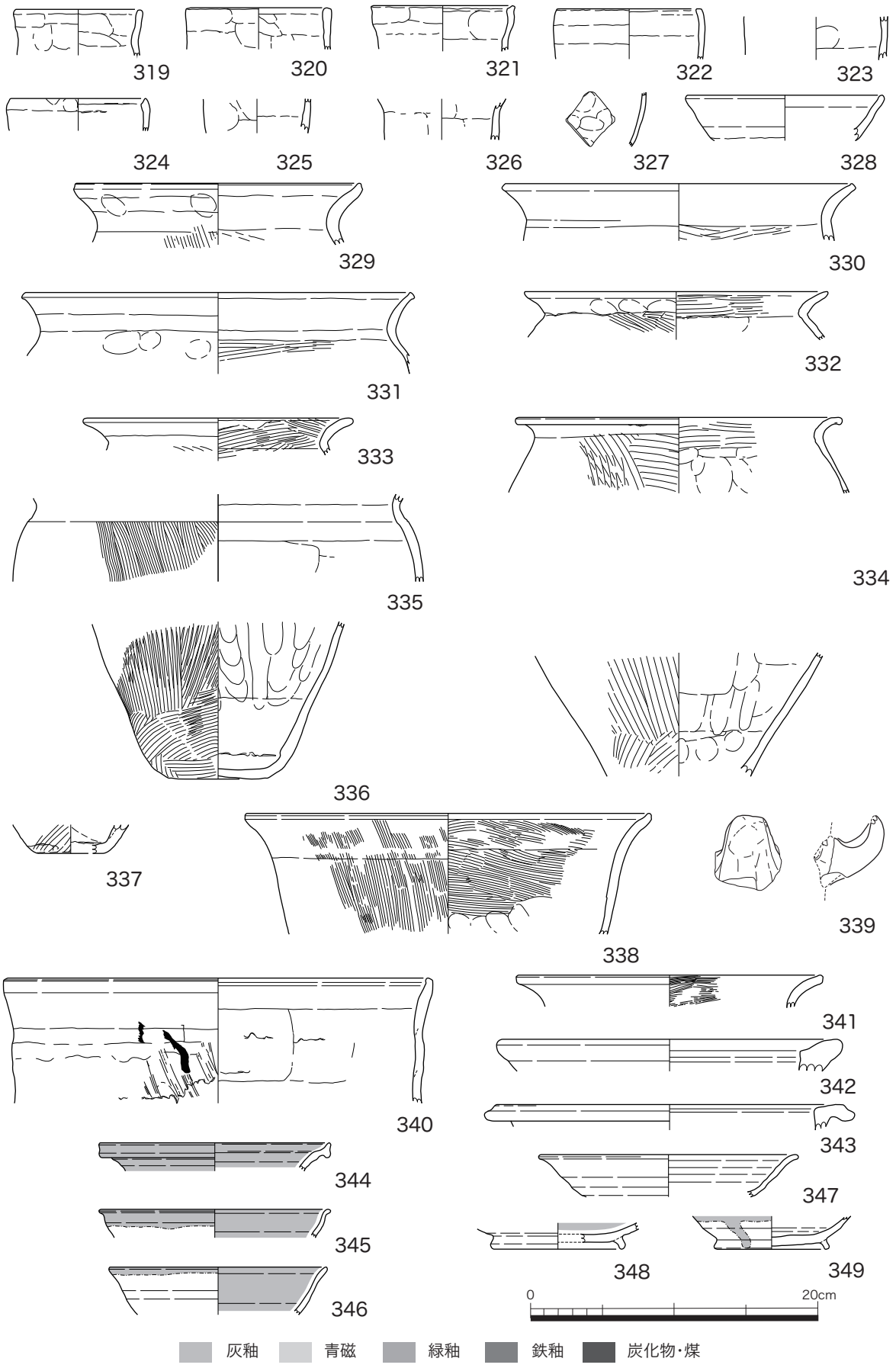


図 35　09Ac 区包含層出土土器・陶磁器 2（1/4）

小碗に近いもので、断面内湾状高台が付く。碗に付く高台では、355・356 に断面方形状高台が付き、352 は外側にひらく高台が付く、その他は断面内湾状の高台である。353 の内面底部に墨書がみられる。361・362 は内・外面に灰釉が施される皿で、362 は断面内湾状の低い高台が付く。364 ～ 376 は南部系陶器で、364 ～ 373 が山茶碗、374 ～ 376 が小皿である。364 と 375 には内・外面に灰釉がみられ、364 は大振りな碗の形態で、高さ 1.0cm の高い高台が付くことから、古い形態の山茶碗と思われる。364 ～ 372 は高台が付くが、373 は高台がないものである。377 ～ 381 は北部系陶器の山茶碗で、377 ～ 380 には高台が付くが、381 は高台のないもの。378 の外面底部に「十」の墨書がみられ、380 の外面底部にも墨書がみられる。382 ～ 386 は中世の土師器で、382 ～ 384 が小皿、385・386 が伊勢型鍋である。小皿では 382 は比較的丸い立ち上がりをもつ形態で、383 の底部は 3.0cm と小さく、底部から大きく外反して口縁部にいたるもの、384 は器高が 1.1cm と扁平な形態のものである。387 ～ 389 は青磁の碗で、388 の底部は比較的厚みがある。390 は口縁端部が肥厚する玉縁口縁の白磁の碗で、口縁部径 16.6cm である。391 は古瀬戸陶器の灰釉碗で、内・外面に灰釉がみられる。392 ～ 399 は近世後期以後のものである。392 は近世～近代の軒桟瓦で、瓦当のみの破片である。文様は左巴文で連珠が推定で 12 個廻り、全体に明瞭かつ繊細な文様表出である。焼成は硬質で全体に燻しがかかっている。393・394 は近世後期にかかる天目茶碗、395 は白色釉の磁器碗、396・397 は白色釉の磁器の皿か碗、398・399 は内・外面に染付けがある磁器の碗で、内面底部の印は同図のものである。

（５）09Ad 区包含層出土の土器・陶磁器（図 37・図 38-400 ～ 454）

古代から近世後期以後のものまであるが、古代のものが多い。400 ～ 414 は須恵器で、400 が杯蓋、401 ～ 404 が高台付杯身、405 ～ 411 が高台のない杯身である。409 の杯身の外面に光沢がみられ、411 の杯身外面底部に線刻がみられる。412・413 は壺で、412 は口縁部が斜めにやや外反してのびる形である。414 は甕の底部で、底部径 20.0cm である。415 ～ 434 は土師器で、415 は内・外面に放射状の暗文のみられる杯蓋、416 は内面に放射状暗文、外面にヨコミガキ調整がみられる皿である。417 ～ 427 は製塩土器で、口縁部径 6.0cm ～ 9.0cm をはかるもので、420 の外面に墨痕がみられる。428 ～ 431 は外面にハケ調整を伴う甕で、口縁部が「く」の字状に外反するものである。432・433 は清郷型鍋で、433 は口縁部の肥厚が大きい。434 は体部から内傾する口縁部をもつもので、内面に煤が付着する、中世の風炉の可能性がある。435 ～ 439 は灰釉陶器で、435 ～ 438 は碗で、439 が皿である。435・436・438 は断面が三角形状高台や外側にひらく高台が付く碗で、437・439 は内湾する低い三角形高台が付く。440 ～ 450 は南部系陶器で、440 ～ 446 が高台の付く碗、447・449 が高台のない碗、450 は底部がやや突出する小皿である。444・447 は口縁部径がともに 13.4cm で、高台の有無を除けば、同形同大である。452 は中世の丸瓦で、厚さは 1.6cm。凸面はナデ消しを行い、凹面は布目痕を残す。色調は黒褐色系で、焼成はやや軟質で凹面のみ燻しがかかったのかやや黒っぽい。451・453・454 は近世後期のものと思われるもので、451 は外面に灰釉が施される磁器の壺、453 は産地不明の甕、454 は焙烙鍋と思われるものである。

（６）09A 区その他包含層出土の土器・陶磁器（図 38-455 ～ 465）

09A 区の調査中で、グリッドが判明しない資料から図化したものである。455 は須恵器の甕の底部で、底部径 10.8cm。456 は灰釉陶器の碗で、内・外面に灰釉を施すもので、高台は断面内湾状のものが付く。457・458 は土師器の製塩土器で、457 は外面の一部にハケ調整らしき痕跡がみられる。459 は土師器の清郷型鍋で、口縁部が外側に折れ、肥厚するもの。460 は南部系陶器の高台のない碗で、外面底部に墨書がみられる。461 は南部系陶器の小皿で、口縁部径 7.8cm である。462 ～ 465 は北部系陶器の碗で、462・463 が

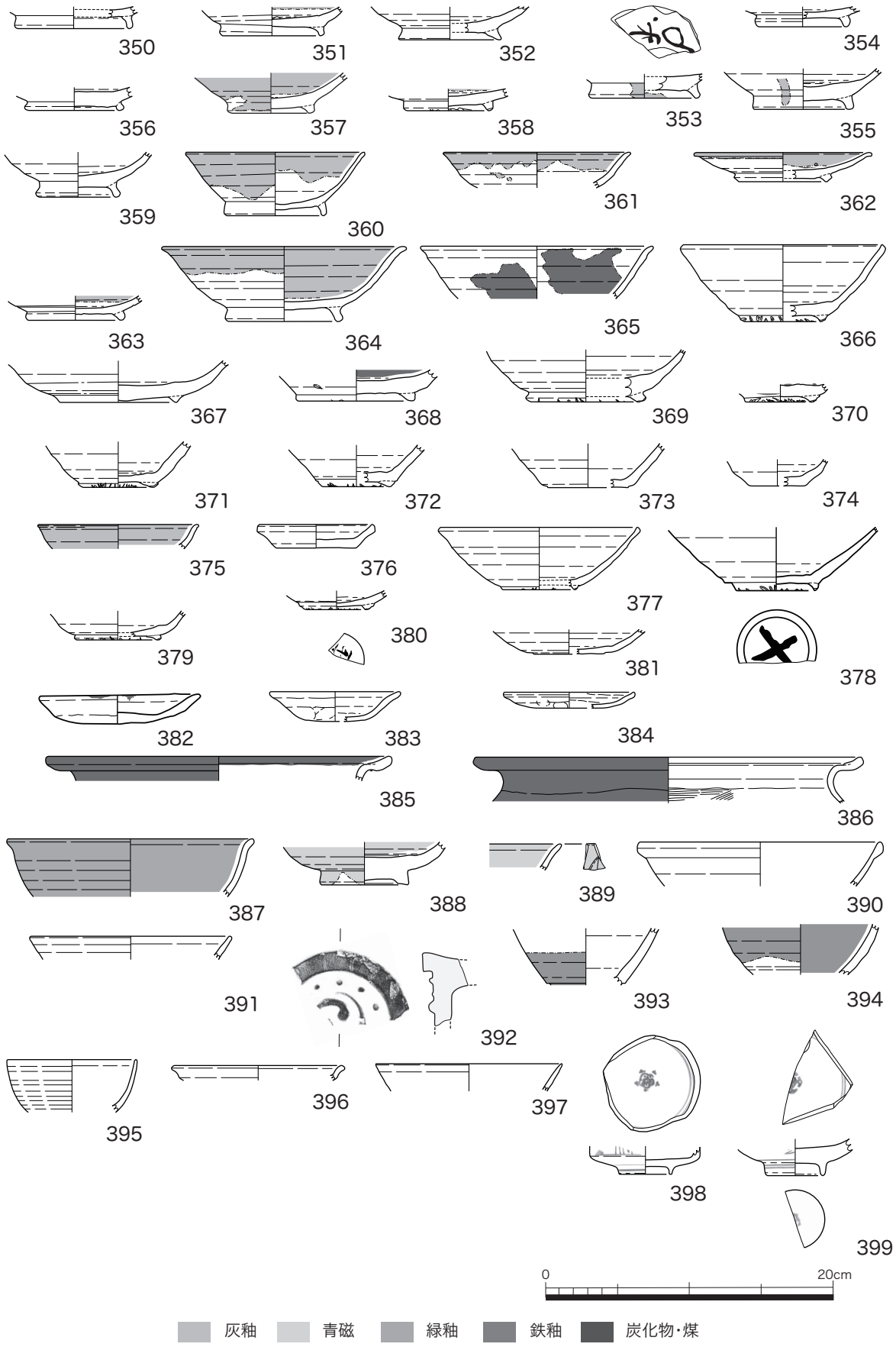


図 36　09Ac 区包含層出土土器・陶磁器 3（1/4）

09Ad 区包含層（E400 ～ E454）

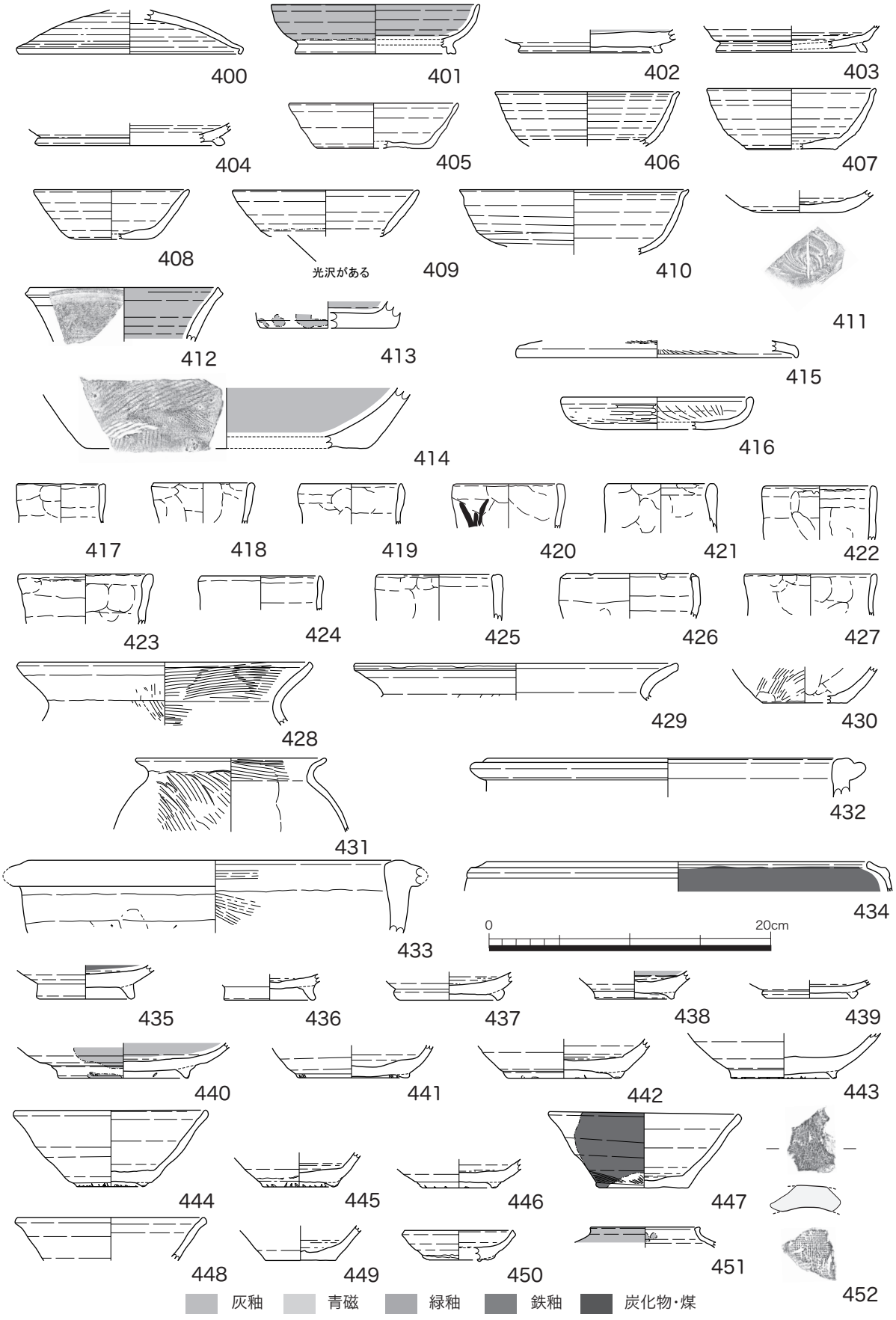


図 37　09Ad 区包含層出土土器・陶磁器１（1/4）

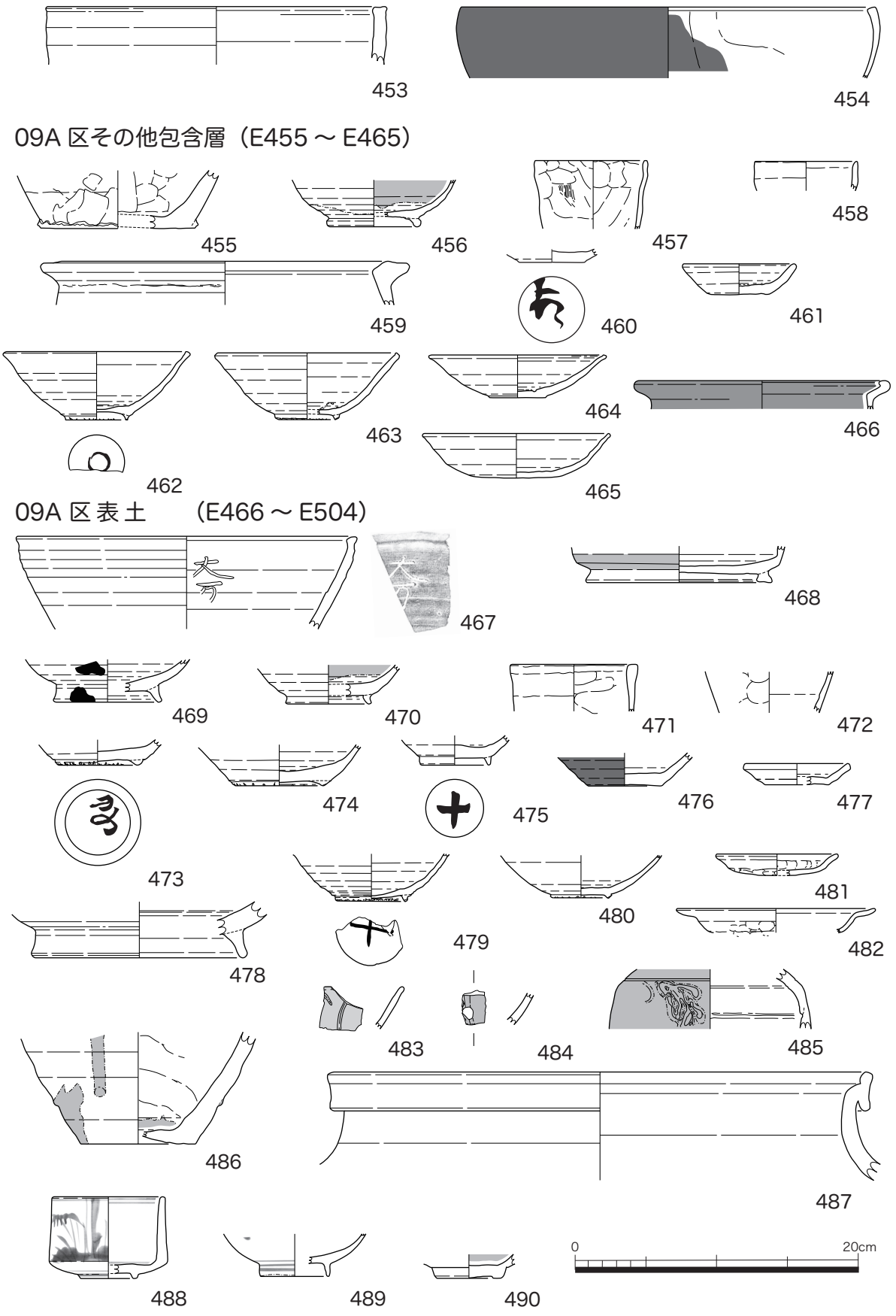


図 38　09Ad 区包含層出土土器・陶磁器 2、09A 区その他包含層・表土出土土器・陶磁器 1（1/4）

高台の付くもの、464・465 が高台の付かない器高の低いものである。462 は外面底部に墨書「○」がある。466 は近世後期の受口口縁をもつ甕で、内・外面に鉄釉を施す。

（７）09A 区表土出土の土器・陶磁器（図 38-466 ～ 490・図 39-491 ～ 504）

09A 区の表土はぎの段階でみつかったものから図化したものである。467・468 は須恵器で、467 は鉢で、内面に「大万」の刻書がみられ、468 は高台付杯身である。469・470 は灰釉陶器の碗で、断面外側にひらく高台が付く、469 の外面に墨痕がみられる。471・472 は土師器の製塩土器で、471 は口縁部径が 8.8cm である。473 ～ 478 は南部系陶器で、473 ～ 475 が高台のある碗、476 が高台のない碗、477 が小皿、478 が片口鉢である。墨書が 473 の外面底部と 475 の外面底部に「十」の墨書がある。479・480 は北部系陶器の高台の付く碗で、479 の外面底部に「十」の墨書がある。481・482 は中世の土師器で、481 は口縁部が比較的強く外反する小皿で、482 が丸みのある体部から口縁部が外側に屈曲してのびる皿で、２点ともナデ調整のものである。484・484 は青磁の碗で、外面に鎬蓮弁文がある。485・486 は古瀬戸陶器の灰釉が施される瓶子で、485 には外面肩部に貼付けの文様がみられる。487 は常滑産の甕で、口縁部径 37.4cm をはかる大型のものである。488 ～ 504 は近世後期以後のもので、488 ～ 494 が磁器、495 ～ 499 が施釉陶器、500 が土師器、501 ～ 504 が瓦である。磁器は内・外面に染付けの絵が描かれているもので、488 が筒型に口縁部が立ち上がる碗、489・490 が丸みを帯びた体部をもつ碗、491 が小さい断面三角形の高台を削り出す皿、492 ～ 494 が幅広の高台を削り出すもので、492・494 が皿、493 は口縁部が屈曲して外側にひらく鉢である。施釉陶器では 495 が内･外面に鉄釉を施し、外面に白色釉の文様を描く、灰落としに転用したと思われる口縁端部の欠損がみられる。496 は灰釉を内・外面に施す鉢で、497・498 が鉄釉を施す擂鉢、499 が色調がうぐいす色の施釉を施した筒型の火入れである。497 は口縁部径 30.7cm、498 の体部には擂り目が放射状に施されている。500 は土師器の焙烙鍋で、口縁部径 24.4cm である。501 ～ 504 は軒桟瓦の瓦当部分で、焼成は硬質で全体に燻しがかかっている。501 が巴文、502 ～ 504 が菊花文のものである。

（８）09Ba 区出土の陶器（図 39-505・506）

505･506 は近世後期以後の陶器で、505 は内･外面に鉄釉を施し、口縁部付近を灰釉の重ね掛けがされている筒型の碗、506 は天目茶碗の形態のもので、内・外面に鉄釉を施し、口縁部付近に灰釉を重ね掛けするものである。

（９）09Bb 区 004SD 貝層３出土の陶器（図 40-507 ～ 509）

507 ～ 509 は南部系陶器の山茶碗で、507 が口縁部径 14.0cm、508 の高台部径が 6.8cm、509 の高台部径が 8.4cm である。12 世紀後半頃のものと思われる。

（10）09Bc 区 002SK 貝層２出土の陶器（図 40-510）

510 は内・外面に灰釉が施された灰釉陶器の段皿で、断面比較的高い内湾状高台が付くものである。

（11）09Ca 区出土の陶器（図 40-511・512）

511 は灰釉陶器の瓶（壺）で、外面に灰釉が垂れてみられる、512 は常滑産甕で、底部径 19.0cm をはかる。

（12）09Cb 区包含層出土の陶器（図 40-513 ～ 515）

513 は須恵器の高台付杯身、514 は緑釉陶器の碗、515 は近世後期の下半部の丸い陶器碗で、内･外面に鉄釉と灰釉の重ね掛けがみられる。

（13）09Cc 区包含層など出土の陶器（図 40-516・517）

516 は南部系陶器の小碗で、断面三角形状の高台が付く、517 は南部系陶器の山茶碗で口縁部径 12.4cm である。

（14）09Cd 区出土の陶器（図 40-518・519）

518 は須恵器の高台のない杯身で、519 は南部系陶器の山茶碗で、内面に煤の付着がみられる。

（15）09Ce 区包含層など出土の陶磁器（図 40-520 ～ 528・図 41-531 ～ 533）

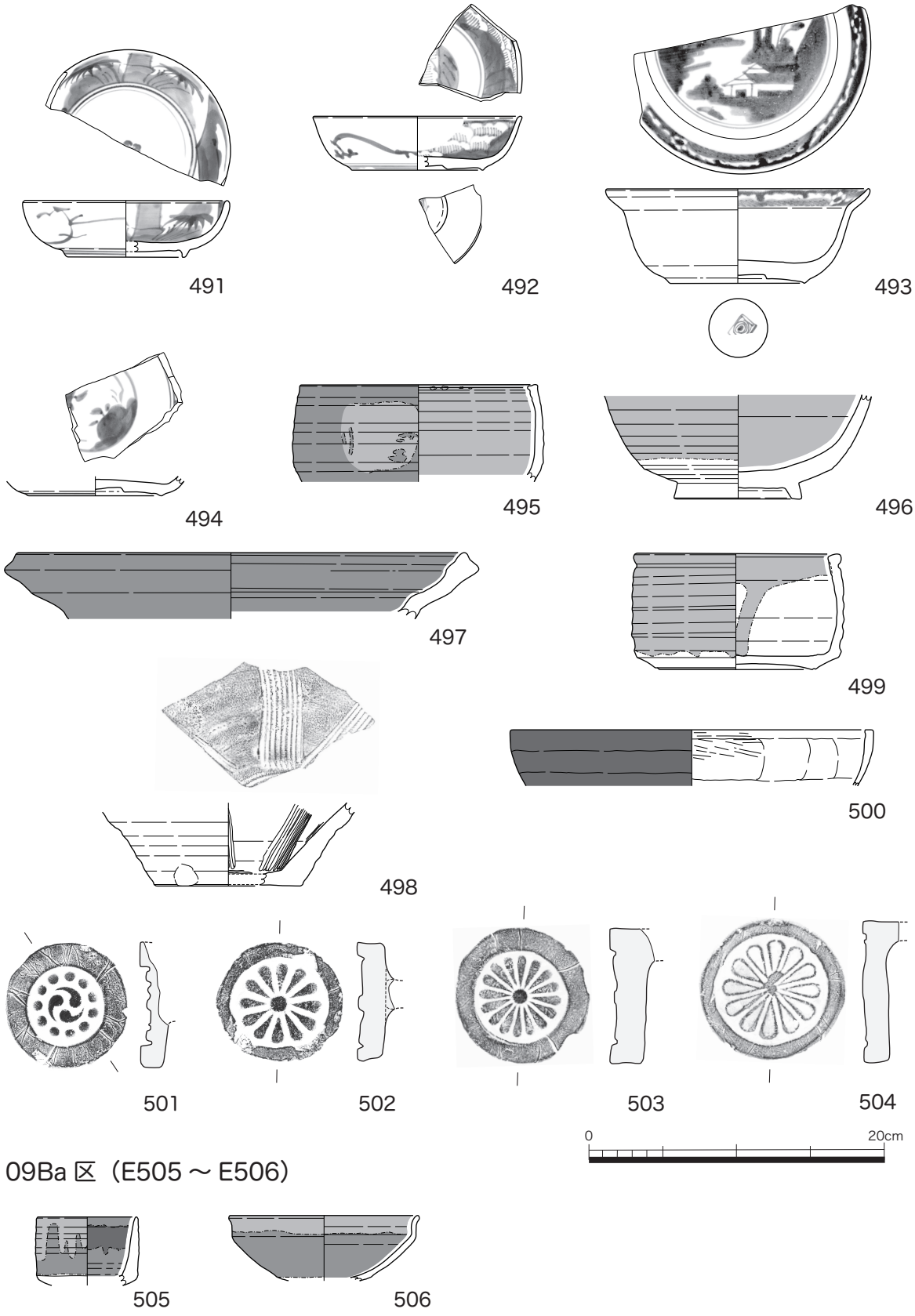
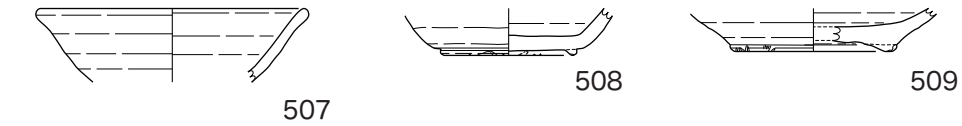


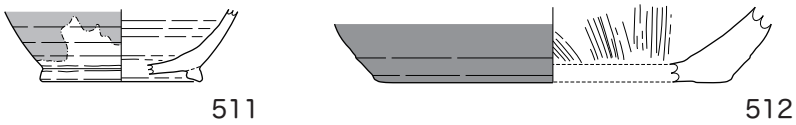
図 39　09A 区表土出土土器・陶磁器 2、09Ba 区出土土器・陶磁器（1/4）

09Bb 区 004SD 貝層 3（E507 ～ E509）

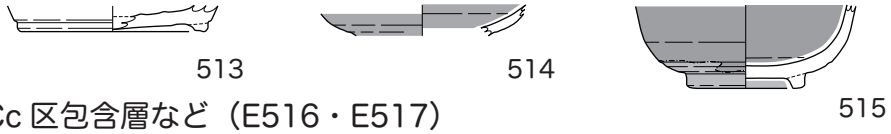


09Bc 区 002SK 貝層 2（E510）

09Ca 区（E511・E512）



09Cb 区包含層（E513 ～ E515）



09Cc 区包含層など（E516・E517）

09Cd 区（E518・E519）

09Ce 区包含層など（E520 ～ E533）

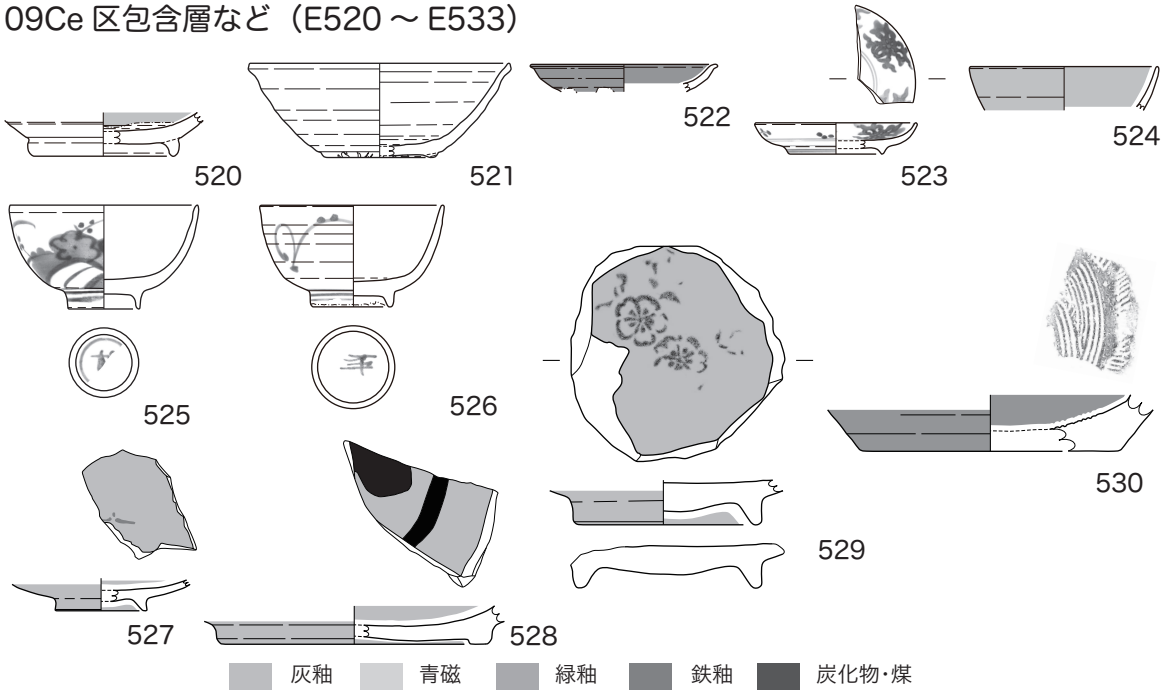


図 40　09Bb 区・09Bc 区・09Ca 区～ 09Ce 区出土土器・陶磁器（1/4）

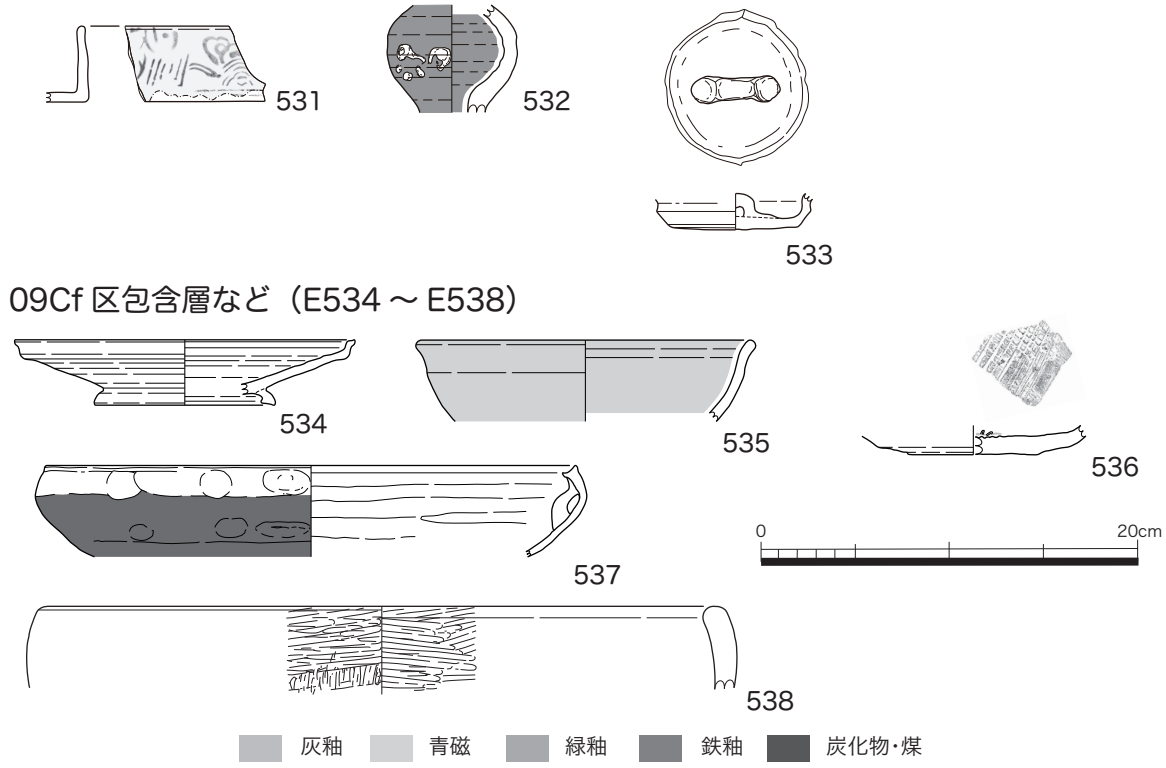


図 41　09Ce 区・09Cf 区出土土器・陶磁器（1/4）

平安時代から近世までのものがある。520 は灰釉陶器の碗で､断面比較的高い内湾状高台が付く。521 は南部系陶器の山茶碗で口縁部径 14.0cm のもの。522 ～ 533 は近世後期のもので、522 は内・外面に鉄釉を施す小皿、523 は内・外面に染付けのある磁器の小皿、524 は内・外面に灰釉に近い施釉がみられる陶器の碗、525・526 は外面に染付けの樹木などの絵のある磁器碗、527 は内面底部に染付けのある陶器の灰釉皿、528 は陶器の灰釉大皿で、内面底部に黒色釉による絵か文字が描かれている。529 は陶器の灰釉碗で、内面底部にコバルト色釉の花文がみられる。530 は内・外面に鉄釉の施された陶器の鉢、532 は陶器の瓶盥で、志野釉に近い施釉に褐色釉の施文がみられる。532 は陶器の茶瓶で、外面鉄釉に白色の浮き彫り文様がみられる。533 は陶器の蓋で、外面天井部に把手が付けられている。

(16) 09Cf 区包含層など出土の土器・陶磁器（図 41-534 ～ 538）

古代から近世のものまである。534 は須恵器の盤で、比較的しっかりした高台が付く。535 は青磁の碗で、口縁部が横ナデにより、やや稜をもって外反する。536 は古瀬戸陶器の灰釉卸皿で、内面に線刻の卸目がみられる。537 は近世後期の焙烙鍋で、内耳がある。538 は瓦質土器の火舎と思われるもので､内外面に横ミガキ調整がみられる。

2．土製品

（1）土錘（図 42-539 ～ 562）

ナデ調整のみで成形され、中程がややふくらむ筒状形態の土製品で、中世後半期の 09A 区 005SK や 056SK、018SE、020SK の遺構から出土するものがあり、他の資料もこれらの遺構周辺の包含層から出土している。孔径から径 0.4cm ～ 0.6cm の 539 ～ 546、径 0.7cm ～ 0.8cm の 547 ～ 551、径が 1.0cm 以上の 552 ～ 562 に分けられる。興味深いことに、540 が出土した 09A 区 005SK とその周辺から出土した 540・543・548 などは孔径が細いタイプのものが多く、09A 区 018SE から出土した 553 ～ 556 とその周辺から出土したものは孔径が太いものが多い傾向がある。

（2）陶丸（図 43-563 ～ 568）

土錘（E539 ～ E562）

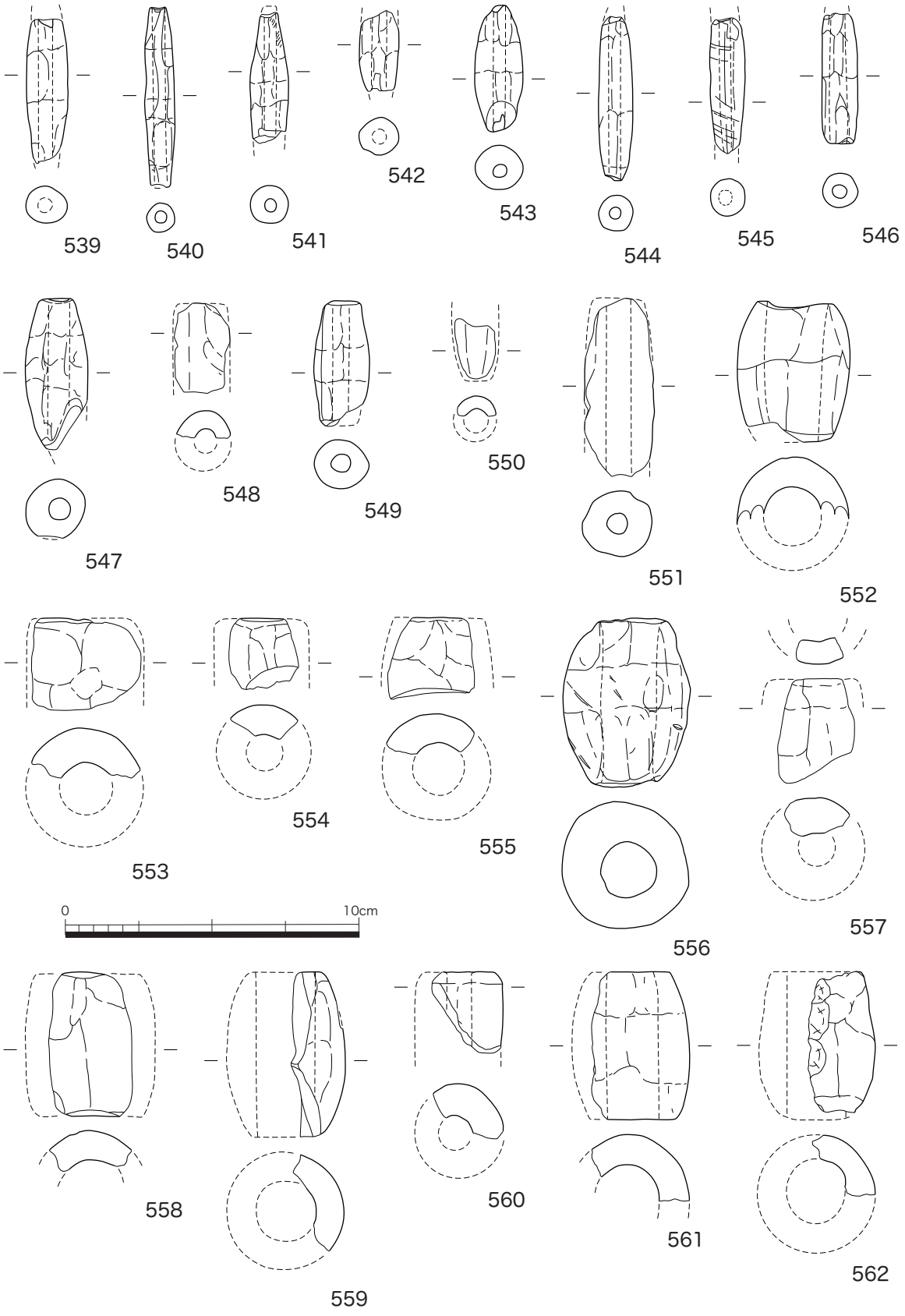


図 42　土錘（1/2）

陶丸（E563 ～ E568）

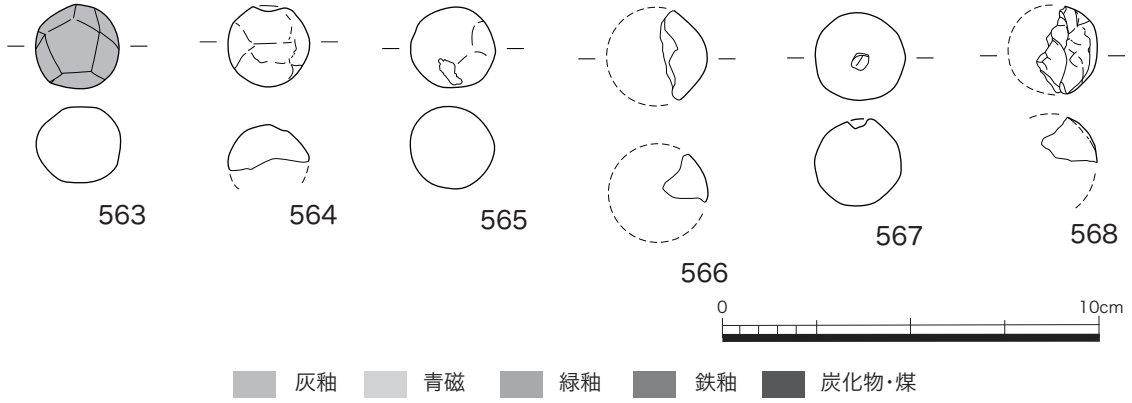


図 43　陶丸（1/2）

ナデ調整のみで作られた南部系陶器と思われる球形の土製品で、径 2.2cm ～ 2.7cm 程のものである。563 は自然釉がかかっている。

（3）加工円盤（図 44-569 ～ 590）

土師器、陶器と磁器を円形に加工したもので、主に中世から近代にかけてのものがある。円形に打撃して加工した破面を残すものが多いが、575・587 破面が少しあるいは部分的に研磨されているものと、579・589 のように破面が全体的に研磨されているものがある。586 が須恵器の甕の底部と思われるもの、576・590 が土師器の破片、575 が灰釉陶器の碗片と思われるもの、569 ～ 573・581 が南部系陶器の破片で、569 ～ 572 は山茶碗の底部付近の破片、585 が近代の磁器の碗片を利用したものである。その他は常滑産の甕片を利用したものが多いようである。大きさから径 1.7cm ～ 2.7cm の小型のもの 569 ～ 580、径 3.0cm ～ 4.3cm の中型のもの 581 ～ 588、径 6.0cm 前後の大型のもの 589・590 に分けられ、小型のものに中世前半期のものが多く、中型～大型のものは近世後期以後のものが多い傾向がある。

3．金属製品

（1）銅銭（図 45-M01 ～ M22）

銅銭は、09A 区 015SK と 015SK に隣接する地点において、22 点がまとまって出土しており、中世の墓への埋納に関連するものと考えられる。銅銭は径 2.4cm ～ 2.5cm 程で、文字が判読できるものは、嘉泰通寶が M1、元豊通寶が M04・M12・M13・M22、大観通寶が M07 ～ M09、開元通寶が M15・M18、熙寧元宝が M16・M17、乾元重寶が M21 である。

（2）鉄製品など（図 46-M23 ～ M46）

鉄製品で残存状態の良いものを 24 点図化した。M23・M24・M28 は断面の形状などから刀子と思われるもので、M23 は刃先が欠損している。M25 は板状の不明品、M26 扁平含鉄遺物、M27 は断面扁平な棒状含鉄遺物。M29 ～ M43 は釘と思われるもので、M43 には木材の痕跡が付着している。M40 と M41 はほぼ直角に曲がっている。M44 は断面台形状の扁平含鉄遺物、M45 も断面方形状の棒状含鉄遺物、M46 は断面円形に近い棒状含鉄遺物である。

（3）鍛冶関連資料・銅滴（図 47-M47 ～ M53）

M47 ～ M53 は鍛冶関連資料で、鍛冶工程が付近で行われたことを示すものである。M47 は鞴の羽口で、孔径 1.5cm である。M48 ～ M53 は鉄滓で、M48・M49 が 4 分の 1 分割椀型滓、M50・M52 はガラス質が軽い流動滓 B で、M50 が重さ 0.6g、M52 には石材が付着しており、羽口に近い位置で形成されたものと思われる。M51・M53 は椀型滓で、M51 は幅 2.5cm、厚み 2.0cm の細長い形状のもの、M53 は常滑産甕の体部片に付着しているもので、長径 14.8cm、短径 10.4cm、厚み 4.4cm をはかる大型のものである。M54 は銅滴で、長径 2.8cm、厚み 2.9cm のもの、鋳銅・銅細工の加工が付近で行われた可能性がある。

加工円盤（E569 ～ E590）

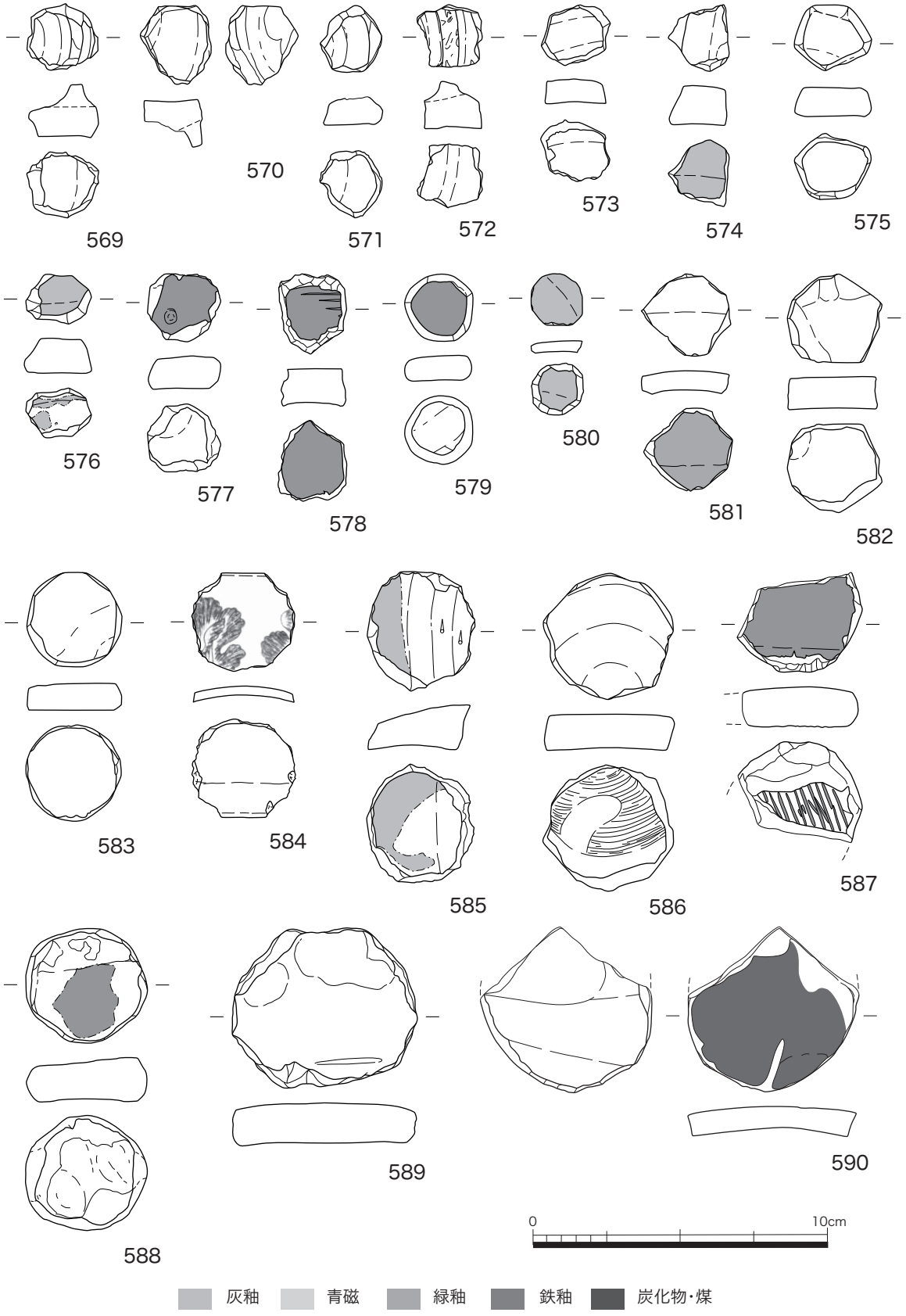


図 44　加工円盤（1/2）

銅銭（M01 ～ M22）

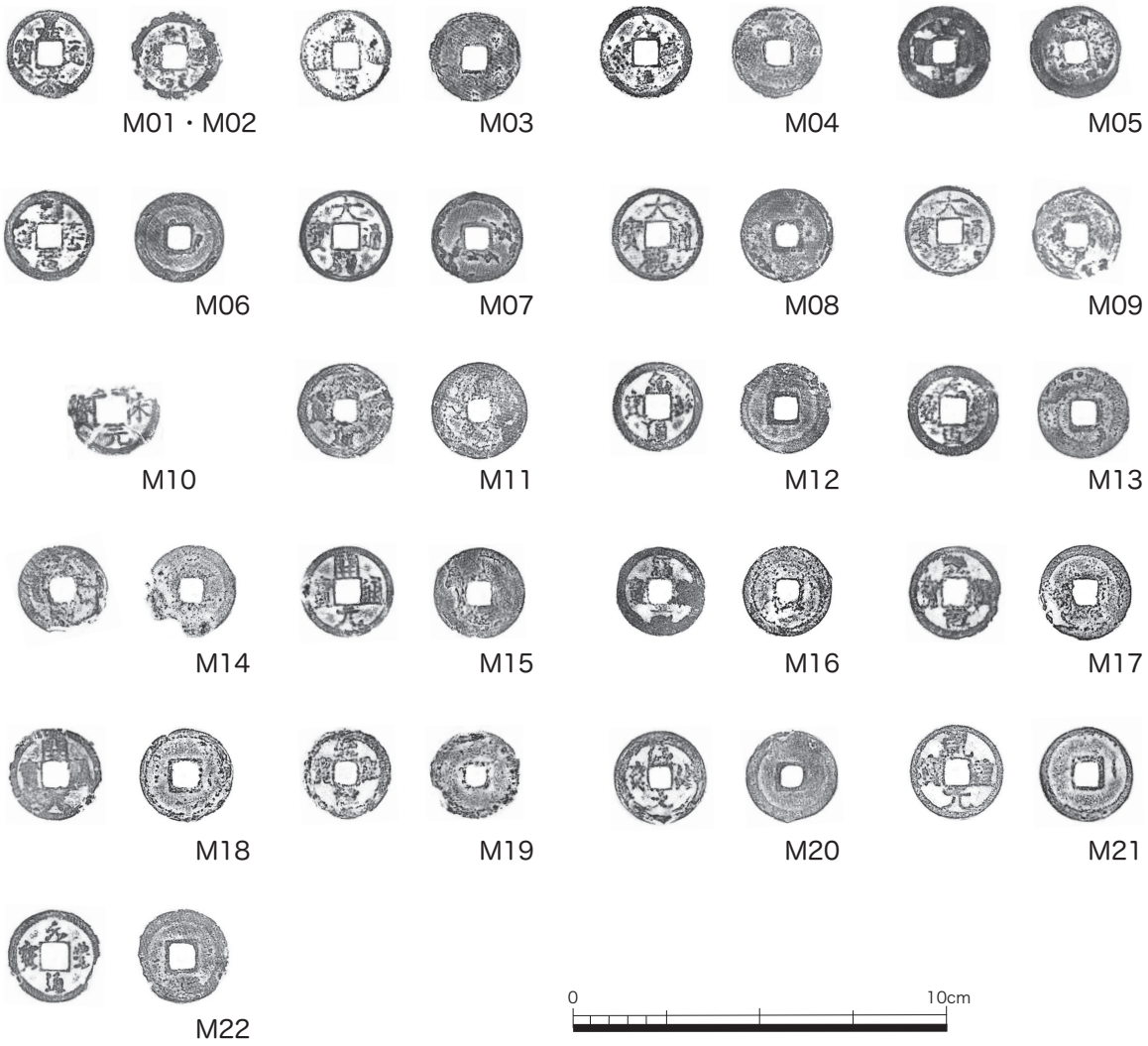


図 45　銅銭（1/2）

4．石製品（図 48-S01 ～ S15）

石製品には砥石 11 点、火打石 3 点、洗濯石 1 点がある。S01 ～ S11 は砥石で、S01 が泥岩の他は砂岩～凝灰岩を利用したもので、S08・S10 が典型的な撥形をしており、その他も破片になるまで使用されて研ぎ痕が残されている。S07・S10・S11 に煤の付着や被熱痕がみられる。S03 には研ぎ面に、機能は不明であるが、5 個の小穴がある。S12 ～ S14 は火打石と思われるチャート製の剥片で、S12 には使用痕らしき潰れがみられるが、S13・S14 は使用痕が不明瞭である。S15 は軽石のやや扁平な亜円礫で、洗濯のような機能を推定した。

5．木製品（図 49-W01 ～ W05）

木製品として出土しているものは、09A 区 018SE の中で検出された井戸材で、板材 15 点程と角材 1 点を採集することができた。樹種は 10 点分析し、板材がコウヤマキ 7 点、ヒノキ 2 点、角材 1 点がコウヤマキに樹種同定されている。W01 はコウヤマキ製の柾目の板材で、幅 10.0cm、厚み 4.0cm であった。W02・W04・W05 はコウヤマキ製の板目の板材で、W02・W04・W05 は幅 6.0cm ～ 8.8cm、厚み 1.0cm ～ 1.4cm のものである。M03 はコウヤマキ製の角材で、幅 4.6cm、厚み 4.0cm で、井戸材を支えている支柱であった可能性がある。

鉄製品など（M23 ～ M46）

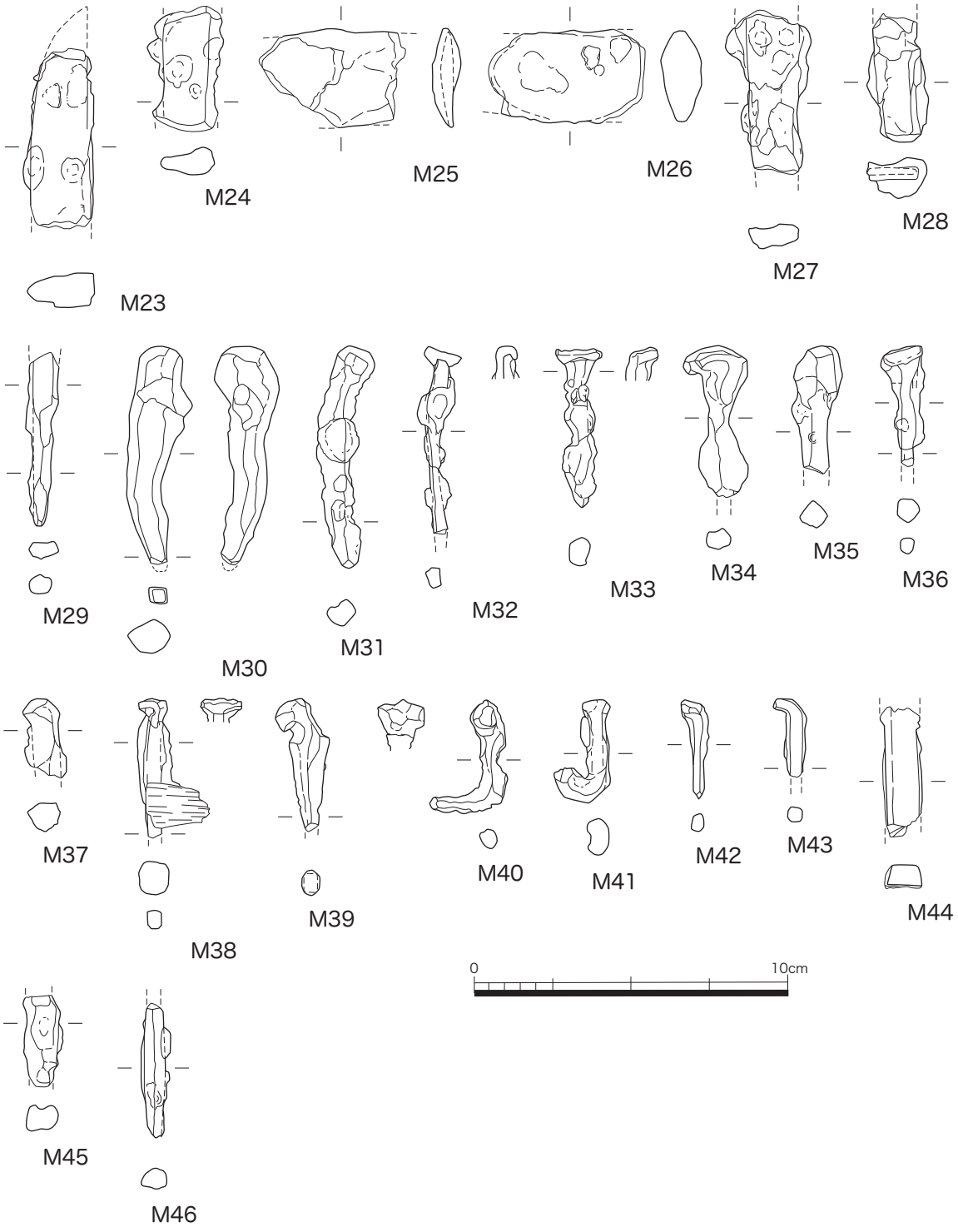


図 46　鉄製品など（1/2）

鍛冶関連資料・銅滴（M47 ～ M54）

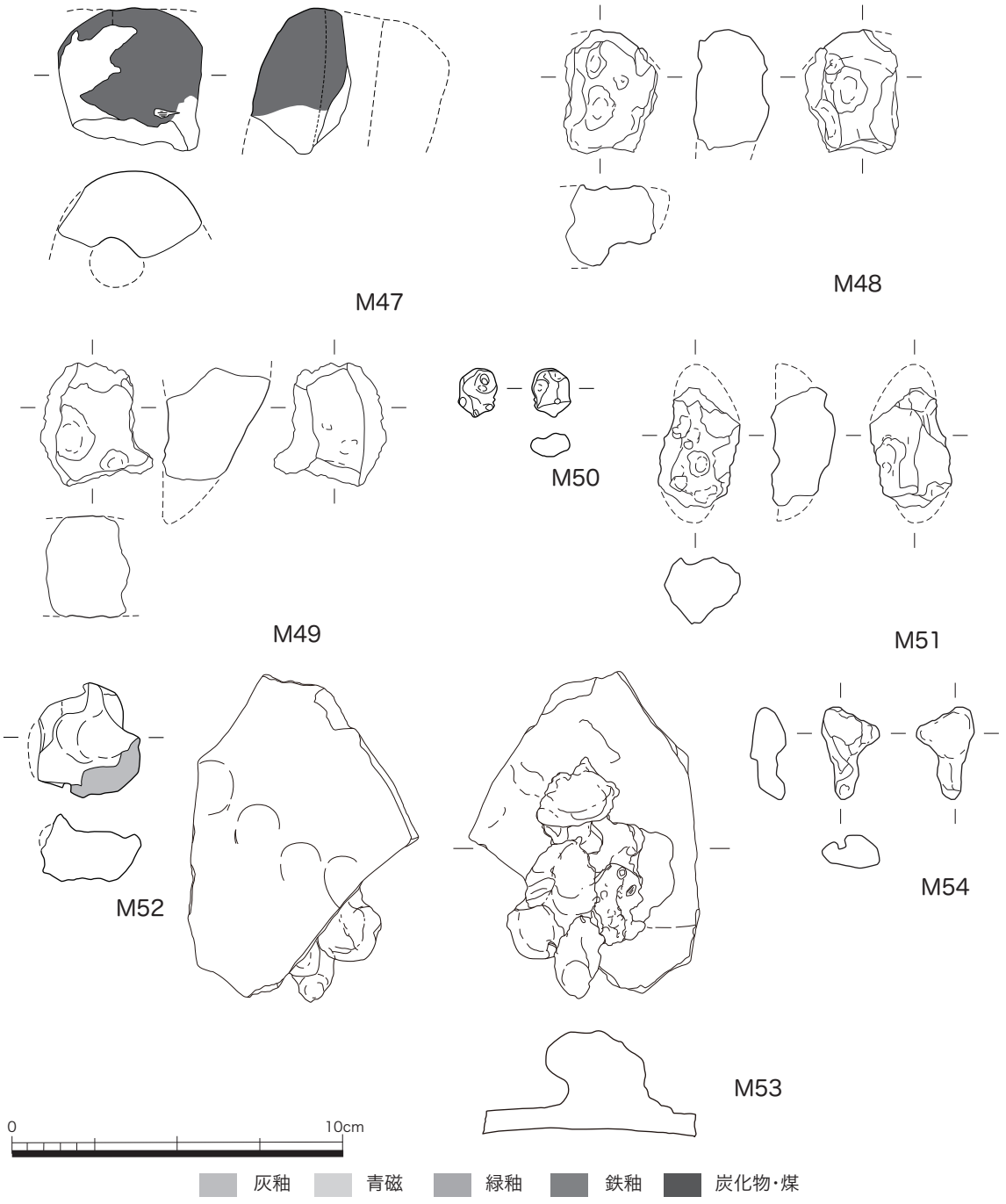


図 47　鍛冶関連資料・銅滴（1/2）

参考文献

斉藤孝正 1995『須恵器集成図録』第 3 巻、東日本編 I、雄山閣

赤羽一郎・中野晴久 1995「中世常滑焼の生産地編年」『常滑焼と中世社会』小学館

鈴木正貴 1996「東海地方の内耳鍋･羽付鍋･釜」『鍋と甕そのデザイン』第 4 回東海考古学フォーラム

金子健一 1996「尾張・三河地方のホウロク」『鍋と甕そのデザイン』第 4 回東海考古学フォーラム

東海土器研究会編 2000『須恵器生産の出現から消滅　猿投窯・湖西窯編年の再構築』第 1 回東海土器研究会

藤澤良祐 2007「編年表」『愛知県史　別編　窯業 2　中世・近世　瀬戸系』愛知県

石製品（S01 ～ S15）

図 48　石製品（S01 ～ S09・S12 ～ S15 は 1/2、S10・S11 は 1/4）

木製品（W01 ～ W05）

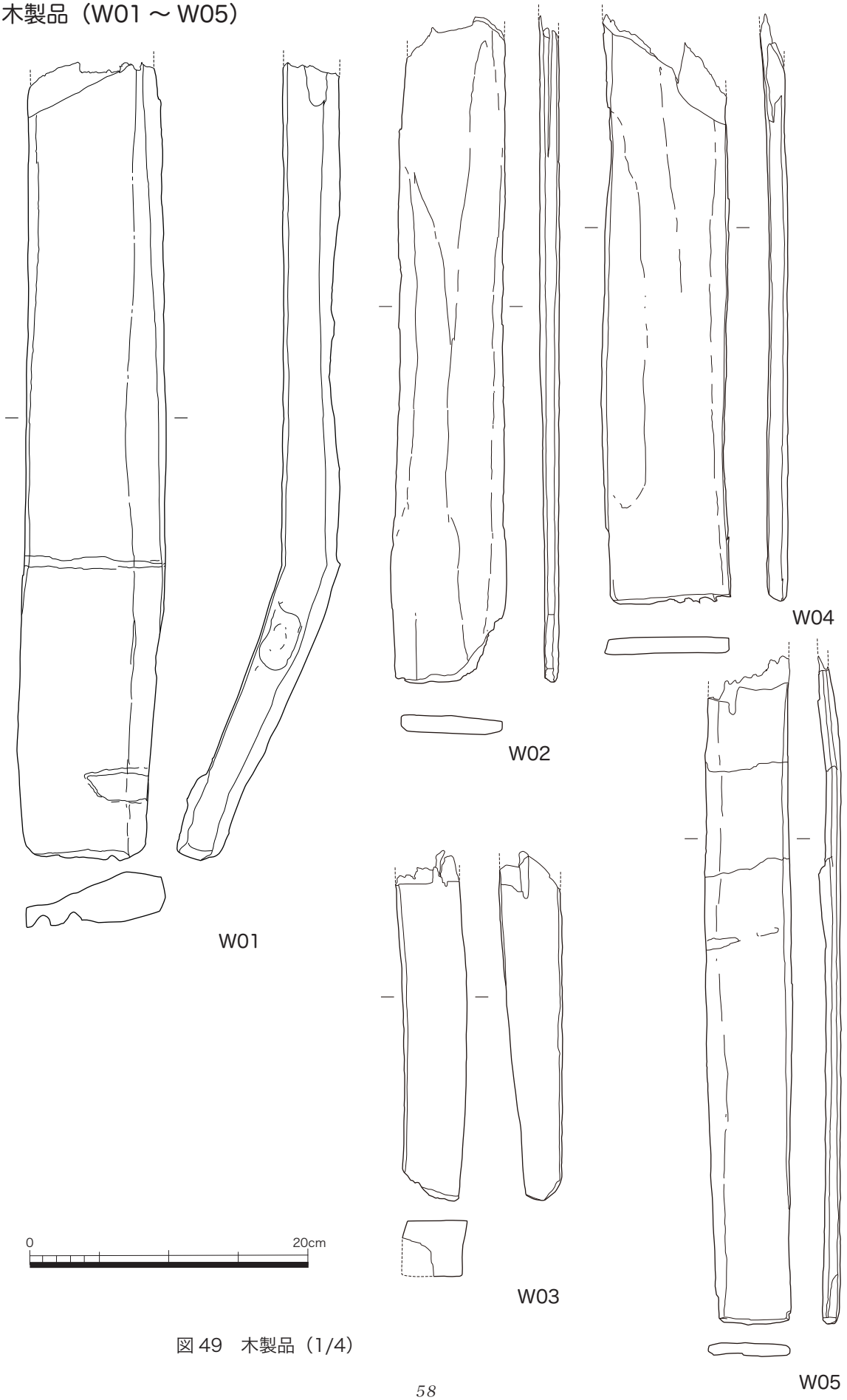


図 49　木製品（1/4）

第４章　自然科学分析

A. 日置本郷Ｂ遺跡の動物遺体同定

中村　賢太郎（パレオ・ラボ）

1. はじめに

日置本郷Ｂ遺跡は愛西市日置町本郷に所在し、木曽川の支流によって形成された砂堆微高地上に立地する。日置本郷Ｂ遺跡の発掘調査では奈良、平安、鎌倉、室町時代などの遺構や遺物が検出されている。ここでは、Ａ区の方形土坑とその周辺から出土した骨片およびＢ区とＣ区の貝層出土の動物遺体について報告する。

小型の脊椎動物の同定にあたっては、早稲田大学の樋泉岳二先生にご教示をいただいた。

2. 試料と方法

Ａ区の方形土坑 005SK（グリッド 7D7m）と 005SK 周辺（グリッド 7D6m）から出土した骨片は現場で採取された。試料数は、005SK では Dot.001 ～ 005、007 ～ 010 の 9 点、005SK 周辺では 1 点、計 10 点である。

貝層の試料は Ca 区 1 点、Bc 区 2 点、Bb 区 4 点、計 7 点である。No.1 は Ca 区の貝層④、No.2 は Bc 区の貝層①と 001SK、No.3 は Bc 区の貝層②(002SK)、No.4 は Bb 区の貝層③下位、No.5 は Bb 区の貝層③最下位、No.6 は Bb 区の貝層③上位、No.7 は Bb 区の貝層③下位から採取された。貝層の試料については、水洗選別を行い、篩により 1㎜以上の動物遺体を回収した。さらに 1mm 以上の動物遺体を篩により 1mm 以上 5mm 未満と 5mm 以上とに分離した。貝類のうち二枚貝は 5㎜以上で殻頂が残るもの、巻貝は 1㎜以上で殻軸が２巻以上残るものを同定と計数の対象とした。甲殻類は 5㎜以上、魚類、爬虫類、両生類、哺乳類は 1mm 以上の試料を同定と計数の対象とした。

同定と計数は肉眼および実体顕微鏡下で行った。

3. 結果

方形土坑 005SK と 005SK 周辺から出土した骨片は比較的大型の哺乳類と見られる。しかし、いずれも小片であり、部位と種が分かる破片は無かった。色調を見ると黄褐色や白色の破片があった。白色の破片は火を受けている可能性がある。

貝層の動物遺体は貝類が多くを占め、その他に甲殻類、爬虫類、両生類、魚類、哺乳類が少量見られた。貝類では、マガキ、ハマグリ、ヤマトシ

表２　貝類と甲殻類一覧

No.	地区	層位	試料量(kg)	マガキ		ハマグリ		ヤマトシジミ		オキシジミ		シオフキ		不明二枚貝	カワニナ	カワニナ幼貝？	オオタニシ	マイマイ類	微小巻貝	フジツボ類
				左	右	左	右	左	右	左	右	左	右	左右一括						
1	09Ca	貝層④	10.3			51	48	5	4					4					5	
2	09Bc	貝層①と001SK	9.7	＋		20	30	18	18		1	1		12			8		30	
3	09Bc	貝層②(002SK)	13.7	172	80	80	69	87	116					2					5	＋
4	09Bb	貝層③下位	14.7	210	227	34	21	74	57				2		1			4	26	＋
5	09Bb	貝層③最下位	14.7	136	63	25	34	13	13					1		1	1	1	3	＋
6	09Bb	貝層③上位	16.6	21	15	42	34	55	63	1				23		1	5		6	
7	09Bb	貝層③下位	18.1	138	156	20	33	100	83					3					13	＋

＋は破片あり、計数せず

4と7はマガキ稚貝の右殻各1点含む

表３　爬虫類、両生類、魚類、哺乳類一覧

No.	地区	層位	分類群	部位	左右	部分･状態	数量
3	09Bc	貝層②(002SK)	カエル類	椎骨	—	完存	1
			カエル類?	椎骨	—	ほぼ完存	1
			ニシン科	椎骨	—	ほぼ完存	3
			哺乳類(小型)	指骨	不明	完存	1
			ネズミ類	大腿骨	右	近位端	1
4	09Bb	貝層③下位	サバ科?	方骨	右	破片	1
			ネズミ類?	四肢骨	不明	骨幹	1
6	09Bb	貝層③上位	ヘビ類	椎骨	—	ほぼ完存	5
			カエル類	四肢骨	不明	骨幹	1
			ニシン科	椎骨	—	椎体	2
			ウナギ属	椎骨	—	完存	1
			コチ科	椎骨	—	破片	1
7	09Bb	貝層③下位	アジ科	椎骨	—	完存	1
			ネズミ類	大腿骨	右	近位端	1
			食肉目	末節骨	不明	破片	1

ジミが多く見られた。他にオキシジミ､シオフキ、カワニナ、オオタニシ、マイマイ類、陸産と思われる微小な巻貝が見られた。Bb 区と Bc 区の貝層（No.2 ～ 7）ではマガキ、ハマグリ、ヤマトシジミが多いが、Ca 区の貝層（No.1）ではハマグリが多い点で B 区と共通するが、マガキが無く、ヤマトシジミが少ないという点で異なっていた。なお、No.4 と 7 はマガキの稚貝の右殻を各 1 点含んでいた。甲殻類ではフジツボ類の破片が No.3 ～ 5、7 で見られた。貝層から出土した爬虫類、両生類、魚類、哺乳類は表２に示したとおりである。爬虫類ではヘビ類、両生類ではカエル類、魚類ではニシン科、アジ科、コチ科、サバ科？、ウナギ属、哺乳類ではネズミ類、食肉目が見られた。

4. 考察

Ca 区の貝層（No.1）では、内湾に生息するハマグリが多く、汽水域に生息するヤマトシジミが見られ、内湾から河口にかけての水域で貝類の採取が行われ食用にされたと考えられる。

Bc 区および Bb 区の貝層（No.2 ～ 7）では内湾に生息するマガキ、ハマグリ、汽水域に生息するヤマトシジミが多く、内湾から河口にかけての水域で貝類の採取が盛んに行われ食用にされたと考えられる。また、カワニナやオオタニシが見られることから淡水域での貝類の採取も行われたと考えられる。また、フジツボ類は No.3 ～ 5、7 に見られるが、これらの試料ではマガキも多いことから、フジツボ類はマガキに付着して持ち込まれたものである可能性が高い。

魚類では、海域に生息するニシン科、アジ科、コチ科、淡水域に生息するウナギ属が見られたことから、海域や淡水域で魚類が採取され食用にされたと考えられる。

ヘビ類、カエル類、ネズミ類についてはヒトにより利用されたかどうか不明である。食肉目はおそらくはヒトにより利用されたと考えられる。

A. 日置本郷 B 遺跡出土木製品の樹種同定

黒沼保子（パレオ・ラボ）

1. はじめに

日置本郷 B 遺跡は愛西市日置町本郷に所在し、木曽川の支流によって形成された砂堆微高地上に立地する。ここでは、鎌倉～室町時代の井戸材の樹種同定結果を報告する。

2. 試料と方法

試料は、調査区 09A の 018SK 下層から出土した井戸材 10 点である。剃刀を用いて試料の３断面（横断面・接線断面・放射断面）から切片を採取し、ガムクロラールで封入してプレパラートを作製した。これを光学顕微鏡で観察･同定し、写真撮影を行った。

3. 結果

同定の結果、針葉樹のコウヤマキとヒノキの２分類群が確認された。木取りは柾目と角材もあるが､板目が最も多い。結果の一覧を表１に示す。

以下に、同定根拠となった木材組織の特徴を記載し、光学顕微鏡写真を図版に示す。

(1) コウヤマキ Sciadopitys verticillata (Thunb.) Siebold et Zucc. コウヤマキ科 図版１ 1a-1c(No.1)、2a-2c(No.3)

仮道管と放射組織からなる針葉樹である。早材から晩材への移行は比較的緩やかで、晩材部の幅は狭い。放射組織は単列で１～15 細胞高であるが、一般に５～６細胞高以下で低い。分野壁孔は窓状である。

コウヤマキは福島県以南の温帯から暖帯上部に生育する常緑針葉高木である。耐朽性・耐湿性が強く、強靱である。

(2) ヒノキ Chamaecyparis obtusa (Siebold et Zucc.) Endl. ヒノキ科 図版１ 3a-3c(No.8)

仮道管、放射組織、樹脂細胞からなる針葉樹である。早材から晩材への移行は緩やかである。樹脂細胞は主に晩材部に接線状に配列する。分野壁孔はトウヒ型～ヒノキ型で１分野に２個存在する。

ヒノキは福島県以南の温帯から暖帯に分布する。材は加工容易で割裂性は大きく、耐朽性・耐湿性は著しく高く狂いが少ない。

4. まとめ

コウヤマキ、ヒノキともに山地に生育する常緑高木である。本遺跡は低地に立地するため、近隣の山地から持ち込まれた材である可能性が高い。また、材質は両者とも耐朽性・耐湿性に優れており、木理直通で割裂性が大きいため、加工も容易である。特にコウヤマキは耐水性に極めて強いため、長期間水湿にさらされても腐りにくく、棺や柱材など土中での利用や、桶類など水場での利用が多くみられる（伊東・佐野他，2011）。本遺跡の井戸枠への樹種利用傾向も、水場での利用に適した材質を選択利用した結果と思われる。

引用文献

伊東隆夫・佐野雄三・安部久・内海泰弘・山口和穂（2011）日本有用樹木誌．238p，海青社．

表４　樹種同定結果一覧

試料番号	調査区	グリッド	遺構	樹種	木取り
1	09A	7D13n	018SK下層	コウヤマキ	柾目
2	09A	7D13n	018SK下層	コウヤマキ	板目
3	09A	7D13n	018SK下層	コウヤマキ	角材
4	09A	7D13n	018SK下層	コウヤマキ	板目
5	09A	7D13n	018SK下層	コウヤマキ	板目
6	09A	7D13n	018SK下層	コウヤマキ	板目
7	09A	7D13n	018SK下層	コウヤマキ	板目
8	09A	7D13n	018SK下層	ヒノキ	板目
9	09A	7D13n	018SK下層	コウヤマキ	板目
10	09A	7D13n	018SK下層	ヒノキ	板目

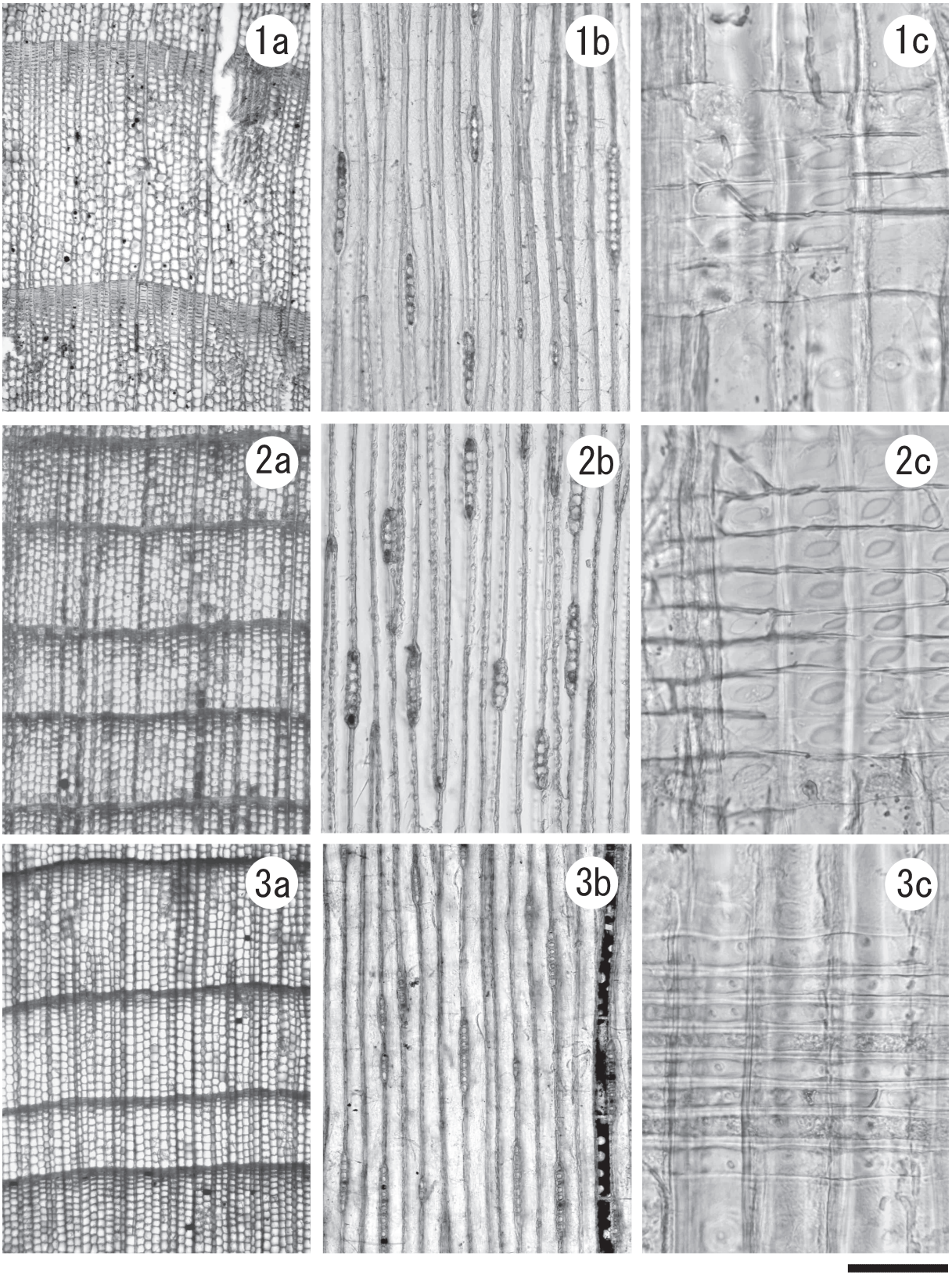


図 50　日置本郷 B 遺跡出土木製品の光学顕微鏡写真

1a-1c．コウヤマキ（№1）、2a-2c．コウヤマキ（№3）、3a-3c．ヒノキ（№8）

a:横断面（スケール=500μm）、b:接線断面（スケール=200μm）、c:放射断面（スケール=50μm）

第5章　総　括

最後に、遺構と遺物の報告についてまとめたい。

1．遺構の変遷（図51）

今回の調査区の地形は、09Ab区から09Ac区付近と09Ba区から09Bc区付近に遺跡基盤層の高まりがみられ、古代から中世の遺構群が確認された。09Ab区から09Ac区付近を挟んで、北側の09Aa区において、古代からつづき中世後半期に埋没していく自然流路002NRが北東から南西方向に流れ、南側の09Ad区では古代から近世に存在した谷地形の096NR が東西方向にはしる。この096NRの南にある09Ba区～09Bc区において古代から中世の遺構が認められる。そして、南にある09Ca区から09Cf区にかけて北から南に緩やかに低くなる地形が想定され、古代から近世の遺物が出土している。

遺構の変遷については、古代の可能性のある遺構が09Aa区の南側から09Ac区と09Bc区においてある。特に09Ac区において柱の沈み込みを防ぐ機能をもつ根石がみられる柱穴025SKと049SKがみられ、建物や柵列の跡の可能性があり、今回の調査区における中心的施設と思われる。また09Ab区の059SK、067SK、069SK付近にも古代の可能性のある遺構が分布する。また09Bc区において平安時代前半の時期が推定できる002SKがみられ、内湾に生息するマガキ・ハマグリと汽水域に生息するヤマトシジミなどの貝類が出土したのは、09A区のほぼ全域において出土した製塩土器の存在とともに本遺跡の営みを特徴づけるものと思われる。

中世前半期は、遺物は比較的多数出土するが、宋銭が出土した09Ab区の014SK・015SK、073SK、09Ac区の043SKがあるのみである。09Ab区014SK・015SKは墓坑の可能性が高く、銅銭の出土位置からは中世後半期の可能性もある。

中世後半期は多数の遺物が出土しており、多数の遺構が確認された。特徴的な遺構としては、北側の09Aa区の002NRの南側では、大型ほ乳類の骨が出土した005SKと同様な形態の003SKがみつかっており、この部分に中世前半期からつづく墓域が推定できる。次に09Ab区では095SBが確認されており、付近に056SK、060SK、068SK、074SK、075SD、082SKがあり、多数の遺構変遷が想定され、その南側に中世後半期に埋没する09Ac区の018SE、044SK、046SK、047SKがみられる。この遺構群の南側に北北東から南南西にのびる区画溝041SDと035SDが二条平行して確認され、溝で区画された西側が遺跡の生活域の中心部分と想定される。そして溝の東側においても09Ac区019SK、020SK、029SK、030SKがみられ、生活域の区画が存在したものと思われる。この中で16世紀にかかる大窯期の遺構と考えられるのは018SEと074SKである。

続く16世紀後半から江戸時代前半の遺構・遺物はほとんどなく、近世の遺構・遺物が確認できるのは18世紀後半のものである。北より09Aa区001NRが近世まで流路として残り、その南に09Ab区054SKがみられる。また南側ではほぼ埋まりかけた096NRの北側肩部で017SDが、南側縁辺部にて094SDが掘削されている。

2．遺物の出土分布傾向（図52）

本遺跡の出土遺物を整理するにあたり、各出土地点毎の遺物の器種毎の点数を大まかにカウントし、グリッド単位にその出土傾向を分析したものが図52である。出土遺物には古代の須恵器から近世の陶磁器や土師器、近代の陶磁器まであり、出土した遺物の主体を占めるのは、古代から中世後半期にかけての遺物であった。また比較的狭い範囲の調査区であった09Ba区～09Bc区、09Ca区～09Cf区においても、出土量の違いはあるものの09A区と同様の種類の遺物が出土していることが特徴である。

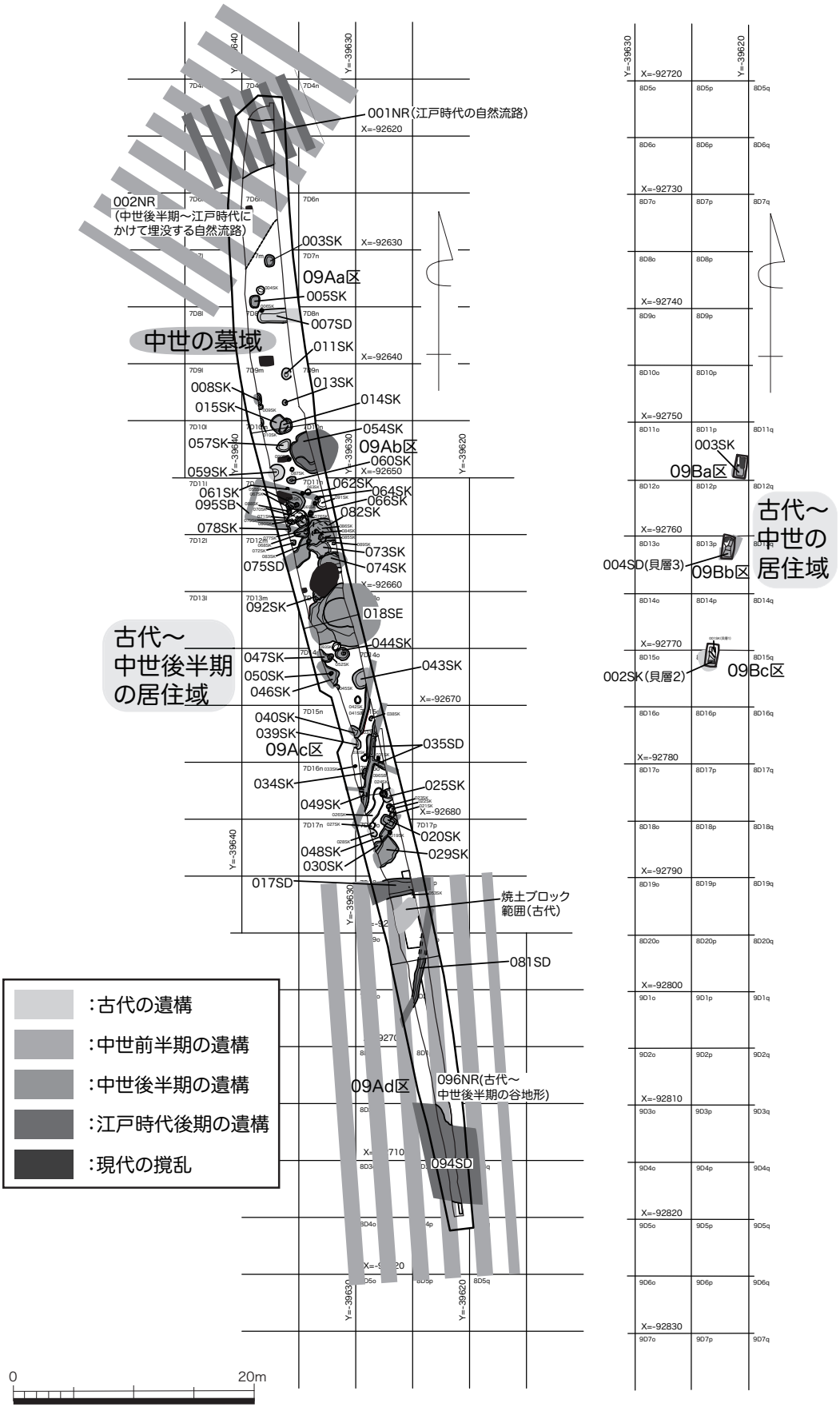


図 51　日置本郷 B 遺跡の遺構変遷（1/500）

図52　日置本郷B遺跡の遺物出土分布（その他の「緑」：緑釉陶器、「塩」：製塩土器、「土」：土錘、「青」：青磁、「白」：白磁、「瓦」：中世瓦、「丸」：陶丸）

調査区	グリッド	須恵器	古代土師器	灰釉陶器	南部系陶器	北部系陶器	中世土師器	古瀬戸陶器	常滑産陶器	大窯期陶器	近世陶磁器	近世土師器	その他	備考
09Aa区	7D4l,m,n	▲▲	▲		◆▲	▲	◆	▲	●▲		◎1			001NR
	7D5l,m,n	●▲▲▲	◆●▲▲▲	▲▲	★★●▲▲	★◆▲▲▲	★◆▲▲▲▲	●●▲	●▲▲					001NR·002NR
	7D6l,m,n	◆●●●▲▲▲	★★★●●▲▲▲▲	●●▲▲▲▲	★★★★★★●●▲▲	★★◆◆●●▲▲	●●▲▲▲	▲▲	●●▲▲▲		▲		緑青白土土	002NR
	7D7l,m,n	★★◆▲▲▲▲▲▲▲	★★★★★◆◆●●●▲▲▲	●●▲▲▲▲▲	★★★★◆◆●●●▲▲▲▲	★★◆◆●●▲▲▲▲	●●▲	▲▲▲	●●▲				緑緑白塩土	003SK·005SK
	7D8l,m,n	★★◆●●●●▲▲	★★★★★◆●●●▲▲▲▲	★●▲▲	★◆●●●●▲▲▲▲	●●▲▲▲▲	●●▲▲▲▲	▲	●			▲▲	塩土	
	7D9l,m,n	◆●●▲▲	★★★●▲▲	◆▲▲	★★★▲	★★●▲	★◆●▲		◆			●▲	白土土土	
09Ab区	7D10m,n	★★◆●▲▲▲	★★◆●●●●●▲	●●▲	★★★▲▲▲	★★★▲	★★◆▲		●				緑土土	014SK·015SK
	7D11m,n	★★●●●▲▲▲▲▲▲	★★◆●●●●●▲▲▲▲	◆●●▲▲	★★★▲▲▲▲▲	★★◆●●▲▲▲	★★◆◆●●▲▲▲	●▲▲	●▲▲	▲▲			緑青青白瓦瓦土土	095SB
	7D12m,n	★★◆●●●▲▲	★★★★●●●▲▲	◆●▲	★★★★●●▲▲	★★★◆●●●	★★◆◆●●●▲▲	▲▲▲	▲▲▲	▲▲		▲	青青土土	074SK
	7D13m,n,o	★★◆●●●●▲▲▲	★★★★★★★★●▲▲	●●▲▲▲▲	★★★★★★★◆◆●●▲▲	★★★★◆◆●●●▲▲	★★◆◆●●●▲▲▲	▲	●●▲	▲		●	緑青青塩瓦土土土土土丸	018SE
09Ac区	7D14n,m,o	★★◆◆▲▲	★★◆◆●▲▲▲▲▲	●●▲▲	★★▲▲▲▲▲	★★●▲	★★★◆▲▲▲▲			▲		▲	瓦瓦	
	7D15n,o	●▲▲▲	●●●▲▲▲	◆●●▲▲▲	●●▲▲▲▲	●▲▲▲▲	●●▲▲▲▲	●●▲	▲				瓦瓦瓦	041SD·036SD
	7D16n,o	★●●▲▲▲▲	★●●▲▲▲▲▲	★★●▲▲▲▲	★★●▲▲▲	★▲	★●◆●▲			▲			青塩塩瓦	025SK·049SK·036SD
	7D17o,p	★★●▲▲▲▲	★★◆●▲	★●▲▲▲	●●●●●▲	●●●●▲	●●●▲▲▲	▲	▲	▲●		▲	青土土丸	
	7D18o,p	★★★◆●●●▲▲▲▲	★★★★★◆●●▲▲▲▲	★★◆▲▲▲	●▲▲▲	●▲	●▲	▲	▲			▲▲	白白塩塩塩

もう一つの近世陶磁器の出土傾向は、本遺跡における人々の営みが一つや少数の極に集中するのでなく、散在的・均等的に遺物が出土する傾向と同様に、均等化した営みが散在的に行われたことを反映するものと考えられる。

3．日置本郷 B 遺跡の特徴

最後に、以上の分析をふまえ、本遺跡の調査から考えられる特徴を述べたい。

遺構は古代から中世後半期までと近世後期のものに主に分かれ、古代から中世後半期の遺構は大窯期にかかる 16 世紀前半まで確認できる。古代～中世後半期の中では、中世後半期の遺構が多く、この時期には多くの変遷が推定できる。その遺構分布は中世後半期において 09Ab 区から 09Ac 区を中心に多数存在し、周辺にかけて少なくなる。この傾向は遺構が少ないものの、古代や中世前半の遺構にも窺われ、出土遺物の分布傾向からも同様な結果を得ることができ、中世後半期の遺跡の終末期である大窯期の陶器の分布にはよりこの傾向が強くみられる。そして近世の陶磁器が均等で散在して出土する傾向は、ほぼ 09A 区に散在して分布する近世の遺構とも対応する。

では、このような古代から中世後半期と近世後期の遺構・出土遺物の分布傾向の違いが起こる要因は、何であろうか。まず考えられるのは、古代から中世後半期の遺構・出土遺物の分布傾向が、古代から中世後半期にかけて存在する 09Aa 区 002NR と 09Ad 区 096NR にみられる遺跡の自然地形の起伏から強い影響を受けて起こる現象と考えられる点である。反対に近世後期の遺構・出土遺物の分布傾向は、中世後半まで存在した自然流路が埋没し、溝などの掘削により、人為的開発が進んだ結果、自然地形の起伏からの影響が少なくなった、あるいは自然地形の起伏を利用した土地利用が進んだものと考えられないであろうか。

よって、当遺跡の中心となる古代～中世後半期の人々の営みは、遺跡の調査で見つかった自然流路などに見られる自然地形の起伏に強い影響を受ける営みが推定され、その影響を考える一つとして、遺跡から発見された内湾から汽水域に生息する貝殻の存在が指摘できる。つまり本遺跡が貝類利用にみられる汽水域に近くにあり、遺跡の遺構面がマイナス 1.8m 付近であることから（註 1）、比較的地下水位が高いために、自然地形にみられる起伏から強い影響をうける環境におかれていたものと考えておきたい。

（註）

註 1　加藤　秋 1996「第七章　現代」『佐屋町史』佐屋町史編纂委員会によると、現在の日置八幡宮の南側に位置する水準点について、昭和 47 年 11 月の標高は−0.930m となっており、その後平成 5 年 11 月までに同地点の水準点は 0.3926m 地盤沈下が進んで標高−1.3226m となり、現在の都市計画図上に記載された標高は−1.30m と表示されている。また、『佐屋町史』第七章　現代に示される図 56 地盤高図（昭和 35 年 3 月結果）によると、愛西市日置町の日置八幡宮付近の標高は標高 0 m より高く、標高 0.5m よりは低い範囲にあたり、標高 0.2m ～ 0.3m 前後であった可能性が高い。本センターが発掘調査を実施した平成 21 年 12 月の記録では、調査区の地表面上面の標高は−1.0m ～−1.1m 前後にある。よって、昭和 35 年 3 月時点の標高より−1.3m 前後、地盤沈下している可能性が高く、尾張地域の工場用・建築物用井戸の掘削が盛んとなる大正期より古い時代に比べると、標高が−1.5m 以上は低下しているものと考えられる。